
IS ～インフィニット・ストラトス～ こんなんで大丈夫か？

Shine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〜インフィニット・ストラトス〜 こんなん
で大丈夫か？

【Nコード】

N1763X

【作者名】

Shine

【あらすじ】

オリ主の鷹野慎二はいきなり死んでIS<インフィニット・ストラトス>の世界に転生することになった。転生先の世界で、ラブコメ起こしたり、修羅場起こしたり、IS動かして騒動になったりなど あれ？面倒なことしか起きてない！？ ともかく頑張って生きていく生き様を描く物語です。

あと、ノリと勢いで始めた初作品なのでひどい出来となっていますがそれでも良い方はどうぞご覧ください。

はあ、いきなり何がおきたんだ？

目が覚めるとそこは知らない場所だった。

（一体ここはどこだ？）

そこは一面が白くどこまでも続いている気がした。おかしいことに空も存在しない、まさしく白の世界だった。

（とりあえず立つか）

こんな状況でも不思議と酷く落ち着いていた。

「お、やっと起きたか」

どこからともなく現れたのは、絵画で良く見るような神の格好をした男だった。

（誰だこいつ？あれなのか、俺は神様だぞえっへん、とかやるコスプレしてる変態なのか）

「おいおい、酷い言いようだな。それと、コスプレとかじゃなくて本職な」

（ああ、自分の事神様だと信じてる痛い子か・・・そいや、何かのラノベにもいたな・・・）

「だから、本職だって言ってるんだろ！！」

（ん、てか何でこいつとの会話が成り立ってんだ？）

「だから神様だから、お前の心が読めんの」

「俺のプライバシーはどこに行った、コノヤロー！」

「いきなり何叫んでんだよ……調子狂うな……」

ふむ、本気で困ってるな。そろそろ真面目に話すか……

「で、神様やい。何しに出てきた」

「神様って知っても、上から目線からかよ……俺の方が上なの
に」

ん、小さい声で何かしゃべってんな

「まあ、いいや。とりあえず結論から言うとお前は「死んでる、だ
ろ？」死んで……ああ、今回は記憶が残ってんのね」

少し嬉しそうに言ったのは何でだ？

「さっさと本題に入れるな……その前にすまん」

神がいきなり頭下げてきた。

「は？」

「今回お前が死んだのは俺の部下の失敗から生まれた事故なんだ」

「・・・・・・・・・・」

「部下に失敗で意味も無く死んだお前にちよつと詫びとしても一回人生歩ませてやる」

「とりあえずいいか？」

「ん、何だ？」

俺は、息をすうつと吸って

「そんな理由で俺を殺すなああああああああああああああ
あ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そこでいままでの不満をぶつける

「あのあと、家に帰って買ってきたラノベ読もうとおもったのに！
しかも9ヶ月ぶりの新刊だったのに!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「だったら、そのラノベの世界に転生させてやるか？」

「だいたいなあ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!え？」

ナニイツテヤガンダコイツ？

「いや、お前俺の話聞いてた？」

「いや、聞いてたけど・・・・・・・・そんなことできんの？」

「できるも何も、俺は神だぞ？不可能は無いに等しい！」

「無いとは言い切らないのな」

「う．．．そこは触れないでくれよ！．．．！」

「だったら不可能って何なんだ？」

「無視かよ．．．．．まあ、いいや。例えばだ、お前が元々生きていた世界には転生できない」

「ああ、なるほどな．．．同じ世界に同じ人間がいたら可笑しいもんな」

「．．．．．お前、ほんとに高校生だったのか？物わかりというか．．．．．」

神がなぜか黙ってしまった。理由かあ．．．

「まあ、ラノベに似たような奴あったからかな」

「．．．まあ、この話は終わりだ」

終わりって．．．．．せつかく空気読んで話したのに．．．．．

「そこ、黙らっしゃい。ええと、お前が死ぬ前に持ってたラノベは．．．．．」

俺しゃべってないのに．．．．．

「小さいことにすんな．．．．．お、あったった」

俺が死ぬ前に持ってたラノベって・・・・・・・・あれ？なんだっけ？

「頭打って死んだから、記憶があやふやなんだろう？まあ仕方ないな」

ええと、伝○伝じゃないし、い○天じゃないし・・・・・・・・あ！

「そうだ！IS<インフィニット・ストラトス>だ！！！！！」

「お、思い出したのか。話進めるけど、何か能力欲しいか？」

「能力かあ・・・・・・・・ISは動かしたいな」

「ん、あとは？」

「そうだなあ・・・・・・・・一夏たちと幼馴染にしてくれ」

「了解した、あとはチートとしてある程度身体能力上げとくな・・・・・・・・性別は男っ」と

何かいきなりぶつぶつと一人で話し出した。すると、俺の周りに光が浮いて集まってきた。

「これは？」

「まあ、転生の準備ってとこかな」

「へえ、そんなのあるのか」

「まあ、いろいろあんだよ。っと、準備が整ったな。」

「ついにI Sの世界に行けるのか」

「あっちの世界行ったら一切こちらかの干渉はないと考えていてくれ」

「分かった、とりあえずありがとう」

「いって、こっちが悪いんだし」

ケラケラと笑いながら言った。

「じゃあな」

「もう会うことはないだろうけどな」

「ははっ、たしかに」

俺は今までにないくらいで清々しい気分で迎えていた。しかし・・・

「・・・え？」

俺は、間拔けな声を出してしまった。だって仕方ないだろう？いきなり下に穴が出来たんだから

「消えるとかそうゆうのじゃないのかよおおお!!!!!!」

「今まで、俺のことからかった罰だ☆」

こっちも清々しい位の笑顔だった・・・

「ふざけんなあああああああああ・・・」

このように異様に不安な門出だったがおれはISの世界に転生するのであった。

「だぶう、ばびゅばぶだだだ（ちくしょう、無理矢理にでもあつちに干渉して復讐してやる）」

転生した先、赤ちゃんになっていたことに驚くよりも前に神への復讐を誓うのだった・・・

しばらくしてから

「だ!?!ばぶびゅびゅぶぶ!?!（あれ!?!おれ赤ちゃんになってる

し!?)」

・・・普通、逆じゃないのかオリ主よ

はあ、いきなり何がおきたんだ？（後書き）

いかがでしたか？誤字脱字などがありましたら、コメント欄にて報告お願い致します。

うーん、これはなかなか・・・（前書き）

色々酷い出来となっていました・・・

「あなた、だあれ？」

うおい、なんだこの可愛い生物は！！！！！！と言っても、俺が知ってるのはIS学園に入学した簪しか知らない訳だからなあ。子供は誰しも純情ってことか。

「僕？僕は鷹野慎二って言うんだ」

「知らない子だあ」

「そうだけどさ、友達になってくれない？」

「いいよお」

ぱあっとした笑顔で言ってきた。うごおああああ。何これ超カワイイ！！！！！！！！！！

「じゃ、遊ぼう！！！！僕のことを慎二って呼んでね」

「うん、分かった、慎二」

少し経って、分かったことだが簪は楯無さんが大好きみたいだ。ん、でもまだ当主になってないから楯無ではないのか……。うん、まあ放っておこう。

その日はあと弾と一夏と、箒と友達になった。まあ、みんな同じ保育園だったわけだ。でも、弾の家は少し遠いなあ。なにせ、この近くに保育園とか幼稚園はここしかないから仕方ないらしい。

こんな、感じで保育園時代は過ぎていったはずだったが、卒園式の日に簪からびっくりする発言が聞こえた。

「慎二」

「ん、簪か。どうしたそんな悲しい顔して。悲しいことでもあったのか？」

「うん、私ね引越しするの。遠くに」

と、泣きながら言ってきた。それにはいろんな意味でびっくりしたわけだ。いきなり泣き出すし、しかも引越して………。仲のいい友達と離れるのは悲しいな………。

「そんなに泣くなよ、簪」

「だってだって………」

うーん、仕方ないなく恥ずかしいけどいるまでも泣いている子もほっとけなしな

「簪、また会えるって」

「ほんと……?」

やべえ、可愛い……

「ほんとほんと。あ、そうだこれあげるよ」

と言って、俺はポケットから青い石を取り出した。

「きれい・・・・・・・・」

「そうだろ、なんたってこれは俺の大のお気に入りなんだ。だから、寂しくなったらこれを見て俺も思い出せ、な？」

「うん、わかった・・・・・・・・ねえ、慎二」

「ん？」

「次会う時までに私が慎二のこときちんと覚えていたら、・・・・・・・・
・・・お嫁さんにしてくれる？」

「ああ、いいよ。簪みたいなかawaii子だったら大歓迎だよ」

「可愛い・・・・・・・・えへへ♪」

そんなひと騒動あって俺の保育園生活が幕を閉じた・・・・・・・・
・・。簪に行った言葉が後に大変な事態を招くことはまだ知らない・・
・・・・・・・・

うーん、これはなかなか・・・（後書き）

やっちゃまった感満載、まさかの簪ちゃん登場でした

こんなんでやっていけるのか・・・？

もう少しもう少しで・・・(前書き)

- ・ うーん、今回も何か説明みたいな文になってしまいました。
早くIS学園に入学させたいがために大分省力してしまいました・

もう少しもう少しで……………

まあ、時系列から行けば今は小学校だわな。まあ、実際そうなんだけど。小学校に入ってから弾と簀が居ないから一夏と簀と一緒にいた。弾は別な小学校に通っていた。

小学生になったから、簀の家の道場で剣道を習い始めた。まあ、ここで俺のチートな身体能力発揮ですよ。というか、やっぱりチート酷い。

小学2年から始めたんだけど、その時点で身体能力は中学生くらいあった。な？この時点でおかしいだろ？あの、神を酷い能力くれたもんだよ。しかも、剣道習って2年目に全国優勝しちゃったし……。みんな、「天性の才能だね」とか「天才だ……」とか色々酷かったよ。そんな訳で天災の束さんにも目を着けられるし……。はあ、不幸だ……………。

そんな、悶々としたまま過ごしているとある事件が起きた。まあ、みんな分かるだろうけど「白騎士」事件ね。まあ、ISが世間に出たから簀は引越しをした。まあ、多分フラグは一夏にたっただろう。たまに、熱っぽい目で見えていたし。時たま、アプローチするとき俺が協力したりしたから確実だろう。

まあ、次の年は鈴が転校してきたよ、当たり前だけど。でもって、一夏と鈴がいきなり喧嘩した。殴り合いになる前に俺が止めたんだが、ちようどいいくらいに丁度二人とも殴ろうとした時に止めたから両頬にパンチが来て、俺は気絶した。そしたら、どうしたものか次の日には二人とも仲直りしていた。そして、俺に謝ってきた。素直な子は兄さん大好きだぞおっって言いながら二人に抱きついたら殴られた……。なんでだ……。そんな感じで小学校は終わった。

中学校の入学式に懐かしい奴と再開した。弾だ。俺は覚えていて当たり前だが、弾が覚えていた理由が「同い年に見えなくて、浮いたから」だよ。妙に納得したんだけどな。それからは弾と鈴と一夏と俺の4人でよくつるんでいた。

鈴の家に行ったら、料理屋だったし（俺はただ忘れていただけ）、たまに一人で客として行くとか何故か婿宣言されたし。まあ気にしては居なかったんだけどな。そして、中学2年の終わりに鈴が中国に帰った。まあ、ここは知っていたからまた会えるさと言って送り出した。

そういえば、あれだな、鈴が中国に帰る前に放課後呼び出され「料理が上達したら、毎日酢豚を食べてくれる？」と言われた。あれ・

・、俺フラグ立てたっけと思考し、心当たりがなかったから、おごってくれるのだと思った。そのとき俺は「毎日酢豚だったら胃もたれしちまうな」と言ったら「酢豚じゃなくてもいいから、私の料理食べてくれる」って必死に言ってきたから、「当たり前だろ」って言っちゃった。凄く嬉しそうにしてたな・・・。あん時の鈴は可愛かったな・・・。っは！？何言ってるんだ俺！？しかし、なんでかな俺の周りの女子は引越しばかりするなあ。寂しいったらありゃしない。簪しかり、箒しかり、鈴しかり・・・。

ともかく鈴は中学2年の終わりに帰ったから、中学3年は受験勉強してたな。特に、俺は困らなかったが弾と一夏が危なかった二人に勉強教えていた。俺と一夏は早く自立したかったから藍越学園に受験することに決めた。弾は頭に来るからもう1ランク下の高校を受けた。俺は、その時忘れていた。神から貰った能力「ISを操縦できる」を・・・。それが惨事に繋がることはおれはまだ知らない・・・。

もう少しもう少しで・・・・・・・・（後書き）

すいません、まじすいません。

酷いできなのはわかってます。

俺の文才の無さを呪ってください。

そして、多分次からIS学園に入学できます！！！！

変にフラグ立てて、回収できなくなったらどうしよう・・・・・・・・

来たぜIS学園!!!! だけどこいつは……………

俺の高校生活が始まった。だが、ある意味これは……………辛い。え？何で辛いかって？そりゃあ、俺と一夏以外は女子なんだ当たり前だろ。しかも、一番前の席という特典付き。わーい、うれしーな、なんて言うと思うか？背中に突き刺さるのは視線視線視線視線視線視（ry。背中に穴が開くんじゃないかってくらいの視線しかない。しかし、原作では一夏はこの状況で一人だったのか……………。うわあ、死ねるな。

「あ、皆さん全員そろってますね。それではSHRを始めます。」

と言って、教室に入ってきたのは山田麻耶先生だ。原作から思ってたんだが、この人は本当に日本人か？緑髪の日本人なんているのか？

「みなさん、1年間よろしくお願いしますね」

誰も先生の話聞いていない。というか、せめて俺らを見ないで先生を見てやれよ。先生困ってるじゃないか。

「うう……………で、では自己紹介をお願いします。出席番号順をお願いします」

うん、先生がんばった。褒めてあげたいよ、ほんとに。ってか、一夏は大丈夫なのか？さっきから、汗がダラダラ出てるけど……………。って、次一夏じゃん。ああ、あの調子じゃ気づいてないな。

「織斑くん、織斑一夏君」

「は、はい!？」

って、声が裏返ってんじゃない。大丈夫か? あいつ…………

「えっと、織斑一夏です。…………よろしく願いします」

周りの女子からは「え、何? それで終わり?」みたいな視線が一夏に集中している。うーん、思ったんだけど自己紹介なんてそんなモンだと思っただよな。実際俺は、中学そうだったし。お、一夏がなにか言うか?

「えっと…………以上です!」

ズサーーーー!!! うん、そのリアクションは間違っないぞ。溜める必要あったのか? 変に期待するだろ。ってあれ? 千冬さんだ。お、出席簿を振りかぶって…………スパーン!!!! 叩いたく!!!! ん、何かこっちに…………スパーン!!!! ……うごあああああ…………威力2割増しじゃね?

「なんで俺まで……………」

「なに、失礼なことを考えてる気がしたのでな」

「暴力で解決するのはどうかと思いますが」

スパーン!!!!!!!!!!!!……………更にさっきの2割増し……………

「…………せめてもうちょっと手加減して」

「大丈夫か、慎二？」

ほらみろ、一夏までこっちの心配してるじゃないか。そんなことより……

「すまん……ちと休ませてくれ」

頭が、すげえ痛い。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たちを1年で使い物にするのが私の仕事だ。私の言うことをよく聴き、よく理解しろ。出来ないものは出来るまで指導してやる。私の仕事は若干15歳を16歳までに使い物にすることだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

うわあゝ、酷え横暴だなあゝ。こんな先生で他の女子もかわいそ……

「キャーーーーー！！千冬様、本物の千冬様よ！！！」

「ずっとファンでした！！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて幸せです！！！」

「私、千冬様のためなら死ねます！！！」

うごおああおおおおお……黄色い声が頭に響く……

「毎年毎年、よくバカ者共が集まるものだな。感心させられる。それともなにか、私のクラスにだけ集めているのか？」

うゝん、本当に呆れているな。てか、そろそろ頭限界なんだが……

「おい、お前ら。静かにしろ。一名瀕死になっている」

俺は、もうピクピクしてたよ。意識が薄くなってたし。しかし、助かった。もう少し続いてたら気絶していた。

「で、お前は満足に挨拶もできんのか？」

「いや、千冬姉、俺は……」

ゴンっと、一夏は頭を机に押し付けられていた

「織斑先生だ」

「……はい、織斑先生」

あーあ、一夏のアホ。わざわざクラスのやつに千冬さんと姉弟だつてばらすことないのに……

「ほら、次は鷹野。お前だぞ」

「つて、少しは休ませてくださいよ……」

「いいから、さっさとやれ。ただでさえ、時間が押しているんだ」

「わかりましたよ……。えーと、鷹野慎二です。ISについては初心者同然なのでよろしくお願いします」

そんな感じで自己紹介は終わったさ。異様に疲れたけどな。

そいや、IS学園の女子ってレベル高くな？ (前書き)

タイトルは関係ありません。

そいや、IS学園の女子ってレベル高くな?

「ふう、やっと1時間目終わった」

あの自己紹介のあとはISの基礎理論の授業をやった。主な内容は、あのタウ○ページみたいな分厚いISの単語やら色々書いてあった本の確認みたいなことをした。まったく問題なく授業は終わったんだが、未だに視線に慣れないな。そういえば、この世界の俺の頭は結構ハイスペック仕様になっている。あの分厚い本も何回か読んだら内容はある程度入ったしな。てか、これって絶対神の仕業だよな。ま、便利だからいいか。

「う……。全然わからなかった。なあ、慎二お前分かったか？」

「分かったかって……。お前、あの分厚い本どうしたんだよ？」

「……。電話帳と間違って捨てた。」

「ははは、お前らしいな」

「笑うなよ、こっちは大変なのに。そいや、お前って昔から勉強出来たよな。」

「勉強出来たって言っても、あれは毎日の継続があったからそうだったただけぞ。お前はたまにしか勉強なかったろ。」

「確かにそうだけどさあ」

ん、そういえばここで何かイベントがあった気が……

「・・・・・・・・・・・・・・・・ちよつといいか」

ああ、そうか箒が話しかけてくるのか

「おい、一夏行ってこいよ」

「いや、お前に話があるんだが・・・・」

俺は箒に顔を近づけて

「おい、箒。一夏と二人になるチャンスだろ。俺を呼ばないで一夏に話しかけろよ。」

「そういう意味で話しかけた訳じゃないのだが・・・・・・・・いいから来てくれ。」

そう言うのと、箒は俺の手をとって強引に教室のドアに歩き始めた。てか、この体勢は・・・・

「ちよつと待て箒！！このままじゃ転ぶ！！！！！」

いきなり後ろ歩きで歩かされたらなあ・・・・。しかも結構早いし。

「む・・・・・・・・すまん」

俺は一回手を離して、体勢を直した。箒がもの惜しそうに手を見ていた。何でだ？とりあえず、俺は箒の手を取って教室を出た。

「時間無いからここでもいいか？」

「うむ・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

あれ？何か話があるんじゃないかなかったの？この沈黙は何？

「慎二・・・・・・・・」

「ん？何だ？」

「・・・私の事覚えていてくれたのだな。」

「いや、当たり前だろ。それとも、忘れていて欲しかったか？」

「そうではない！！！！覚えていてくれて嬉しかった・・・・・・・・」

「だったらいいじゃん。」

「そうだな・・・・・・・・」

こころなしか箒の顔が赤い気がする。風邪か？あ、そういえば

「そういえば箒、去年剣道全国大会優勝したんだってな。おめでとう」

「どうして知っているんだ」

「どうしてって……新聞に書いてあったんだけどな」

「どうして新聞なんか読んでいる」

「いや……箒って剣道強かっただろ？だから何かしら剣道関係で名前載ってないかって見てたんだよ。そしたら案の定書いてあったってわけだ。でも、全国優勝でお前の名前見るとは思わなかったから結構びっくりしたんだけどな。」

「……剣道初めて2年目で全国優勝したお前に言われてもな」

「そんなこと言うなって。人がせっかく褒めてるのに……」

「……そうか褒めているのか」

「放課後剣道するか？お前がどのくらい強くなったか見たいし」

「いいのか？」

「お前がよかったら俺はいいんだけどな。暇だし」

「だったら頼もう」

「うし、だったら放課後よろしくな」

「うむ、それはそうとそろそろ授業が始まると思うのだが」

「マジ？だったらさっさと戻ろうぜ」

懐かしいやつと再開をはたし俺は教室に戻った・
・
・

そいや、IS学園の女子ってレベル高くな？（後書き）

うーん、なんかやっちゃった感が……
一夏のヒロインどうしましよ？

何でこうなった……

「ちょっと、よろしくて？」

一夏がパツキンの女に話しかけられていた。な～んか、悪い予感……。よし、ここは他人の振りを……。

「あなたもでしてよ」

ですよね～。はぁ……。たまには遊ぶか……。

「それで何かごようですか？お嬢さん」

「あら、あなたはなかなか対応がなっていますね」

「いや、ただの遊びだから」

「っ……。まあいいですわ」

何か勝手に納得したらしいな……。ふうめんどくさい……。

「てか、おまえ誰？」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして入試主席のこのわたくしを？」

お～、セシリーだったのか。まあ、一夏に落ちるまではただのウザイ女だよな～

「なあ慎二だ「代表候補生が何かって聞きたいのか？」う・・・」

「まあ、代表候補生ってのはオリンピックで言う国の代表みたいなもんだ。簡単に言うんだけどな」

「へー、さすが慎二は物知りだな」

「物知りって・・・これは結構一般常識だぜ？」

「ちよつとこ「常識って言ってもISについてはほとんど皆無だからな」」

「おまえは関心がなさすぎだ。っと、オルコットさん話がそれだな」

「・・・・・・・・」

うん？何か青筋やら色々ヒクヒクいつてんな

「・・・・・・・・まあ、入試で教官を唯一倒した私がISのことを教えてあげてもよろしくてよ？」

ほー、教官を倒した。なるほどなあ、やっぱり強いわけだ。でもなあ何かこの態度、去勢を張っている感じしかないな。確か、原作でも触れていたような・・・・・・・・まあ、そのうち思い出すだろ。

「教官なら俺も倒したぞ？たしか慎二は相打ちだっけ？」

「ん？まあな、千冬さんだったしなあ。相打ちにもっていっただけ褒めて欲しいもんだ」

あれは怖かった・・・だって千冬さん結構本気なんだもの。なんか、子供の時の恨みをなんとか、って叫んでたし・・・恐怖と生き残るために必死だったからあんま聞こえなかったけど・・・

「・・・あなたも教官を倒したっていうの？」

「と言ってもよけたら勝手に壁にぶつかったんだけどな」

「私だけだと聞きましたけど」

「女子だけではってオチじゃないか？」

キーンコンカーンコン。おお、ナイスチャイム。めんどくさくなるまえに終わった。すると、千冬さんと山田先生が教室に入ってきた。千冬さんは教壇に立った。

「ではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」
特性ね。基本は近距離、中距離、遠距離でいいんじゃないかな。あとは聞き流しとこ。

「ああ、先に再来週のクラス対抗戦にでる代表者を決めないとな。なに、クラス代表と言ってもいままで言うクラス委員長と考えてくれて構わない。一度決まると変更は効かないからそのつもりで」
へへ、とりあえず面倒くさそうだから俺は関係ないって・・・

「はい、私は織斑君を推薦します！」

一夏がんばれ！俺は傍観してるから。さてと、寝るか・・・

「私は鷹野君を推薦します！」

ん、なんか幻聴が聞こえたような・・・まあ、気のせいだろ。

「では候補者は織斑一夏と鷹野慎二の二名、自薦他薦は問わんぞ」
って

「「俺え!？」」

スパパ！ン！！！！うごああああ・・・やっぱ一夏より俺の方が威力が高い・・・

「うるさいぞ、馬鹿者共」

「って織斑先生、もうちょっと手加減してください・・・」

「さて、他は居ないのか？居ないのなら二名の内のどちらかにやつてもらおうが？」

「無視ですか・・・」

それよりも頭痛い・・・

「納得いきませんわ!!」

ああ・・・やめて大声出さないで・・・頭に響く・・・

「そのような選出認められませんか！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！この、わたくしにそのような屈辱を1年間味わえと言うのですか！？」

うーん、やっと頭が治った。てか、好き勝手言ってるな

「実力でいえば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからと言って極東の申にされては困ります！わたくしは、このような島国まできてISの修練に来ているのであってサーカスをしにきている二ではありませんわ！」

うーん、サーカスカ・・・それはそれでありかもな

「大体、文化としても後進的な国で暮らすこと自体、わたくしにとつて屈辱でしかありませんのに！」

バン！！！！！！

「おいおい、さっきから好き勝手言わせれば・・・ISの修練？日本が文化として後進的？じゃあ、お前が修練に来ているISはどこの国が作った？文化として更新的な日本じゃないのか？そんな国に文化も技術が劣っているイギリスはどうなんだよ？」

「篠ノ之博士は・・・」

「特別だっけ言いたのか？ふざけんな！！あの人だって人間で悩んだり怒ったりすんだよ！その人を特別扱いだ？バカも休み休み言いやがれ！日本にいるのが屈辱ならさっさと国に帰りな、嬢ちゃん。それでISについて修練できるならな」

「言わせておけば、祖国と人の事バカにして・・・！」

「先にバカにしたのはどこのどいつだ？どこの国の代表候補生だっけか？」

「っ・・・！！！！決闘ですわ！！！！」

「いいぜ、徹底的に潰してやるよ」

「それで、ハンデはどのくらいあげましょうか？」

「だからバカも休み休み言えっていったろ。学習能力ねえな・・・」

「さて、話はまとまったな。それでは、勝負は来週の月曜日の放課後第3アリーナで行う。概要者は、鷹野慎二、セシリア・オルコツト、織斑一夏の三名で行う。それでは、授業の準備をしろ」

「・・・って何で俺も入ってんだよ千冬姉！」

パシーン！！

「織斑先生だ。お前も候補者に入っていただろう？以上だ。ほら、分かったらさっさと授業の準備をしろ」

うーん、やっぱりさっきの威力弱いな・・・あれか家族と他人の違いなのか！？そうなのか！？そうなんだな！？パシーン！！！！！！うごああああああ・・・三割増し

「・・・ちょ、何で叩かれてんの俺・・・」

「余計なことを考えてる暇があったらさっさと授業の準備をしろ」

「やっぱ、軽くスルーなんだ……」

「ほう……私に口答えするのか……」

「なんでもありません!!!!!!」

意味不明な2回目の出席簿アタックを食らって、授業が始まった。

パシーン!!!!!!!!!!!!!!

うごあああああああああ……最初の5割増し

……3回食らって授業が始まった……

「あ……と……は、任せ……た……ぞ……
……夏」パタッ
……一……

「あれ！？ 慎二！？ 織斑先生慎二が……」

何でこうなった・・・(後書き)

PCを姉に返して更新できませんでした。
これからもこういうことがたぶんあるのでよろしくです。

ふう、やっと視線から開放されたか・・・？
(前書き)

多分、今までで一番長くなりました

ふう、やっと視線から開放されたか……？

やっと、初日の授業が終わり放課後になった。

「うゝ……結局分からなかった……」

と、一夏は机にうなだれていた。

「まあ、あの基礎理論書読んでなきゃそうなるわな。今回はお前が全面的に悪いんだから諦めろ」

「確かに俺の責任だけどさあ……そいや、慎二その基礎理論書持ってきてるか？」

「いや、あんな重いのもってきっているわけないだろ。ましてや、今日は家に帰ったらあれを何回か読む予定なんだ」

「あ、やっぱり慎二も自宅から通ってんのか」

「まあ、部屋割りが間に合わなかったみたいだしな」

「じゃ、今日は帰るか……」

「あ、俺は箒と剣道やってから帰るから」

「お前、箒とやるのか？あいつ全国優勝したのにやるのか？」

「ふふふ、忘れてもらっては困る、俺も全国優勝したことをな……！！」

「全国優勝って何年前だよ……」

「とにかく、俺は剣道やって帰るから」

「とりあえず、分かったよ」

俺は剣道場に行くために教室のドアに向かおうとすると

「あ、織斑君、鷹野君まだ教室にいたんですね」

山田先生が教室に入ってきた。

「まあ、いましたけど……俺これから剣道やって帰るんですけど」

「そのことなんですけど、お二人には急遽寮の部屋が決まりました」
「え？ 入れないから俺らって自宅からの通学じゃなかったんですか？」

「そのことだが、国の方が学園の外に出すなど言ってきたのでな。
急遽入ってもらうことになった」

今度は千冬さんが教室に入ってきた。

「……つまり、他の国に狙われないように学園の中にいろつてこ
とですかね」

「そのとおりだ。男性のIS操縦者なんてお前らしきいないからな、

狙われやすいということだ。これが部屋の番号と鍵だ」

紙と鍵を渡された。えーと、俺の部屋は1025号室か

「なあ、一夏。お前何号室だ？」

「俺は1032号室だ。慎二は？」

「俺は、1025号室だ。なんだか、遠いんだか近いんだか良く分からんな」

「そういえば、荷物はどうなるんですか？」

「織斑のは私が用意した。鷹野は親御さんに頼んだら持ってきてもらった。先に部屋に置いてあるから確認するように」

「わかりました」

「まあ、とにかく寄り道しないでその部屋に行けよ」

「俺は篠ノ之さんと剣道するので、では」

「寮の帰宅時間はきちんと守れよ」

「了解しました、では」

俺は剣道場に向かった。

「・・・去年、帰宅部だったお前に言われてもな・・・」

「帰宅部って言ってもトレーニングはしてたし、なんだかんだで運動してたんだぜ？それでも」

「お前は昔から強かったな、そういえば」

「そうでもないぞ？あれでも影で努力してたんだから」

「それでも、強かった。・・・そして今も」

ん、最後の方聞こえなかったな。それよりも、なんか箒の顔が赤いな・・・

「箒も強くなったな。俺も最初はびっくりしたよ」

「そうか、強くなったか・・・ふふ」

うーん、また顔が赤い・・・風邪か？

「箒、顔が赤いぞ？風邪でもひかないように寮に戻ったらどうだ？」

「うむ・・・そうさせてもらおう。戸締まりは頼んだぞ」

「分かった。風邪ひくなよ？」

「分かっている」

俺は戸締まりをして、寮に向かった。

．．．．．

「え〜と、1025、1025．．．お、あった」

俺は、寮の中で自室を手探り状態で探していた。まあ、聞けば話は早かったんだけどそこは冒険心がくすぐられたというかね．．．．．

「まあ、とりあず入るか」

ドアを開けるとビジネスホテル顔負けの設備の部屋が目飛びこんできた。まあ、ビジネスホテル見たことないんだけどね。シャワーの音が聞こえるということは先客がいるのか。とりあえず、ベットに座るか。

「ふう〜、今日は疲れたな〜」

ん？　そういえば先客って．．．．．一夏は別な部屋だから．．．．．
．．．．．悪い予感しかない．．．．．

「ん？　誰かいるのか？」

案の定聞こえてきたのは女子の声だった。しかもさっき聞いていた．
．．．．．

「ああ、同室になった者か。これから1年間よろしく頼むぞ」

．．．．．振りかえったらダメだ。よし、窓を見よう！！！

「こんな格好ですまないな。汗をかいてしまったから先にシャワー

を使わせて貰っていた。私は篠ノ之・・・」

そこまで言うとは女子はシャワー室から出てきた。

「・・・・・・・・やっぱり箒か」

「え・・・・・・・・・慎二？」

「びっくりしてるのは分かるが、とりあえずちゃんと服を着てきてくれ」

「・・・・・・・・・私は見られても構わないぞ？」

「こらこら、年頃の女子がそんなこと言っちゃだめだろ」

「う・・・・・・・・・了解した」

しばらくして、箒は服を着てきた。ふう、とりあえず面倒ごとは無くなったな。

「それで、お前が私の同居人だと言うのか？」

「そうらしいな・・・お前は1025号室で間違いないんだろ」

「ああ、お前は・・・・・・・・・確かにそうらしいな」

箒は落ちていた紙を見て理解してくれたようだった。うん、話が早くて助かる。・・・・・・・・・そういえば、それを分かっていて俺をこの部屋にいられたのだろうか？千冬さんは・・・・・・・・・まあ、とにかく優先順位はこっちだな。

「・・・お前が希望したのか？」

「それはさすがに・・・俺も急遽入れられたからいいまいち状況がよくわかってないんだよね」

「・・・そうか」

なんか、箒が少し寂しそうだな・・・

「まあ、同居人が箒で助かったよ。これが知らない女子だったらな・・・」

「そうか、私でよかったか・・・そうかそうか」

ん？今度は嬉しそうだな・・・うーん分からんな

「とりあずあれだ、シャワーの使用時間とか決めないとな」

「そのことだが、私が7時から8時、慎二が8時から9時でいいか？」

「いいけど、なんで箒が先なんだ？」

「部活後、汗かいた状態であまりいたくないのでな」

「そういうことなら先に使ってくれ」

「助かる」

「いいっていいって、それくらいの気遣いぐらいは出来るぜ？って、そろそろ食堂が終わる時間だな。飯、食いに行くか。箒、行こうぜ」

「私が一緒にいいのか？」

「いや、一夏も誘おうと思ったんだが……」

「……」

「いや、そんな顔で睨むなよ。美人さんが台無しだぞ」

「美人！？私が！？」

「いや、お前以外に誰が居るんだよ……」

「お、お世辞ならいらないぞ」

「お世辞って……おまえなあ、俺がそういうの言わないことぐらいわかってるだろ？」

「まあ、そうだが……」

「はあ、そんな顔すんなよ。……さてと、箒二人で飯食おうぜ」

「わ、分かった」

いきなり嬉しそうな顔してるよ……ま、箒は笑顔が似合うからいいけどな。

「む、何を笑っている」

「いや、やっぱり箒は笑顔が似合うなって話し」

「む……そうか。ならできるだけ笑顔でいるように努力はしてみる」

「ああ、そうしてくれ」

そんな感じで俺の高校生活の初日は終わった……

みんな、気づいてないかもしれないけど実は俺、箒のシャワー上がりの姿見たんだぜ！え？どうやって見たかって？それはな、窓を見

たときに見えたんだよ。ほら、夜って明かりつけとくと反射して見えるだろ？まあ、それで見えたんだよ。箒は気づいてなかったみたいだけどな。てか、気づいてたら俺の俺の命はないか……。てか、箒もなかなかいい体になってたな。スタイル良かったし胸もなかなか……。っは！？また俺は余計なことを……。みんなこれは内緒にしておいていてくれよ？

ふう、やっと視線から開放されたか・・・？
(後書き)

書いてる途中、箒のキャラがわからなくなったりしました・・・

もしかして、キャラ崩壊してるか・・・？

まゝた、面倒なことが起こったよ……

次の日の3時間目の休み時間、俺はと一夏は千冬さんにあることを通達されていた。

「織斑、鷹野お前たちの専用機だが用意までに時間がかかる。それと鷹野お前の専用機はG・W・社が用意してくれるそうだ」

「え？……G・W・社ってあのG・W・社？」

「鷹野君って一体なにもの？……」

みんなが驚くのは無理もない。G・W・社と言うのは電化製品、I S 研究、食料品などの色々なものに手をだし全て売上世界5位以内という実績を残しているらしい。まあ、俗に言う超一流企業だな。ちなみにG・W・社ってのはゴールデンウィークではないからな。まあ、らしいってのは俺も今朝箒に教えてもらって初めて知ったからだ。一夏も知っている企業をだ。まあ、それに関してはこれから話すよ……

）．．．．．）．．．．．）．．．．．）．．．．．）

目が覚めるとそこはいつぞや見た白の世界だった。まあ、神域だな。ってことはあいつがいるな……

「おーーーーーい！！！！神ーーーーー！！！！どこだーーーーー
ー！！！！！！」

「まだ、神に対しての言葉遣いになってないな……」

「で、干渉しないんじゃないのか？」

「いや、何か面白そうだから今回は加勢しようと思ったただけだ」

「そんなんでいいのかよ・・・」

「いいんだって、神も暇なんだぜ？これでも」

「だろうな。遊んでるイメージしかないし」

「あれ？俺そんなところ見せたっけ？」

「いや、ただの俺のイメージ」

「ちょっと待てい！そんな簡単に人のイメージ決めるな！！！」

「いや、だって事実そうなんだろう？」

「まあ・・・そうなんだけどさ・・・はあ、やっぱ呼ぶんじゃなかった・・・」

何かいきなり地面にの字書いてふてくされてしまった。まあ、地面なんてないんだが。

「で、要件は？学校に遅刻したくないんでな」

「・・・少しは心配しやがれ・・・まあ、いい。その点は心配なくていい・あっちの世界は6時30分で止まっている」

「6時30分ってまた微妙な……」

「まあ、気にすんな。で、お前イギリスの代表候補生と戦うんだって?」

「まあ、そうなんだが……なんで知ってる?」

「忘れたか? 俺は神だ! 不可能は無いに等しい!!!」

「いや、どうでもいいんだが……てか、今俺がいる世界ならお前不可能無いんじゃないか?」

「あ、それもそうだな……だったら……俺は神だ! 不可能はない!!!!」

気付かなかったんかい。つか、言い直す必要あったのか? てかやっぱ、こいつはアホなのか?

「そこ、黙っらしやい」

「いや、しゃべってないし。つか、いつかのデジャブだし」

「う、うるせえ。で、要件だが……」

あ、スルーした。

「お前の専用機だが、俺が用意してやろう」

ほんとにスルーしたよ……読心術でわかってるよな……あえて無視してるのか?

「あの、俺の話聞いてた？」

「ああ、まあ一応」

「一応！？結構大事なこと言ったつもりなんだが・・・」

「で、どうやって用意すんだ？」

「無視か・・・それは起きてからのお楽しみだ♪」

すると突然俺の下に穴が出現した。

「つてまたかよおおおおお！！！！！！！」

「やっぱりお約束かな～って♪不意打ちしないとバレそうだったし♪」

「ふざけんなあああああ・・・」

～・～・～・～・～・～・～

以上回想終了。

ま、朝っぱらから嫌なことがあったんだよ。あと、G・W，社って表向きは「ゴールド・ウィンドウ」（金色の風）ってことになってる。まあ、この世界の日本は好景気だからピッタリな名前なんだが多分「ゴット・ウイング」とかなんだろうな・・・。なんだって神が作った会社なんだから。

「安心しましたわ。まさか専用機で戦うなんて思っても無かったで

しょうけど。専用機ならフェアな勝負が出来ますわね」

セシリーが話しかけてきたな。こいつも決闘絡みの話になると必ずと言っていいほど話しかけてくるからなく。正直言って面倒くさい。

「俺が専用機に乗ってフェアな勝負になるかね・・・」

「あら、自分が劣勢な事に気づいたんですの？だったら、今からでもハンデを付けてあげても宜しくてよ？」

「ああ、悪い。そういう意味じゃないんだ。逆でお前がかわいそうになるなって思ってたさ」

「・・・何をおっしゃているの？」

「まあ、それは試合当日のお楽しみってことで」

「・・・まあ、いいでしょう」

「ほら話がまとまったなら席に戻れ。授業を始められندろ」

「あの織斑先生、質問があるんですが」

「どうした、言ってみろ」

クラスのある女子が手を上げていた。

「篠ノ之さんってもしかして篠ノ之博士の親戚か何かでしょうか？」

「ああ、篠ノ之はあいつの妹だ」

って、いいのか千冬さん。個人情報ばらして。

「なに、どうせその内ばれていたさ」

「って、やっぱり先生は読心術を心得てるんですか？」

「まあ、少しくらいならわかるさ。ましてや身内同然のお前なら尚更な」

「はあ、やっぱり千冬さんにはかないませんね」

「ふん、お前はまだガキだろうが。私にかなわなくて当然だ。それと、織斑先生だ」

「分かりましたよ、織斑先生」

千冬さんは満足気な顔をして教室に戻った。すると

「ええ！？このクラスって有名人多くない！！」

「私このクラスでよかったかも！！！！」

といった感じの女子特有の黄色い声が教室に広がっていた。って、そうか箒が束さんの妹ってバレてたのか。忘れてた忘れてた。そういえば、箒と束さんはそこそ仲がよかったな、確か。おお、箒がオロオロしてるよ。微笑ましいな。こっちに助けの目を送っているが流石に助けられないからな。

「と、とりあえず皆さん席についてください」

山田先生の注意も虚しく声は届いてないようだった。

「さつさと、席に着かんか！授業中だと言うことを忘れるな！」

するとみんな席に戻っていった。さすが千冬さんだな。一言でみんなを従わせた。ある意味あの人は魔王じゃないのか？

「おい、鷹野。失礼なことを考えてないか？」

「いえ考えて・・・」

パ
シ
ー
ン
！
！
！
！
！
！
！

「……いや、せめてセリフは言わせてください。てか、痛い」

「ほう、もう一発喰らいたいか」

「すいませんでした!!!!!!」

「よろしい。では山田先生、号令」

「はい！」

いつもどおりの授業が始まった。

$$\begin{array}{c} \int \\ \cdot \\ \int \\ \cdot \\ \int \\ \cdot \\ \int \\ \cdot \\ \int \\ \cdot \\ \int \end{array}$$

次の休み時間、（まあ昼休みだな）に筭が話しかけてきた。

「おい、慎二！なんでさっき助けてくれなかった！！！」

「なんでって言われてもなあ・・・でも、ある意味よかったんじゃないか？クラスのみんなと打ち解けられたみたいだし」

「それはそうだが・・・それとこれとは違いが・・・」

「それはそうと箒、飯食いに行こうぜ」

「まだ、話しが終わってない！！」

「でも、早いところ食べないと時間無くなるぞ？話なら後で聞いてやるから」

「・・・その言葉忘れるなよ」

「ああ、放課後部屋に行ったらいくらでも聞いてやる」

俺たちは食堂に向かった。途中で一夏を呼んだら箒の機嫌が悪くなった。・・・あれ？もしかしくしても俺にフラグ立ってね？

うーん、どう対応すればいいんだろう？・・・まあ、いつか。今は飯だ飯。

その日の放課後部屋についた途端に箒が文句を言い始めた。まあ、
言っていないって言ったのは俺なんだが・・・流石に2時間は長い
だろ・・・ISの基礎理論書読みながら聞いていたが長かった・・・
・・・もう少しで決闘だからなあ・・・さてどうしたもんか・・・
・・・最低限、箒に剣道してもらうか・・・

まゝた、面倒なことが起こったよ……（後書き）

次回は多分セシリーと戦います。

戦闘描写うまく書けるかなあ……不安だ……

決闘！！なんだけどなあ・・・（前書き）

姉にP C返してたので更新開きました

今回ははじめての先頭描写でした。

グダグダですが読んでくれると幸いです。

決闘！！なんだけどなあ・・・

時は過ぎて次の週の月曜日。俺と筈と一夏は第三アリーナに来ていた。まあ、セシリーと勝負するためだな。ちなみに、一夏は専用機が用意できなかったらしく今日はセシリーと俺の一騎打ちになってしまった。はあ、一夏がいれば最低限盾に出来たのに・・・

「俺の専用機こないな」

「そうだな」

「俺はIS用意できないから観客だし楽だな」

「・・・逆だったら良かったのに」

「ん？何か言ったか慎二？」

「いや、別に」

まあ、俺の専用機はまだ来ていない。まったく、神ならさっさと用意しろよ。てか、一夏の専用機用意できなかったのって絶対神が絡んでるよな。

「ブルーティーズか・・・」

セシリーはもう準備万端でもう10分くらい待っている。律儀に待ってるなんて偉いなく、そこだけ。まあ、俺は専用機待って30分経ってるんだけどな！

「はあ、いつになったらくるんだか……」

誰にも聞こえないような声で愚痴った時

「鷹野君鷹野君!!!!!!大変です!!!!!!」

「何が大変なんですか、山田先生。せめて主語を入れてください……」

「す、すみません。そ、それよりも大変なんです!!」

「だから主語を……」

この人は人の話を聞いているのか？ましてやこの人は大人だよな？

「来ました!!!!鷹野君の専用IS!!!!」

「ほお、だったら準備しませんとね」

俺がISスーツに着替えてきたら、そこにはでかいコンテナがあった。この時代でもでかいのを運ぶときはコンテナ使うんだな。そこは人類の超えられない壁なのだろうか？そんなどうでもいいこと考えていると、コンテナが開いた。

「これが高野君の専用IS『雪月花』です!!!!」

えー、何その厨二臭い名前。まあ、かっこいいから良いか。さて、俺のISはどんなのかな。大体色は白ってのは想像出来るけどね。だって雪って入ってるし。そんな事を考えながら振り向くとそこには白がいた。……いや、原作のパクリじゃないからね？白って

言っても種類があるじゃん？そこを説明するから。原作の百式は機械的な白だったろ？だけど雪月花は本当に雪のような白さなんだ。これから何色にでも染まりそうな白があった。

「早くしろ。時間がない。フォーマットとフィッティングは実戦の中で行え。できなければ負けるだけだ」

さすが千冬さん、無茶なこと言うてくれるぜ！たしかISフォーマットとフィッティングって戦う前にやるもんじゃないの？今回は時間ないから仕方ないか……。そう思いながら俺は雪月花に触れた。

「…………あれ？」

「どうした？まさか動かないとか言わないよな？」

「いや、そこは問題ないんだが……………なんか冷たくてさ」

「いや、機械なんだから当たり前だろ」

「いや、そうなんだが……………違う冷たさなんだ。何か雪に触れているような冷たさでさ……………」

「ほら、早くしろ。時間がないと言っただろ」

そう言われて俺はISに乗り込んだ。

「背中を預けるように。そうだ、あとはシステムが最適化をする」

乗った感想はまるでこれからゲームが始まるような感覚だった。好きなゲームが発売してそれをこれからやるようなウキウキ感だ。だ

が、違うのは俺と雪月花が繋がっていることだ。

「ハイパーセンサーは問題なく作動しているな。鷹野、気分は悪くないか？」

「最高ですよ。何の問題ありません」

「そうか」

ほっとしたような千冬さんの声。ハイパーセンサーがなければ気づかないかもしれないくらいの違いだった。と言うか、ハイパーセンサーってこんなにもすごいのか？景色がいつもより鮮明だし全方位見えるし……。ははっ、なんだこれ。最高に気分がいい。周りを見渡すと、一夏と箒がいた。正確には意識を向けただけだ。

「箒、一夏行ってくる」

「ああ、あんな奴倒しちゃえよ」

「ああ、行ってこい！」

「ああ、勝ってくる」

そうやって俺はピット・ゲートを飛び出した。

「あら、逃げずに来ましたのね。遅いから来ないと思いましたわ」

「遅かったのはISが来なかったんだよ。ま、逃げる理由はないか

「来ないとな」

莫大な量の情報解析されていく。その中のブルーティアーズの情報は、特殊武装あり。てか、このままだとしばらくはフォーマットとフィッティングは終わらないな。ま、フィッティングは現在進行形で行われているんだろうけど。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンスって一体なんだ？降参するチャンスだったらいいぜ」

「そう、残念ですわ……それでは……」

警告！敵IS射撃体制に移行！ほう、攻撃がくることまで分かるのか。便利だなIS。

「お別れですわね！」

パシュ！というような空気が圧縮されたような音がしたら俺にエネルギー弾が発射されていた。俺はそれを最低限の動きで回避する。

バリアー貫通。ダメージ20。残りエネルギー580。実体ダメージレベル低。

あれ、やっぱり当たったか。まだ、ISが俺の動きに対応出来てないな。ってことは、いつもよりも早く判断しなくちゃなんのか。ま、ハイパーセンサーのおかげでそんなのは楽なだけだな。続けざまに射撃の嵐と言わんばかりのエネルギー弾の雨が降ってきた。さっきみたいないなへまは出来ないな……

「さあ、踊りなさい。私とブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」

「悪いな。俺は生まれてこの方踊ったことがないんでね。そんな大層な踊りはできないな」

そう言いながら、俺はISの武装を確認した。一覧には3項目あった。お、一夏みたいな1個だけではなかったか。えーと、『菊一文字』に『漆黒ノ太刀』に『バズーカ（ネタ）』？前二つは剣って分かるが、何だこの『バズーカ（ネタ）』って？まあ、最初は無難に菊一文字で良いか。俺は菊一文字をコールした。すると出てきたのは全長2'5メートルもありそうな日本刀が出てきた。おー、結構かっこいいな。

「中距離射撃型のわたくしに近距離戦闘を挑むなんて……笑止ですわ！」

すると更に銃撃が激しくなった。それを俺は菊一文字と回避をもつて猛攻をさばいていた。

「うーん、これはちょっと頑張らないと辛いな」

そういや、さっき整理している情報に神経伝達速度4倍ってあったんだけど……嘘じゃね？だってさっきからタイムラグしか起きてないし……まあ、最初から比べればよかったけどな。あれだな、完全にフィッティングが終わってないからなんだろうけどさ。たまに無駄に当たってるからちょっと辛くなってきたか。シールドエネルギーが400切ったし。

「さて……どう攻めるかな……」

俺は柄にもなく不敵な笑みをこぼした。

〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃

「はああ・・・。。すごいすね鷹野君。とてもIS起動が2回目とは思えません」

山田先生からみたらそうだろうが、他3者が見たら当り前に見えていた。いや、不思議に思っていた。

「ISがあいつの反射についていけない」

「え？でもあのISの神経伝達速度は4倍を超えているんじゃ・・・」

「それでもだ。主な理由はフィッティングが終わってないからだが、まだあいつに追い付いていない」

「彼って本当に人間なのでしょいか・・・」

「まぎれもない人間だ。あいつだって泣いたり怒ったりするんだ」

その様子をみながら一夏と箒は

「まったく、あいつは何している！あいつならあんな奴すぐに終わるだろうに！！！！」

「ほんと、どうしたんだ慎二？いつもの調子じゃないのか」

〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃

俺は少し苦戦していた。主な理由はタイムラグによるシールドエネルギーの低下だがそれだけじゃない。

「27分。まあ、もったほうですわね。初見でここまでブルーティーズに耐えたのはあなたが初めてでしてよ」

「そりゃ光栄だな・・・」

そう言いながら俺はシールドエネルギーを確認した。残り100か・・・。さすがにジリ貧だな・・・。それと対照的にセシリアは戻ってきたピットを愛犬を愛でるように撫でている。そう、やっかいな理由その二がピットだ。隙があるにはあるんだが、ISが俺の動きについてこれないから中々手を出せないでいた。ま、こちらで一発賭けをしてみるか・・・。そして俺はもう一つの武器漆黒ノ太刀をコールした。漆黒ノ太刀はその名のとうり、黒い3mある太刀だった。まあ、ほとんど日本刀と変わらないな・・・。そうして俺は、右手に漆黒ノ太刀、左手に菊一文字という感じで構えた。

「あら、二刀流ですか・・・まあ、何をしてもわたくしの勝利に狂いは出ませんが！」

そういうと更にピットによる射撃の激しさが増した。

（くっ！ここらで行くぜ！！！！）

俺はエネルギー弾を菊一文字で弾き、特攻を試みる。するとセシリアは《スターライトmk?》を構えて俺への射撃を試みた。が、俺は漆黒ノ太刀でスターライトmk?へめがけて横なぎに振りスターライトmk?はセシリアの手元を離れた。

「つく！あなた無茶をしますわね！」

その隙を逃さずに俺は追い打ちをかけた。

「ですが詰めが甘くてよ！！！！」

「何！？」

ぶるーティアーズのスカート部分と思われる部分から突如ミサイルが飛び出した。

「ちい！！！！」

俺は回避をしてミサイルを切ろうと試みるが

（！？・・・くっそ、こんな時にタイムラグが・・・！？）

あのまま切れていれば問題はなかった。が、今回のタイムラグは1秒にも及んだ。

「つく！」

俺は、爆発による衝撃に備え目を閉じた。

）・）・）・）・）・）・）

「高野君！！」

モニター室にいた3名が騒然としているなか千冬だけは笑みを浮か

べていた。

「機体に救われたな、バカ者めが」

「「「え？」」」

煙が晴れて行くと同時にそこには純白がいた。

）・）・）・）・）・）・）

『フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください』

機械音が流れてくる中、俺は指示に従った。

「やっと終わったか、まったく時間がかかったな・・・」

煙が晴れるとさっきとは違う雪月花がいた。最初のような機械的な角張りが更に攻撃特化になったように激しさを増していた。背中に着いていた小型のウイングスラスターは膝の後ろに届くくらい大型化していた。

「まさか、一次移行！？あなたいままで初期設定で戦っていたっていうの！？」

「まあ、そういうこった。やっと、タイムラグが無くなったか・・・」

「タイムラグ・・・？まさか今までは対応が遅れていた・・・？」

「さあ、こっからが本番だぜ！ Are you ready？」

俺はさっきとは比べ物にならないくらいの速さで接近した。

「つく！！何て速さですよ！！！！」

セシリアが接近戦武器『インターセプター』をコールしようとしていた。

「インターセ・・・」

「遅い！！！」

俺は具現化しかけていたインターセプターを一刀両断した。おお。さっきよりも切れ味が上がってやがる。その隙にセシリアは距離をとってピットを展開していた。さすがに距離の取り方がうまい。

「さっきは接近を許しましたがけど、今度はそうはいきません！」

今までで一番激しい攻撃だ。

（ほう、ここまでできるのかさすがだなあ・・・だが）

「ワンオフ・アビリティ『疾風迅雷』発動」

その文字が見えた瞬間に世界が一変した。さっき十分早かったが、こいつは・・・常に瞬時加速と考えてもらった方が分かりやすいかもしれない。だが、こいつで終わらせる・・・！

「な・・・なんてスピードなんですの！？ピットが全く追いつか・・・

・・」

「うおおおおおおお!!!!」

俺は3Gにも及ぶ重力に軋む体に鞭打って全力で加速した。そして袈裟切りの構えに入った瞬間・・・

ブーーーーー!!!!!!

ん?

『勝者、セシリア・オルコット』

「え?」

「・・・なんで?」

）・）・）・）・）・）・）・）

「期待の特性を把握せずに戦うからだ、バカ者」

控え室に戻った瞬間に千冬さんにダメだしされた。

「何で負けたんですか、俺?」

「雪月花のワンオフ・アビリティ『疾風迅雷』はシールドエネルギーを消費してISの能力を上げる能力だ」

「ああ、ってことはそのせいで先にシールドエネルギーがなくなっただのか」

「そういうことだ」

理由が分かっても負けは負けだよなあ、はあ……………

「慎二、ドンマイ」

「まあ、悔しいけど仕方ないか…………」

俺が落ち込んでいると

「慎二!!!! 途中までの戦いはなんだ!!!!!!」

と、今度は箒からのダメ出しだった。

「お前だったら、あんな奴簡単に倒せただろう!!!」

「まあ、そうなんだが…………タイムラグが酷くてな」

「それでもだ、お前はハンデがあっても簡単に勝てるだろう!!!」

「今回は無理しなくなかったんだよ。初めてで勝手がわからなかったしな。おれに期待してくれるのは嬉しいが…………」

そんな言い合いが続いていると山田先生が助け舟を出してくれた。

「まあまあ、篠之ノさんもそれくらいにしてください。鷹野君だつて疲れているわけですし」

やっと、箒が黙ってくれた。言い返すのも疲れてきてたからちようどよかった。

「それと、鷹野君。鷹野君のISは今待機状態になっています。呼び出せばどこでも展開できますが規約があるのでそこはしっかり守ってください」

「分かりました。まあ、規約の方はしっかり覚えたんで問題ないです」

俺のISの待機状態はネックレスだ。デザインは雪の結晶になっている。原作の一夏みたいに防具じゃないんだなあ。

「今日は疲れたろ。寮に帰ってゆっくり休め」

「そうさせてもらいます」

そうして俺の初めてのIS戦闘は幕を閉じた・・・・・・・・

後に、ISの神経伝達速度を見たら常人の6倍になっていた。・・・
 ・・・・・俺って人超えてるとは思ってたけどそこ
 まで行ったのか・・・・・別な意味でショックを受けた
 慎二であった・・・・・

決闘！！なんだけどなあ・・・（後書き）

ちゃんと書いてましたかね？

誤字脱字がありましたら報告よろしくお願いします

はあ、女子ってのはどうしてこんなにも強いんだ・・・(前書き)

サブタイトルは関係あるようで関係ありません

ま、内容を見てからのお楽しみで

はあ、女子ってのはどうしてこんなにも強いんだ……

俺は今保健室にいる。何があったかはこれから話すよ……はあ、だるい……

俺はあの試合の後に晩飯を食べたんだよ。それで、部屋に戻る途中でまあ吐いちゃったんだよ。気持ち悪くもなくていきなりだったから、俺もビックリしたんだけどな一番ビックリしてたのは筈だった。ま、部屋に戻る途中だから一緒にいたんだけどな。それで用務員の人呼んできてもらって、片付けてもらったんだよ。幸い他に人が居なかったのが救いかな。で、そのあと筈に連れられて保健室に来た。それで検査したら内蔵（主に消化器官）にダメージがあった。理由としてはIS戦闘での『疾風迅雷』によるダメージだと言うことが分かった。疾風迅雷はあまりのIS能力の上昇によって内蔵にもダメージが通ることが分かった。その後、千冬さんがきて疾風迅雷の使用規制について話に来た。あと、エネルギー変換により制限できることも。それで、次の日学校を休めとも。その夜までは筈が看病してくれたんだが、寮の門限が迫っているから返した。で、今は絶賛ボツチってわけさ。飯も3日間は流動食（某ゼリー飲料やお粥）だけだしなあ……はあ飯は結構楽しみなのに。まあ、今日は疲れたし休むか……

くくくくくくくくくく

で、次の日俺は千冬さんに強制的に休みにさせられたので寮の部屋に戻って休んでいた。が、流石に昼時になると腹が減る。みんなの昼休みが終わるまであと30分ある……今日はお粥がよかったけどゼリーで我慢するか……

コンコン「慎二、いるか？」

「ああ、いるけど……どうした筈？」

そう言って入ってきたのは筈だった。まだ、昼休み中だし忘れ物でも取りに来たのだろうか？筈の手に持っていたトレイに目がいった。

「筈、そのトレイどうした？お粥だけど」

「ああ、これはお前に持ってきたんだ。昨日は結局ゼリー飲料だったし、今日はお粥がいいと思ってな」

「お、マジで！持ってきてくれたのか！」

「うむ」

そう言うのと、筈は部屋に入ってテーブルにトレイを置いてくれた。おお、あったかいご飯だ……。まあ柔らかいけど。そこはいいか、ご飯だったらなんでも。

「その、私が食べさせてやろうか？」

「いや、ご飯くらいは自分で食べるって」

筈がシュンとうなだれてしまった。あ、そうかフラグ立ってるんだっけ。はあ、仕方ないか……

「じゃあ筈、食べさせてくれ」

「……いいのか？」

「いいのかって・・・お前が最初にいったんだろうが」

「う、うむ、分かった。では・・・・・・・・・・あゝん」

「あゝん」

差し出されたお粥をもぐもぐと食べる。味付けはジンプルに塩と卵だ。俺はジンプルなのが好きだからちようどいいや。それよりも、食べさせられるのって恥ずかしいな・・・・・・・・周りに誰も居ないのが救いか・・・・・・・・

「どうだ？美味しいか？」

「ああ、やっぱジンプルなのがうまいな」

「そうか、よかった・・・」

心底安心したような声で呟いていた。ん？もしかして・・・・・・・・

「なあ、箒」

「な、何だ？」

「もしかしてこれってお前が作った？」

「な、何で分かった!？」

「いや、味付けが異様に俺の口に合うから。あとは勘だけだな」

何か箒がもじもじしてる。何か可愛いな……。つは!？俺は一体何を!？……。それよりも次が食べたいな……。

「箒、次くれ」

「わ、分かった。あ、あゝん」

昼休み一杯まで箒は部屋にいて俺にお粥を食べさせてくれた。と、
昼休みが終わりそうになると箒が

「そろそろ午後の授業がはじまるな・・・食器を片付けてくる」

「ああ、分かった。午後も頑張れよ」

「……そういえばクラス代表はお前になったぞ」

ん？ 今なんて
・
・
・
・
・
・
・
・

「……箒、今なんて言った？」

「だから、クラス代表はお前になったと言ったんだ」

「
・
・
・
・
・
・
・
何
で?
」

「たしか、オルコットがクラス代表を辞退したんだ」

「・・・・・・何で、辞退したんだよ・・・・オルコットさん」

「そろそろ授業に遅れてしまうからもう行くぞ」

「・・・・・・・・分かった」

俺は委員長的立ち位置にはなりたくなかった。だって、放課後の時間削られたり、雑用任されたりいいことなんて無いからな。てか、正直面倒くさい・・・・・・・・今、悩んでも仕方ないか・・・・・・・・よし、寝るか。そう思い俺は眠りについた。

・・・・・・・・

「ん・・・・・・・・？今何時だ・・・・・・・・？」

目を開けるとそこには箒の顔があった。

「・・・・・・・・箒？」

「ししししし、慎二起きていたのか！？」

「ああ、今起きた。てか、今何時だ？お前が帰ってきてるってことは学校は終わってるんだろうけど・・・」

「ああ、今は5時だ」

えーと、俺が寝たのが大体1時だから・・・・・・・・

「・・・・・・・・俺、4時間も寝てたのか・・・・・・・・？そんなに寝たの初めてだな」

「そんなに寝ていたのか？よっぽど疲れていたんだな」

「まあ、そうだな。それと寝る前に美味しいお粥も食べたしな」

「……そうか、よかった。……ふふ」

箒が嬉しそうにしてるな。うん、微笑ましい。そいや、フラグの件はどうするか。まあ、付き合うっていても箒なら問題はないし……。いや、だってスタイルいいし料理もうまいし美人だし根は優しい子だし。原作は何でツンデレだったんだ？こんなに素直だし……。うーん分からん。

「そういえば慎二」

「ん？何だ？」

「今日の８時からお前のクラス代表就任パーティをやるって言っていたぞ」

「……ああ、そうか。俺、クラス長になったんだっけ」

「無理なら後日にすると言っていたが、どうする？」

「いや、問題は無いよ」

「そうか、だったら問題ないと言ってくる」

「うん、分かった」

そう言うのと、箒は部屋を出ていった。うーん、まあ腹くるるかあ。そいや、昨日の試合の記録があったはずだな。それでも見て反省会でもするか……。と、疾風迅雷が発動したところを見るか。

うーん、確かこちらへん……。お、あった……。
・・・何これ？てか、何この速さ……。そりゃあ内蔵にも
ダメージくるわな……。そんなことを考えているとドアの方
から声がした。

「慎二さん？いたら返事してください？」

ん、この声はセシリーか？

「はいはい、いますよーっと」

扉を開けると案の定セシリーがいた。

「あれ？やっぱオルコットさんか。どうした？」

「あの、わたくし謝りたくて……。ごめんなさい」

「は？一体何について謝ってるんだかわからないんだが……」

「日本を侮辱したことと……。その、あなたを侮辱したことで
わ」

「あー、そんなことあったな。ま、気にすんなって。俺もオルコッ
トさんのこと侮辱したし」

「慎二さん、オルコットさんなんて他人行儀な言い方はやめてくだ
さい。わたくしのことはセシリアでいいですわ」

「そっか、分かったよセシリア」

「ふふ、それで宜しくてよ？」

「ま、立ち話もなんだし部屋に入るか？」

「では、そうさせてもらいましょうか」

俺はセシリアを部屋の中に入れた。俺は椅子に座りセシリアにはベツトに座ってもらった。

「もう、最初みたいな着飾った態度は取らないんだな」

俺は、まずそのことについて話した。

「あら、どうして最初が着飾っていたと思いますの？」

「……原作がそうだったからとは言えない。まあ、理由としてはちゃんとあるんだけどな。」

「まず、最初に話したときに違和があったんだ。何か、無理して去勢を張っているというか、なにかを忘れようとしてるみたいな感じがしたんだ。あとは、今日暇だったからちよっと調べたんだ、オルコット家についてな。セシリア、お前の両親は去年他界しているな」

ここは少し原作と違うところだった。原作では確か7歳の時に他界しているはずだ。

「……そう、そこまで知っているのですね。では、去勢を張っていた理由も？」

「まあ、大方付いているさ。大体、オルコット家として恥の無いよ

うに高貴な感じでいたんだろ？」

「ふふ、当たりですわ。さすがですね。．．．．．確かに私は去年両親を無くして、不安定でした。そこで、ISの代表候補生でしたのでISの訓練に打ち込んで忘れようとしていましたわ。でもそんなのは気休めでしかありませんの。今だって寂しくて．．．．．」

「．．．．．セシリア、もう無理しなくてもいいんじゃないか？」

「無理なんてしていませんわ．．．．．」

「じゃあ何でお前は．．．．．そんなに泣きそうな顔をしてるんだ？」

「泣きそうな顔なんて．．．．．」

「今はさ、そんな我慢しなくていいよ。俺とお前しかいないんだし。俺には甘えてもいいいぜ？セシリアが頑張ってるって俺は知ってるさ」

「．．．．．もう無理しなくてもいいんですの？」

「ああ」

「今は．．．．．泣いてもいいのですの？」

「ああ」

「うう．．．．．ううう．．．．．」

セシリアは顔に手を当てて泣いていた。まったく……そんな泣く時まで我慢しなくてもいいのによ……そう思いながら俺はセシリアに近づいて静かに抱き寄せた。すると、セシリアは俺に抱きつき大声で泣いた。いくら15歳と言っても、子供は子供だ。亡くなったのが自分の両親ならなおさらだ。オルコット家はイギリスでは有名な貴族だ。それに見合うようにセシリアも頑張ってきたのだろう。多分セシリアは葬式の日も我慢していたのだろう。そしていままでも……1年間誰にも弱みを見せないように頑張っていた。親が残していった財産、地位を守るために。財産を狙う腐った大人たちから守るために、な。大変だろうな、俺が想像している以上に。しばらく泣いていたセシリアも落ち着いていた。

「もう、大丈夫か？」

「ええ、見苦しいところをお見せしましたね」

「泣いているのが見苦しいのか？それは違うだろ。人間は泣く生き物だ。泣いて当たり前なんだからそんなふうに言うなって」

「ふふ、そうですわね。……もし、次また泣きそうになったら胸をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、それくらいならお安い御用だ。っと、そろそろ時間だな」

「あら、そうですわね。主役が遅くてはパーティも始められませんわね」

「そうだなあ、だったら先に行って始められるようにしとくか」

「なら、ご一緒してもよろしいでしょうか？」

「どうせセシリアも来るんだろ？なら、断る理由がない」

「では……」

そう言うのと、セシリアは俺の左手を取って抱きついてきた。

「あのセシリア、恥ずかしいんだが……」

「あら、殿方がレディをエスコートするのは当たり前ではなくて？」

「そういうもんかね……まあ、いいか……それでは参りましようか？お嬢さん？」

「ふふ、それでよろしくてよ？」

そんなことを話しながら俺たちは食堂に向かった。途中箒に会って、怒られたのはまた別な話し……

結局俺が部屋に戻ったのは10時になっていた。いやあ、10代女子おそるべし。ああ、あと黛薫子先輩に名刺貰ったな。どれどれ・
・
・あれ？これって会社の名刺じゃね？しかも結構有名な・
・あ、そっか薫子先輩のお姉さんて結構有名な会社に務めてるんだっけ。ってことはその会社の名刺・
・あああああ！考えるの面倒くせえ。今日はもう寝る。って、俺今日結構寝てるな・
・ま、眠い時に寝るのが一番だな、うん。じゃ、おやすみ！

はあ、女子ってのはどうしてこんなにも強いんだ……（後書き）

はい、すみません

かつてにセシリアをかわいそうな娘に仕立て上げました

まあ、原作とは違うって言うてるから問題ないよね？

あと、また更新空くと思いますので更新楽しみにしておいてください
い

ふむ、IS学園に來てから再会が多いような・・・(前書き)

今回もですね

ふむ、IS学園に来てから再会が多いような・・・

「では、これからISの基本的な飛行テストを行なってもらおう。織斑、鷹野、オルコット。試しに飛んでみる」

今はセシリアとの勝負が終わり1週間が経ち4月も終わろうとしている、そんな季節だ。桜の花びらも散って少し寂しい気もするが、季節ってのはそんなもんだろ。っと、さっさとIS展開しないとな・・・俺の体が一瞬光に包まれたと思ったらISが展開されている。うゝん、まだ遅いかなゝ

「ふむ、まあ妥協点だな。もっと早く展開できるように励めよ」

ほゝら千冬さんからもありがたい言葉を貰えたぞゝ、ってやっぱり厳しいな千冬さん。まあ、俺も納得はしてないんだけど・・・ねえ？そんな中一夏はというと、やっとISが展開できたみたいだな。

「遅い！熟練したIS操縦者なら展開までに1秒とかからないぞ」

うん、やっぱり厳しいね。今回は一夏が遅いんだけどね。そういえば、一夏のISは俺とセシリアが戦った次の日に届いたぜ。現時点で一時移行まで終わってるんだけどな。・・・俺は初期設定で戦ったのにな、何なんだろうこの扱いの差。

「よし、全員展開したな。飛べ」

そういわれて、俺とセシリアは急上昇しある距離まで行くと停止した。一夏はというとまだ上昇途中だった。うん、遅い。百式のスペックは俺の雪月花には劣るとはいえ、ブルーティアーズには上なん

だからもつと早いはずなんだけどな。

「一夏、遅いぞ」

「そう言われてもな・・・まだ飛ぶって感覚に慣れてないんだよ。慎二はなんでそんな早いんだよ」

「慣れた」

「慣れて・・・簡単に言ってくれるな」

「ま、何回も乗って慣れろってこった。スペック上ではブルーティアーズよりも上なんだから頑張れ」

「まあ、慣れるしかないのか・・・」

そう言いながら、俺たちは飛行を始めた。うゝん、やっぱり風って気持ちいいな。まだ春の風だからあったかいし、眠くなってくるな・・・そう思いながら飛んでいるとセシリアが微笑んでいた。

「ん？どうした、セシリア。そんな顔して」

「いえ、ただ慎二さんと一夏さんは仲が良いなと思ひまして」

「そうか？どちらかというと俺が一夏をからかっているだけなんだけどな」

「おい！慎二！それは酷くないか！？」

「酷くない酷くない。そう言われないように俺を超えてみろ！」

「お前を超えるって……無理だろ」

「いやいや、ISについては同じスタートラインなんだから大丈夫だって」

「まあ、そうだけど……それをお前が言うか？」

「ふふ、やはり仲がいいですわね」

「はは、そうかもな」

「こら、その三人。いつまで仲良く飛んでいるんだ。さっさと急降下と完全停止をしてみろ。オルコットと鷹野は地上から10センチを目標に。一夏は、地面にぶつかなければそれでいい」

「って、俺の目標設定高くないですか？」

「……始め！」

「って、やっぱり無視……」

「ふふ、ではお先に」

そう言うとセシリアは地面に向かって急降下した。途中、ブーストを逆噴射して見事地表10センチを達成した。

「ほう、やっぱり上手いな。じゃお先、一夏。地面に衝突するなよ」

「しねえよ！」

「その言葉、忘れんなよ？」

俺も、セシリア同様に急降下した。俺はセシリアよりも遅いタイミングで全力でブーストを逆噴射して、地表5センチで停止した。

「さすが慎二さんですわね」

「ま、これは雪月花のスペックがあつてこそ出来るんだよ」

「それでも、操縦してるのは人間なので結局のところ操縦者なんですのよ」

「うーん、褒めてくれてありがとな。恥ずかしいが」

そんな会話をしていると一夏が地面に衝突しそうになっていた。はあ、やっぱりか……。仕方ねえな。俺は漆黒ノ太刀をコールして峰の部分で一夏を下から打ち上げた。ホーーーーームラン!!!!とまではいかないが、2, 3メートルぶっ飛んだ。

「いてて……。慎二なにすんだよ!!」

「何って、助けてやったんだろうが」

「助け方にも方法があるだろ！」

「ほう、お前は地面に大穴を開けそうになって授業後一人でグラウンドの土を持ってきて修復したかったと？」

「あの……。いや……。ありがとうございます」

「うむ、よろしい」

「そのバカやってる二人はほつといて授業を進めるぞ。次は武装を展開しろ。織斑、そのくらいだったら出来るな？」

「ええ、まあ、一応」

「そうか、ならやってみせろ」

そういうと一夏は目を閉じて右手に意識を集中させた。光の粒子が集まったかと思うと剣が出現した。

「遅い、0，5秒で展開できるようにしろ」

「次はオルコットやってみせろ」

「わかりました」

セシリアは一夏と違い一瞬爆発的に光ったと思うと手にはスターライトmk?が握られていた。それにセーフティと弾が装填されている。すぐにでも射撃ができるようになっていく。

「流星は代表候補性だな。よし、次は接近戦用武器を出してみろ」

「え?は、はいわかりました」

今度はさっきみたいな爆発的な光はなく一夏みたいに光が少しずつ集まってきた。だが、なかなか展開できない。

「まだか？」

「っ……！もう少しです」

そう言うのと、今度はインターセプターが手に握られていた。

「遅いぞ。お前は実践でも相手に待ってもらうのか？」

「……はい、気を付けますわ」

「まあ、練習すればいいさ。なに、まだお前たちは若い。これからやる気があればいくらでも伸びる。励めよ、15歳」

「は、はい！」

「さてと、あとはそうだな………実戦での武器の使い方でも教えるか」

「あの、先生？俺は……？」

「さて、射撃武器の説明だが………」

「ああ、やっぱ無視なのね………はは、いいさもう慣れたし………慣れたし」

俺は地面にのの字を書いてふてくされた………

………

「ふうん、ここがそうなんだ」

IS学園の正門には体には似合わないようなボストンバックを持っている小柄な少女がいた。

「ええと、総合受付は・・・？」

くしゃくしゃにはなっているが、最低限読めるくらいの紙を取り出し、場所を確認した。彼女の性格的にはもっと、くしゃくしゃになっっているはずだが、ある人の言葉をキツチリと守っていた。

（あいつ、元氣かな。ま、元氣じゃなかったら無理にでも元氣にしてやるけどね）

彼女は中国人。だが、小学、中学は日本で暮らし友達もいた。そのなかの男子がこの学校にいる。まあ、二人しかいないわけだが。そのどちらとも知り合いの彼女は再開を楽しみにしていた。

「だからお前は・・・・で・・・・なんだよ」

ふと声がした。

（あれ、この声って・・・？）

「だから一夏は弱いんだよ」

「いや、慎二が強すぎるんだよ。あんな動き卑怯だろ？」

「仕方ないだろ？ISのスペックが高いのが悪い」

やっぱりこの声は・・・慎二だ・・・（注：一夏なんて眼中にない）よし、声かけよう。あ、でも気付かなかったらどうしよう・・・ま、いっか。その時はその時だ。

「慎・・・・・・・・・・」

「でも、慎二さん。少しは手加減をしてあげたらどうですか？さすがに一夏さんがかわいそうではなくて？」

「そうだぞ、慎二。強者なら弱者に対する対応もわきまえなければ」

「・・・・・・・・お前ら二人。意識はないだろうけど結構傷つくんだが・・・・・・・・」

「ま、大丈夫だって。一夏昔から頑丈だし、それにISには絶対防御があるしな。今のうちからやられることに慣れさせるのもありだろ」

「・・・・・・・・・・もう良い」

その様子を3人で楽しそうに笑っていて、一夏が怒り出した。

（慎二が笑ってる顔久しぶりにみたなあ・・・・・・・・たまに悲しい顔するからなあいつ・・・・・・・・）

今の彼女に他の女に対する嫉妬などの感情はなく昔を懐かしむような目でその様子を見ていた。邪魔をしないようにで総合受付に向かった。

「はい、じゃあ以上で手続きは終わりです。ようこそ、鳳鈴音さん」

「2組みのクラス代表って決まっていますか？」

「え、決まってるけど・・・どうするの？」

「変わってもらうんです。私に」

慎二たちが1年1組だと言うことは知っていた。クラス代表になっていることも。5月の初めにクラスリーグマッチで戦うために変わってもらわないと・・・

くくくくくくくく

「おはよう、織斑君、鷹野君。ねえ、転校生の噂聞いた？」

次の日の朝、クラスに入るなり鷹月さんが話しかけてきた。

「転校生？この時期に？また中途半端だな」

「たしか、編入って形になると試験のハードル上がるらしいな、この学校は」

「へえ、さすが慎二だな」

「お前はもう少し勉強しろ」

「ですが、転校生の実力があっても慎二さんがいれば関係ないですよ」

うーん、セシリアは大分丸くなったな。みんなに対しても。やっぱ、

元は優しいいい子なんだな。って、そういえばなんだかんでセシリアにもフラグ立てちまったな……。はあ、何でこんないい子達が俺なんかに好意を抱くんだか……

「そうだな、慎二がいれば百人力だな」

いつのまにか箒も来て話に混ざっていた。箒とセシリアは原作みたいにギスギスした感じではなくて仲のいい友達になっている。ま、仲が良いのはいいことだな。

「うーん、褒めてくれるのは嬉しいけどやっぱり恥ずかしいな……」

俺がそう言っていると、みんなが微笑んでいた。うん、やっぱりこういうのには慣れない。恥ずかしい。

「慎二君には、頑張ってもらわないと!」

「そ!フリーパスのためにも!」

そう、5月のはじめにあるクラスリーグマッチで1位になったクラスには食堂のデザート1年間無料で食べられるフリーパスが貰えるのだ。ここのデザートは美味しいからなあ。よし!今回も頑張ってみますか!

「専用機持ってるのもあと4組だけだし楽勝だよ!」

「へえ、4組にも専用機持ってる人いるのか。ねえ、誰だかわかる?」

「えーと、確か更識簪さんだったっけか?」

「……簪か……」

「どうしましたの慎二さん？その簪さんという方は知り合いですの？」

「ああ、まあ保育園でも知り合い。要は幼馴染だな。ま、幼稚園の卒園式で引っ越したんだけどな」

「あら、そうですよ……覚えていればいいですね」

「そうだなあ……放課後ちょっと会ってくるか」

「その情報古いよ！」

ふと、ドアの方から声がした。ふむ、この声は……あいつか……

「2組も専用機持ちになったから簡単には優勝させないわよ！」

「やっぱ鈴か……鈴、そんなところにいるいでこっち来て話そうぜ」

「そうしたいのは山々だけど時間が無いから教室に戻るわ。慎二！昼休みに会いに来るから待ってなさいよ！」

「はいはい、わかりましたよ」と

鈴は2組に戻っていったと同時に千冬さんが教室に入ってきた。

「諸君、おはよう」

「「「「「「「おはようございます」「」「」「」」

この人が来るとみんな直ぐに自分の席に戻るんだよなあ。軍隊みたいだ。ってことはあれか、千冬さんが上官か・・・うわあ嫌だなあ・・・せめて山田先生くらいのってあの人は軍隊でもそんな上には立てないな・・・

「鷹野、くだらないことを考えてないか？」

「いいえ考え・・・」

パシーン！！！！！！

「・・・だからせめてセリフ言わせてください。痛みには慣れたけど・・・」

「ほう、そうかだったらもっと強くするでしょう」

「いや、何でもありません！！！！！！」

「最初からそのように返事しろ。では、SHRを始める」

そうやって、今日が始まった。

＼・＼・＼・＼・＼

時は過ぎ、今は昼休み。いつものメンバーで食堂に向かっていた。食堂につくと

「待ってたわよ！ 慎二！」

と、道の真ん中で鈴が待っていた。

「俺は別に待ってないけどなあ。それと鈴、そこ邪魔になるぞ。こっち来い」

「う、うるさいわねえ！ 分かってるわよそんなこと」

「いや、分かってるなら最初からそうしろよ」

「いちいち、細かいわねえ」

「人の迷惑にならようにしんしゃい」

そんな会話をして俺たちは食券を買い、食事を貰った。

「って、やっぱりお前はラーメンか」

「いいじゃない、美味しいんだもの。それとも何か文句ある？」

「ないけどよ、たまには違うものも食べたらどうだ？ 幸いこの学校のメニューはすごい量だし」

「そうね、気がむいたらそうしてみるわ」

俺たちは適当な席を見つけ席に座った。

「そいや、鈴。お前いつ帰ってきてたんだ？連絡くれれば迎えに行つたのに」

「子供扱いしないでよ、私だって女なのよ！」

「はいはい、分かりましたよ。で、いつ帰ってきたんだ？」

「昨日の夕方ね」

「また、急だなあ。また、おばさんとおじさん店やるのか？」

「あ……ああ、うん多分ね」

鈴が珍しく言葉を濁した。ってことは、言いにくいことか……
・ま、余計な詮索はしない方がいいか

「おほん、ところで慎二さん」

「そろそろこいつとどういう関係か教えてもらいたいんだが」

「ああ、まだ紹介してなかったな。こいつは鳳鈴音。去年まで日本にいたけど中国に帰ったんだ。で、鈴こっちは篠ノ之箒だ。前に話したろ？後は、セシリア・オルコットまあクラスメイトだ」

「よろしくね、私の事は鈴でいいわよ。鈴音って言うの面倒だろうし」

「では、私の事も箒でいい」

「わたくしもセシリアでいいですわ。あまり他人行儀に言われるの

は好きではありませんの」

「それは同感ね。同年代だもの仲良くしなくちゃね」

こちらも原作とは違って、早々に打ち解けたな。やっぱあれか、みんな素直だから対応が違うのか？ま、仲が良くて悪いことはないし深く考えるのはやめよう。っと、あいつらは大分仲良くなったな関心関心。もうそろそろみんな食べ終わるな・・・

「ふう・・・ごちそうさま。で、慎二あんた放課後ISのトレーニングしてるんだって？」

「ま、始めたばかりだからやってるよ」

「なんなら、私も手伝おうか？」

「まあ、それもありだがクラスリーグマッチが終わるまでは遠慮してくれ。最初に手の内分かってると本気の勝負した時つまらないだろう？」

「まあ、それもそうね。じゃ、クラスリーグマッチは期待してもいいのね？」

「ああ、期待しとけ。俺に負けないようにな？」

「ふふ、大口叩けるのは今だけよ。じゃ、私クラスに戻るから」

「おう、またな」

そう言って、鈴は教室に戻って行った。

「慎二さん、大丈夫ですわ。わたくしが付いていますもの。不安な
んてありませんわ」

「そうだな、セシリアの指導期待してるぜ？」

「はい、任せてくださいまし」

「私もいることを忘れてもらっては困るぞ」

「ああ、箒も接近戦の練習のときは頼むよ」

「うむ、任せておけ」

そう言った感じでその日の昼休みは終わった。

うん、鈴はいつ見ても元気だったな。まったくもって微笑ましい。
クラスリーグマッチも楽しみだな。鈴も中国の代表候補生だから強いだろうし。ま、こっちにはセシリアもいるし箒もいるから問題ないな。これで負けたら俺の責任だ。あ、そうや放課後は簪に会いに行かないとな・・・

ふむ、IS学園に来てから再会が多いような・・・（後書き）

なんだか、キャラ崩壊が加速しているような・・・

そして中途半端に終わるという

次回は簪との再会編です

チートもたまには役立ったな……チートも使いようか……？
(前書き)

今回は簪さんのターンです

ただキャラ崩壊が加速していますので原作のキャラがいいと言う方はブラウザバックしてください

チートもたまには役立ったな……チートも使いようか……？

今は放課後、俺は4組の教室前に来ていた。簪に会うためだ。教室に入ると周りから「え、何で鷹野君がこの教室に……？」的な声が上がっていたがそんなのは関係ない。ぐるりと教室の見渡しても簪らしき人はいない。今は居ないのか？ そう思ったが俺は近くにいた女子に話しかけた。

「ねえ、ちよつといい？」

「え？ な……何？」

ちよつとおどおどしてるな。まあ、いきなり話しかけられたらびっくりするわな。

「更識簪さんってどこにいるか分かる？」

「え？ 更識さん？ え……え」と確か整備室にいるはずだけど……」

「どこの整備室だかわかる？」

「ご、ごめん。そこまでは……」

「そっか、邪魔したね。教えてくれてありがとう」

この学校の整備室は多いから何番目か知ってたけど仕方ない。地道に第一整備室から見てくか。俺は待機状態のISからディスプレイを出して学園の地図を出した。いや、ISって便利だね。地図

をインストールすれば地図がディスプレイに表示されるから。俺は地図を頼りに整備室に向かった。

〃・〃・〃・〃・〃

「ここが最後か・・・」

俺は第一整備室から順に見てきた。が、結局最後の第七整備室まで来た。何もこんな遠くの整備室でやらなくてもいいだろうに・・・。流石に疲れたぜ・・・俺は息を整えて整備室のドアを開けた。ここもほか同様に機械が沢山あるな・・・ん？何か音がする・・・向かってみるか。音のする方に向かうと人がいた。いや、当たり前なんだけどね。水色かった髪をした女子だった。いや、こっちも当たり前だよ。逆に男がいたほうがびっくりだよ。そんな本当にどうでもいい・・・いや、結構大事か・・・？・・・とにかく俺はその女子に話しかけた。

「おゝい、簪」

簪は返事をしないでディスプレイとにらめっこしていた。って、これは気づいていないな・・・

「おゝい、簪！」

ビクッ あ、大声出しすぎたか・・・ま、気づいてくれたし良いか。

「・・・何？」

「何って酷くないか？久しぶりの再開なのに。まあ、覚えていれば

だけどな」

「え？・・・・・・・・慎・・・・・・ニ・・・？」

「そうだよ、俺は慎二だ。思い出したか？」

「思い出すもなにも・・・・・・忘れて・・・・・ない！」

「だったら最初の反応はなんだよ？忘れられているのかと思って俺、不安だったんだぞ？」

「あ・・・・・・あれは・・・・・・その・・・・・・慎二が・・・・・・かつこよくな
ってて・・・・・・分からなかったから」

「そうか？かつこよさなら一夏の方が上だと思っけどなあ」

「そんなこと・・・・・・ない！私は、慎二の方が・・・・・・かつこいいと・・・
・・・思う」

「そ・・・・・・そうか・・・・・・それはありがとう。でもそれを言うなら
簪だって・・・・・・その・・・・・・綺麗になったと思うぞ」

「あ・・・・・・ありがとう・・・・・・とう」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

あ、あれ？もしかして墓穴掘った？・・・・・・やべえ、恥ずかしい・・・
・・・・・・どうしよう・・・・・・・・・・・・何か話題何か話題・・・・・・・・・・・・って、俺

がここに来た理由を忘れてた。

「そいや、簪」

ビクッ そんなにびっくりしなくてもいいのに・・・

「どうした・・・の？」

「いや、毎日毎日、整備室に来て何してるのかなあって思ったんだけど」

「ISを・・・組み立てるの」

「え？ISを？なんでまた・・・」

「倉持技研の人たちが・・・白式の開発に回ったから」

「ああ、一夏のせいかな」

「別に・・・そういう訳じゃ・・・ない」

「ま、どっちにしろ手伝うよ。で、今は何をやってるんだ？」

「そんな・・・ことさせちゃ悪い」

「いいんだよ、俺が勝手にやってるだけだから」

「・・・だったら手伝って」

「おう、任せとけよ」

俺のチート能力の見せ場だぜ！

「それで今は・・・ウイングスラスターの出力調整をしてるの」

簪がディスプレイを見せてくれた。

「ああ、なるほど。出力が上がらないのか・・・だったらこれをこうしたらどうだ？」

「でもそれだとこっちが・・・」

「ああそうか。ならここをこうして・・・」

「あ・・・出力の効率が良くなった」

「じゃ、次はこっちだな・・・」

二人でディスプレイとにらめっこして時間が過ぎていった。

〃・〃・〃・〃・〃

「ふう、簪ちよつと休憩しようぜ」

時間は既に5時半を回りあたりも少し暗くなっていた。

「うーん、流石にISの組立となると調整とは勝手が違うな」

「それは・・・当たり前。ISは・・・難しい」

「ま、それは同感だな。わからないことが多いからなI Sは」

「・・・ねえ・・・慎二」

「ん？どうした？」

「慎二はどうして・・・そんなに強いのか？」

「へ？何で今その話に・・・」

「この前の戦いを・・・思い出して」

「ああ、あれか」

簪が言っているのはセシリアとのクラス代表決定戦の事を言っているのだろう。ってか、簪も見てたのか。

「・・・別に俺は強くないさ」

「でも・・・あの時は・・・強かった」

「ありがと。でも、俺は弱い・・・あの子を守れなかった俺なんかな」

「え？・・・何て言ったの？」

「ああ、なんでもないよ。気にしないで」

簪はびっくりしていた。いや、びっくりと同時に何故か恐怖を感じた。さっきの慎二は目の光が消えて虚ろになっていた。まるで、生

きていないように……常人には理解できないような、暗い闇がそこにあるようで……。ここにいたのが簪ではなく他の人がいてもそう思っただろう。だが、簪はそこには触れなかった。触れてはいけないような気がしたからだ。簪は話題を変えて

「そ、そういえば……。クラスリーグマッチは大丈夫？」

「ん？まあ、なんとかなるさ。いままで放課後は特訓してたしな」

「だったら……。特訓したほうがいいんじゃないの？……。こっちよりも」

「そんなこと気にすんなよ。それにもう少し頑張ればこの機体だって完成するだろうし」

そう、慎二の助けにより『打鉄式』はほぼ完成していた。まだ完成していないのは武装だ。『マルチロックオンシステム高性能誘導ミサイル』と『荷電粒子砲』が完成していない。荷電粒子砲の方は慎二の手伝いにより完成しているも同然だが、マルチロックオンシステム高性能誘導ミサイルがまだ微妙なところだ。まあ、今夜睡眠時間を削って少し考えれば解決はしそうなだけだな。時間にしてあと1〜2日あれば完成する見込みは立っていた。これも慎二のチート能力によるところが大きい。常人には考えられない量の情報を解析、解決にまで持っていく能力があるからこそ、ここまで完成に近づいたのだ。

「とりあえず今日は遅くなったし寮に戻るか」

「うん」

俺たちは戸締まりと片付けをして寮に戻った。

く・く・く・く・く

「よっしゃあああ！出来たー！ー！」

次の日の放課後、5時の整備室、慎二の雄叫びが上がっていた。

「動作確認もしたいけどもう時間的に無理か……明日テストしようと思うんだが、どうする簪？」

「う、うん……それでいいと思う」

「よし、じゃ明日の放課後だな」

「あ、あのね慎二……ありがとう」

「ん？ああ、気にすんなって。それに言っただろ？好きでやってんだから気にすんなって」

「迷惑じゃ……なかった？」

「迷惑だと思ってるなら俺も来ないよ。そこまでお人好しじゃない。それに俺は簪だから手伝ったんだよ」

「私だから……か……か……か……か……へへ♪」

「そうそう、簪はもっと笑ったほうがいいよ、可愛いんだから」

「か……かわいい……！？……私……私……！？」

あれ、機嫌良くなったか・・・？それよりも俺の理性がやばかった・・・ふう、やっと落ち着いた。その後、特に問題は無く寮に戻った。

〵・〵・〵・〵・〵・〵

次の日の昼休み、クラスリーグマッチの組み合わせ表が張り出された。なんと、俺は鈴と当たった。ん？そいやあんまり鈴と話してないな。ま、いつか。

その後何事も無く放課後になった。簪の起動テストだ。

「おいで・・・打鉄式式」

うん、装甲も問題ない。

「とりあえず、飛行テストしてくれ」

「わかった」

簪は返事をすると思ひ上がった。うゝむ、流石は日本の代表候補生、うまいね。加速、減速、旋回、急停止、上昇、下降を一通りこなして戻ってきた。

「どうだ？調子は」

「問題ない・・・ただ少しブースト出力とスラスターの動きがズレてた」

「まあ、それくらいならお前のデータと参照して調整すれば問題な

いさ。じゃ、次は武装テストだな」

俺は、パネルを操作して的を出した。

「じゃ、まずはミサイルだな」

俺はそう言って、的の数を20に増やした。

「・・・少し多過ぎ」

「ミサイルをとりあえず全部出してくれ。どこまで正確性があるか知りたいし」

「・・・わかった」

簪は空中ディスプレイを操作して的をロックオンしていった。カシヤ、と音になった後にミサイルが次々と発射される。時差はあるにしろミサイルは次々と的に当たっていった。爆発の煙のせいで視界が悪いが時間が経つにつれて煙が晴れていった。結果は全弾命中。よし、マルチロックオンシステムは問題無いな。

「じゃ、次は荷電粒子砲を頼む」

俺はパネルを操作して違う的を出した。さっきと違うところは的が動くことだ。簪は荷電粒子砲をコールして的を狙った。キューンとチャージする音が聞こえ発射の準備が終わる。3秒か・・・もう少し早くならないものかな・・・ドーン！と音がする頃には的を破壊していた。うん、威力は問題なし。まあ、やっと実戦でも使えるくらいになったな。そばに簪が戻ってきた。

りかと俺は思つて寮に戻つた。

うん、あれだね簪もフラグが立ってるね．．．．．さて、どうしようかね．．．．．ま、今はどうしようもできないからな．．．．．そんなことよりも何故か鈴が怒っていた。まあ、ずっと放っておいたから怒られるのも当たり前か．．．．．あとで謝ろう．．．．．って丁度良いことにクラスリーグマッチがあつた。

その時に謝るか・・・！！明日から特訓だ！！！！
・・・
二日しかないけど

チートもたまには役立ったな……チートも使いようか……？
(後書き)

何故か簪のキャラがわからない件

まあ、酷かったですよねえ

すみません

何でも面倒事ばかり・・・・・・・・(前書き)

今回も戦闘描写がひどい結果に・・・・・・・・

何でこうも面倒事ばかり……………

さて、なんだかんだで始まったよクラスリーグマッチ。俺はもうアリーナに出ている。前には鈴。

「ねえ、慎二。私としての約束覚えてる？覚えてたら今回の件は忘れてあげる」

「ああ、もちろん覚えてるさ。あれだろ『料理が上手になったら毎日私の料理食べてくれる？』だろ？」

「そう！そうよ！！よく覚えてたわね、あんた。あんたの性格だったら忘れてそうだけど」

「人に聞いたいてそれかよ。全く褒めて欲しいもんだぜ」

「で、返事は？」

「ん…………それはお前が試合に勝ったら教えるってのはどうだ？」

「なによそれ…………まあ、いいわ。じゃあ、勝ったら絶対教えなさいよね！」

「ああ、約束は守るさ」

『両者規定の位置まで出てください』

そこまで行くと試合のブザーがなった。さあ、これからはいつ攻撃してもいいわけだ。気を引き締めなきゃな。俺は菊一文字をコール

した。対する鈴は青龍刀みたいなものをコールした。おいおい何だ
ありゃあ。さすがにあんなの喰らったらやばいな……。俺が思
考に浸っていると鈴が先制攻撃を仕掛けた。俺は瞬間的に菊一文字
だけじゃ受けきれないと判断し漆黒ノ太刀もコールした。そして。
二本の刀で鈴の攻撃を受けた。ガキン！！と音が周りに響いた。
くっ……。漆黒ノ太刀を出しといて正解だったな……。
・一撃が重い。

「へえ、良く受け止めたわね！」

そう言うのと鈴は更に力を込めた。くっ！このままじゃ押し切られる
！俺は即座に菊一文字で鈴に切りかかる。
だが、動きは読まれていたように回避された。うまく距離を取られ
た……。やっぱ強いな、鈴。

「ふん、あんたの動きなんかお見通しよ！」

鈴がまた突進してきた。俺は雪月花の機動力でそれをうまくかわし、
力を込めた。

（もう練習した技を使わないとまずいか……）

俺は、漆黒ノ太刀を振るう。すると、剣から衝撃波が出た。

「まったくあんたは規格外ね！」

そう悪態をつきながらもノーダメージで回避する。まあ、それくら
いは読んでたさ……。俺は、鈴の回避した方向にもう一回衝撃
波を放つ。

「そんな同じ手を通じると思ってたんの！」

衝撃波を鈴は青龍刀で弾く。

「それはダメーだ！」

その声が聞こえたとき鈴は慎二を見失っていた。いくらISは360度見えるからと言って乗っているのは人間だ。必ず死角が出てくる。人間は後ろを見ることには慣れない。そこを雪月花の機動力で不意を突いた。次の瞬間には慎二は鈴に連撃を食らわせていた。

「つく……なめるなあ！」

鈴は青龍刀を振り回す。だが慎二には当たらない。

「遅い！」

攻撃の隙を突いて俺はまた鈴に連撃を当てる。だがそれは鈴の罠だった。鈴はバックステップをして距離を取りISに付いていた二つのボールみたいのから何かが飛び出る。

「ッ！！！」

俺はそれをもろに喰らった。地面に叩きつけられ意識が一瞬飛かけるがISに意識を引っ張られ無理やり意識が戻った。次々と放たれる見えない砲弾を俺はかろうじて躲していた。

「へえ、よくかわすじゃない。衝撃砲＜龍砲＞は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

「見えないっていったって感じることはできるさ」

俺は龍砲を見切っていた。見えないものをよけるのは簡単だ。ましてや最低限ハイパーセンサーで見える。これなら簡単によけられる。鈴からは絶えず衝撃砲が発射されている。だがもう当たらない。避けながら俺は

「鈴、本気で行くぞ」

「なによ、今までは本気じゃなかったわけ？」

「まあ、そんな感じだ……俺を見失うなよ？」

残りシールドエネルギーは400。これならいける……。『疾風迅雷発動』ISのディスプレイに表示されたあと俺は加速した。今回は20%に制限されているがこの状態の雪月花はIS史上最速になる。

「な、なんて速さなの！？龍砲が全然追いつかない！？」

俺は砲弾の雨をよけながら鈴に接近し、切りかかった。この調子で何回か切れば試合は終わる。そう思った矢先。

ズドオオオオオオン！！！！！！

アリーナ内に轟音が響いたかと思うと

『鷹野君、試合は中止です！早くピットに戻ってください！』

山田先生からの声が聞こえた。すると次は

『ステージ中央に熱源感知！敵ISにロックされています！』

今度はISからの警告音が鳴り響く。

「慎二！試合は中止よ！早くピットに戻りなさい！」

「多分無理だな。だって俺ロックされてるみたいだし」

「なんですって!？」

「ま、落ち着けや。時間稼ぎはなんとかなるさ。ってなわけで山田先生早いところ増援頼みますよ」

『え?だ、だからピットに……』

ブツッ!俺は通信を無理に切った。そして疾風迅雷を解除する。長くなるかもしれないから切っておかないと燃費が悪いからな。

「つて、あんた無理に通信切ったわね」

「だって仕方ないだろ?あいつのビームはシールド破るみたいだし誰かが食い止めないといけないんだよ」

「まあ、確かにそうね……」

「ま、いっちょ共同戦線と行こうか。鈴、シールドエネルギーは？」

「150ってとこね……あんたは？」

「俺は320だ。危なくなったら離脱しろよ?無理は絶対するな。あいつのビームはシールドエネルギーをだいぶ削るはずだ。最悪死ぬかもしれない。絶対にそれだけはやめてくれよ」

「あんたもね。たまにあんたは無茶するからね」

「ああ、わかってるさ……さて、敵さんが出てきたみたいだぜ」

アリーナ中央の煙が晴れてきて敵ISの姿が確認できるようになってきた。敵のISは全身黒のフルスキントップで操縦者の姿は見えない。腕と胸の辺には大きな砲身が見える。あれでシールド破ったのか……

「さて鈴、俺が接近するからお前は援護を頼む」

「分かったけど、怪我はしないでね。まあ、怪我は私がさせないけど」

「ああ、頼りにしてる」

俺たちはアイコンタクトをとり敵に接近した。

くくくくくくくくくく

「鷹野君！？鷹野君、返事をしてください！鳳さんも！もしもし！」

「本人たちがやると言っているのだ。任せてやれ」

「な、何をのんきな事を言ってるんですか織斑先生！」

「鷹野が言っていることは正しい。あのISのビームはシールドを破る。最悪観戦しにきていた生徒にも被害が及ぶ。誰かが足止めをしなければならぬ」

「だったら、増援を！」

「これを見ても」

そう言って千冬が指さした画面にはこう書かれていた。

「遮断シールドがレベル4に設定！？扉も全てロック・・・あのISの仕業ですね」

いつの間にかモニター室で試合を見ていたセシリアと箒も画面を見ていた。

「そういうことだ。支援に行きたくとも行くことが出来ない。現在、3年の精鋭たちがシステムクラックを実行中だが時間がかかるだろう」

「・・・待つことしかできないと言うわけですね」

「そういうことだ。大人しく待っている」

箒はただアリーナ内を映す画面を見つめていた。

（私は何もできないのか・・・？私はいつも傍観しかできない・・・そしていつも助けて貰うばかりだ・・・）

）・・・）・・・）

「つく！こいつ攻撃が聞いていないのか！？」

俺たちは順調に攻撃しているように見えるが相手にはダメージが見

られない。相手からビームが発射される。俺たちは一回距離をとった。

「鈴、シールドエネルギーはどのくらい残っている？」

「50ね．．．．．そろそろまずいかも．．．．．あんたは？」

「俺も100しかない．．．．．鈴、お前はピットに戻れ」

「な!?! 私はまだ戦えるわよ!」

「じゃあ、お前は死ぬつもりか？あのビームに当たったら絶対に死ぬ。だからお前は戻れ。お前がそこまでする必要はない」

「あ、あんたはどうするのよ! あんただって似たようなモンじゃない! ! ! !」

「ああ、そうだな」

「だったら．．．」

「だが、結局誰かが足止めをしないとないらしい。それにこういう損な役回りは男の役目だ」

「で、でも．．．」

「心配してくれるのは嬉しいけどな、鈴。俺はもう誰かが死ぬのは絶対に見たくない」

（誰かが死ぬ．．．．．?もしかして慎二は誰かが死ぬを見た・

・・・・・・？)

「鈴、分かってくれ」

「ッ!？・・・・分かったわよ!勝手にすれば!!!!」

「ありがとう、鈴」

「でも!!!!!!!」

鈴は泣きそうな顔で

「絶対!絶対によ!!!!!生きて帰ってきなさいよ!!!!!」

「・・・・ああ、約束する」

鈴は自分を頼ってくれない寂しさと悲しさ、不甲斐なさ。そして・・・・・・。隠し事をされている怒りが心を埋め尽くしていた。何で涙が出ていたのかは鈴自信にもわからない。俺は鈴がピットに戻るのを見送りISと向き合った。

「さてと・・・・第2Rの始まりだ・・・・」

俺は二本の剣を持ち直し体に力を込めた。切りかかろうとした。だが・・・・・・

『慎二!!!!!!!』

突如、アリーナに響く声によってそれは遮られた。声の主は箒だった。

『私は！・・・私はいつも守られてばかりだ・・・だからこの恩を返す前には絶対に死なないでくれ！・・・でないと私は・・・』

最後の方は涙を流してほとんど鳴咽に近く聞き取れなかった。だが、敵ISは箒の方を見ている。まさか・・・！？
次には、ISはビームのチャージを始めていた。

「箒！！！！！！逃げろ！！！！！！！！！！」

だが、箒は泣いていて状況を把握出来ていない。くそッこのまま普通に行ってももう間に合わない。仕方ない。『疾風迅雷発動』

「疾風迅雷のリミッターを解除！！！！」

『ですが、人体にダメージが・・・』

「そんなのは関係ないんだよ！！！！！！！！！！」

『・・・・・・了解』

その時、俺は風になった。ISの絶対防御を無効にしてすべてのエネルギーを疾風迅雷に回した。体が・・・・・・軋む・・・・・・
・・・。この時慎二の体にかかっていたGは10Gにも及ぶ。ビームが発射された。

(くっそ！！！！！！間に合え！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！)

俺はビームと箒との間に体をねじ込んだ。次の瞬間には背中にとて

つもない衝撃が走った。

「ぐあああああああああああああああああああああ
あ!!」

「し．．．ん．．．．．．．．．．じ．．．．．．．．．．？」

箒は信じられないものでも見たような顔でこっちを見ていた。よかった．．．．．．．．．．怪我はない．．．か。そう思って、俺は下に落ちる。絶対防御を無効にしていたから背中にはひどいケガを負っているだろう。そして、意識も落ちそうになる。が

（ここで意識がなくなったら．．．．．みんなが危ない．．．．．
．まだ．．．．．．．．．．終わらねえ!!!!!!!!!!!!!!!!!!）

俺は無理に体を動かし、ISに全力で切りかかる。よかった、まだ疾風迅雷は発動している．．．．．これで止めが．．．．．させる．．．．．

「これで終わりだあああああああああああああああああああ
あああああ!!」

敵ISの右腕を切り落とし、剣を切り替えて胴体を切った。

（浅かったが．．．．．これで．．．．．．．．．．問題ないだろ．
．．．．．．．．．．中枢を狙ったし．．．．．）

その願いには反して敵ISの左腕が襲ってきた。よける術もなく俺はただ飛ばされた。そして背中から地面に打ちつけられる。

セシリアがピットからISを展開してスターライトmk?で射撃をしていた。おかげで敵ISは行動不能になっていた。ああ・・・
・・・これで終わったか・・・
むが問題ないだろう・・・それに何か眠いな・・・昨日の夜ふかしが効いてきたかな?そう思って俺は意識を手放した。

何か周りで声が聞こえる。とても聞いたことがある声だ。この声は・・・
・・・箒か・・・鈴も・・・セシリアも・・・
簪もいるな・・・みんな泣いている・・・

そんな泣くなと言いたい声がでい
俺はまた意識を手放した

何でこうも面倒事ばかり・・・・・・・・(後書き)

書いたあとに気づきました

一夏が出てない!.....!

一夏マジ空気!.....!

うん、今回はあれだね……………(前書き)

今回は短めです

うん、今回はあれだね……

「ん……………？ここは……………」

目に飛び込んできたのは白だった。って、またかよ……………
・・暇だな神も

「こらこら、暇とか言うな」

「だって、事実そうじゃん」

「言つとくが今回は違うから。で、お前はここにいる理由わかるか？
てか、何やってたか覚えてるか？」

「え？何やってた……………」

確か……………鈴とクラスリーグマッチで戦ってて、そしてゴー
レムが乱入してきて……………

「……………ああ、俺は死んだのか」

「いや、正確に言うときている。が、ほぼ瀕死の状態だ。あのビ
ームを受けて生きているのは奇跡だぞ」

「でも、お前がくれたチートボディがあるじゃん」

「そうはいつでも、あれほどの攻撃を受けるのは想定してねえよ」

「……………一つ教えてくれないか？」

「ん？何だ？」

「箒は……みんなは無事か？」

「ああ、ケガの一つもしてないぜ」

「そうか……よかった」

「でもな、お前が死んだと思って泣き喚いてたぞ」

「……」

「で、今回は別に死んではないがすぐにあっちの世界に戻す」

「なんでまた……」

「それはな、お前が死ぬと泣くやつがいるからだよ」

「だったら、みんな死にそうなやつはそうじゃないか……
・だったら何で」

「あの子を助けなかったってか？」

「……何で知ってる」

「お前な、俺は神なの。お前の世界を覗くこと、記録を見ることなんて簡単なの」

「……」

「・・・お前だったら大切な人がいなくなる悲しみが分かるだろう？」

「・・・ああ」

「だったら、さっさと戻って安心させてやれ」

「・・・・・・・・・・・今回は落とすなよ」

「あれ？バレてた？はっはっはっ・・・・・・・・・・じゃ、行ってこい」

「・・・・・・・・分かった」

そう言うと神は指を鳴らした。するといつもどおり穴があいた。さて、さっさと戻らないとな。そう思い俺は世界に戻った・・・・・・・・

・・・・・・・・

千冬side

「お前ら、少しは休め。倒れたら面倒が増えるだろうが」

篠ノ之、オルコット、鳳、更識はこいつがああISからの攻撃を喰らって眠ってから少ししか休んでない。こいつはもう4日も目を覚まさない。医師によると、瀕死の状態ではあるが命に別条はない。が、いつ目が覚めるか分からない。下手をすると一生目を覚まさないかもしれない、とのことだった。まったく、こいつは何でこうも無理をするんだ・・・・・・・・私に頼ればいいものを・・・・・・・・目が覚めたらそこを説教してやろう。あと、ISの絶対防御を切っていたこともな。

「そんなにそいつの事が気になるか？」

4人は頷いた。そういえば、篠ノ之とオルコットと鳳は分かるが何故更識がいるんだ？まさか、あいつもう落としているのか？いや、ここにいる時点で落ちているか。あいつは昔から何故かモテるな。顔は良くもないが悪くもないのにな。まあ、あいつの性格に惹かれるんだろう。私もいつの間にか惹かれていたしな……。ご、ごほん、話を戻そう。さて、こいつらを休ませるにはどうしたものか。・・・・・

「こいつが丈夫なのは知っているだろう？その内目を覚ますさ。だから、今は休め。こいつが起きたときに説教ができるようにな」

「はは、そうですね。今回の事は説教してやらんといけませんね」

「本当そうですわね。わたくしを頼ってくれなかったことを説教しませんと」

「そうよ、私なんか途中でピットに戻されたし」

「……。何も一人で頑張らなくてもいいのに」

4人であいつの事を言いたい放題だな。まあ、これで休むだろ。まったく世話の掛かるガキどもだ。

千冬 side end

・・・・・

千冬さんが箒たちを休ませた次の日の夕方、俺は目を覚ました。

「ん・・・？」

「「「し、慎二^{さん}！？」」「」」

「あれ、お前ら・・・何でここに？」

4人は次の日も看病に来ていた。やはり想い人が心配なのだろう。そして、説教してやろうと昨日話していたがやはり慎二が起きてくれたことが嬉しくてそんなことはすぐには出来なかった。涙がとめどなく流れる。これが嘘ではないかと思うくらい。4人は慎二に泣きついた。

「「「うわあああああん！！！」」「」」

「おわ！？」

「何をやっているのだバ・カ・者・・・さっさと起きな・・・いか。心配しただろう」

「わたくし、あなたが死んだらどうすればいいんですの・・・？
？助けてもらってばかりで何も返せてないのに・・・」

「バカバカバカ！！！！本当に死んじゃったと思ったじゃない・・・
・・・」

「慎二・・・良かった・・・目が覚めて・・・本当
に良かった」

「みんな・・・・・・・・」

泣いていて途中聞き取れなかったりもしたが、本当に心配してくれていたのはしっかりと伝わった。本当俺は何をやってるんだかな・・・・こんな良い娘達を心配させて・・・・

「何を泣いてるんだ貴様・・・・・・・・ら」

そんな呆れた感じで入ってきた千冬さんは俺が起きていることに驚いているようだった。

「鷹野・・・・・・・・目が覚めたか」

「ええ、まあ。体中は痛いですけどね」

「当たり前だ、バカ者」

そういつも通りに見える千冬さんも誰の目から見ても安心しているようだった。少し涙ぐんでいたように見えたのは俺だけだろうか？
というか、そろそろ泣きやめてくれないかな・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

その様子を見て千冬さんは少し不機嫌そうだった。何で？そんなに泣くの嫌いだったけこの人・・・・

「・・・・さて、鷹野。話があるんだが」

「はい、なんでしょう」

「ゴーレム侵入時の通信の無断切断、絶対防御の無効化、勝手な行動をしたこと、疾風迅雷の無断リミット解除・・・・・・・・話聞かせてもらおうか？」

「・・・え？何であんなに目が据わってらっしゃるの？すごい怖いんだけど・・・・・・・・俺はこれから何をされるんだ・・・・・・・・？」

「それと鷹野。お前はこれから1週間流動食以外口にするな」

「ああ・・・・・・・・はい」

やっぱり目が据わってるよこの人・・・・・・・・そんなに怒らせることしたかな・・・・・・・・

「今回は明日にも退院できるそうだ。今日はゆっくり休めよ」

「ああ、それと千冬さん。ここってどこの病院ですか？」

「IS学園最寄りの総合病院だ・・・・・・・・さて、小娘共も寮の門限には帰って来いよ」

そうやって千冬さんは病室から出ていった・・・・・・・・何か含みのある言い方だった。箒たちも流石に泣き止んでいた。

「全く慎二！お前は どうしてあんな無理なことばかりするんだ！」

「そうですわよ慎二さん！わたくしを頼ってくださいまし！」

「あの時はよくもピットに返したわね！」

「少しは私を頼って・・・！」

・・・・・・最初に予定していた説教タイムが始まった。・・・・・・
・・・・ちなみにこのあと1時間続き、寮の門限が近くなったのを
教えなんとか帰ってもらった。

「はあ、何か今回は疲れたな・・・・・・」

ダメージもあるのだろう、やはり体の節々が痛い。それに異様にダ
ルイ・・・・・・あのシールドを破る威力のあるビームを受けた
のだ、生きている方が不思議だ。背中では火傷だけで済みそうだ。

「・・・・・・今回は守れたな・・・・・・！！！！！！！！」
・じゃあ、あの時は何で・・・・・・！！！！！！！！」

その言葉を言っている慎二は酷く悲しそうだった。人前では見せない
ような・・・・・・だが、慎二自身は気付いてないかもしれないが
時折顔に出るのだ。なので、箒、セシリア、鳳、簪は気付いている。
だが、何故そのような顔をするのかは分からないだろう・・・・・・
・何故ならそれは4人にとって空白の時間なのだから・・・・・・

あのあと、千冬さんに怪我の状態を聞いたんだよ、最初の。そして
らさ、結構ひどかった・・・・あばら骨2本骨折、前よりも酷

い内蔵（主に消化器官）へのダメージ、出血多量による貧血、腕の骨のヒビ、足の骨のヒビetc・・・書けばほんとにきりがなかったくらい多かった。それなのに5日で退院出来るなんて・・・・・・この体どんだけチートボディなのさ。まあ、今回に関しては感謝だけだな。ふああ・・・さすがに退院できるとは言ってもダメージは残っているらしい。今日は疲れたから寝るわ。早くIS学園で過ごせるようにな・・・

うん、今回はあれだね・・・・・・・・（後書き）

結構長くしようとしたら失敗orz

やること無くなって短くなるしまつ・・・・・・・・

そういえばやっと1巻分終わりましたね

もう少しでシャルとラウラの登場ですな

まったく、山田先生には困ったもんだ・・・・・・・・（前書き）

今回もそうです

それと題名は関係ない、はずです

ったく、山田先生には困ったもんだ……………

俺が退院した日は月曜日だった。……………何でもタイミン
グが悪いかね……………ま、悩んでも仕方ないけどな。どう
せ過ぎたことだし。それで、いつも通りに登校したさ。いつもと変
わらない楽しい学校だったよ。昼食は流動食だけだな。I S 学園
に来てからは楽しくて仕方ない。中学までは正直言って学校は嫌い
だったんだけどな、I S 学園は好きな部類に入る。何が違うんだろ
うな……………うゝん考えてもわからないなら考えない、それ
が一番。それで今は自室にいるわけよ。いやゝ1ヶ月も過ぐすと親
近感も湧くな。帰ってきたとき少しは懐かしかったしな。そんな風
に感傷に浸っていると山田先生が入ってきた。

「鷹野君、篠ノ之さんいますか？」

「はい、います。って、それ入ってきて言うセリフですか？」

「す、すみません」

山田先生は勢い良く頭を上げ下げしていた。すげゝ、ヘッドバンク
みてゝ。って、違う違う。

「怒ってるわけじゃないので頭上げてください。というか、何か用
があって来たんじゃないんですか？」

「そ、そうでした。えっと、お引越しです！」

「……………先生、主語を入れてください」

何でこの人は主語を抜かすんだか。セシリアとの決闘の時もそうだったけどこの人はあれか、興奮してたり慌てたりすると主語が抜けるのか。

「え、えと篠ノ之さんがお引越しです」

「ああ、そういうですか。でも、何で俺じゃないんですか？」

「それはですね、やはり新しい部屋を用意できなかったんですよ」

「それもそうですね」

この寮は基本2人部屋だ。人数合わせのため1人部屋になるかもしれないが基本はそうなっている。一夏は1人部屋に入ったみたいだな、話を聞いている限り。

「せ、先生、引越しは今すぐでないといけませんか？」

「まあ、いつまでも男女が同室っていうのも問題ですし。それに篠ノ之さんだってくつろげないでしょう？」

「いえ、そんなことはありませんが・・・」

ちらっとこちらに視線を向ける箒。ああ、なるほど・・・

「箒、そんなに俺と別の部屋になるのが嫌か？」

「そ、そういうわけではないが・・・」

モジモジと身をくねらせながら言う箒であるが恥ずかしいのだろう。

まったく、何でも可愛いんだろうな・・・これも可愛いといじめたくなるな・・・

「あ、そんな風に言葉濁すってことは嫌なんだ・・・俺、傷つくなあ」

「ち、違う！私は慎二と同じ部屋の方が良い！！・・・あ」

「・・・し、篠ノ之さん、さすがにそれは問題があるので諦めてください」

「・・・はい」

あゝ、墓穴掘って先生に注意されて小さくなってわ。しかも、悲しそうな顔してるし。はあ・・・何で二度と会えないみたいな顔してるんだか・・・

「箒、別に引越して言ったって同じ寮の中だろ？別に会いたくなったら部屋に遊びにくらいいいさ」

「・・・分かった。では、片付けをする」

そう言って箒は荷物をまとめ始めた。今までも様子を見て微笑んでいた山田先生が

「ふふ、なんだか2人はお似合いですね」

なんてことを言うから箒がむせてるじゃないか。俺は近寄って背中をさすってやった。

「大丈夫か、箸？水でも飲むか？」

「い、いや、大丈夫だ。……何でお前は平気な顔をしている」

「何でって言われてもな……」

「も、もしかして、私じゃ嫌か……？」

そんなさ、ビクビク怯えながら聞くなよ……いじめたくなるだろ。でも、今回は真面目に答えるか。

「嫌じゃないよ。ただ、そんなこと言われても実感が無いだけだつて。だから、そんなビクビクすんなって」

「……嫌ではないのだな？」

「だからさっきもそういったじゃんか」

「あ、二人ともそろそろ引越しの準備をしてください」

済まなさそうに山田先生が言ってきた。別に悪くないんだからビシツと言えればいいのに、千冬さんみたいに。って、あそこまでビシツ言われるのも嫌だな。

「す、すいません。直ぐに片付けます」

そう言って、箸は片付けに戻った。ものの30分もすると箸は荷物をまとめ準備が終わっていた。さすが箸としか言えないね、ここまですぐで手際がいいと。

「では、篠ノ之さん。部屋に案内するので付いてきてください」

「はい………ではな」

「ああ、いつでも遊び来いよ。毎日暇してるから」

「分かった。寝坊するなよ？」

「しないように努力するさ」

そう言って箒は部屋を出ていった。うゝむ、さすがに二人部屋だと広く感じるな。ま、この広さを独り占めでしきって考えよう。そう思って俺は勉強に取り掛かった。

20分ぐらい経っただろうか、いきなりドアからノックが聞こえた。俺は返事をしながらドアを開けると箒がいた。

「あれ、箒。どうした？忘れ物か？それとももう寂しくて遊びに来たか？」

「そ、そうではない！は、話があるんだ」

「話？だったら部屋に入るか？」

「いや、ここでいい」

オホンと咳払いした箒は決意を固めたように口を開いた。

「来月の学年別トーナメントだが、優勝したら………付き合ってくれ……！」

「・・・・・・・・・・は？」

「で、では話はここまでだ。またな」

箒は逃げるようにして部屋に戻っていった。しばらくぼうっとしていたが意識が戻り思った。

「あれって要は告白・・・・・・・・・・なのか・・・・・・・・・・」
「？」

俺は疑問を抱いたままその日は眠った。

・・・・・・・・・・

時刻は同日（正確に言うとな次の日の）2時、音も無く慎二の部屋が空いた。そのまま、ベットの近くまで行き慎二の寝顔を見ている様だった。

「ふーん、この子が慎二君か」

するとその人物は扇子を広げ、しばらく眺めていた。

「別に顔は普通の男の子なのに何であんなに人気があるのかしらね、ふふ」

慎二の吐息の音だけが支配する空間に妖艶な笑みを浮かべた女子がいる・・・・・・・・・・あれ？何かいやらしい・・・・・・・・・・

「何で簪ちゃんがあんなにゾッコンなのか気になるわね。全く、

明日が楽しみね」

そう言ってその女性とは部屋を出ていった。……いや、何もやってないからね？

くくくくくくくくくく

次の日、学校に行くところ噂が流れていた。「学年別トーナメントで優勝すると鷹野慎二と付き合える」と言う噂だ。って、何か思うんだが最近俺の株上がってない？最初は一夏だったけど……。あ、あんまり嬉しくないんだよな、学校生活は地味に過ごしたいし。あ、そもそもIS学園にいるからまず無理か。そういえば、この噂俺が聞いてよかったのか？女子に聞いたら口が滑ったみたいだし。ま、聞いちゃったもんは仕方ないか。そう思い俺は教室に入った。

「おはよ」

俺があいさつするとなんとも言えない空気が流れた。なんというか噂の事を聞きに行くか行かないかって空気だよ。誰か行けよみたいなね。俺は話しかけられなかったしとりあえずは席に座った。隣の席の一夏はまだ来ていないみたいだ。今日は俺が早いだけだしな。いつもより早く目が覚めたから早めに教室に来たってところだ。そういうば、何であんなにぐっすり寝てたんだろ？起きたら体が軽いし。そんなことを考えていると誰かが教室に入ってきた。顔が見たことないしリボンの色が違うから上級生だろう。その女性とは教室に入ってきたと思ったら俺の席の前に来て止まった。ん？俺は上級生に知り合いなんていないよな。って、ことはあれか。一夏目的か。初対面の人は一夏の方が良いらしい。やっぱりそこは、普通とイケメンの違いですよ。……はあ、自分で言ってる悲しくなってきた。すると、いきなり声が聞こえた。

「慎二君？聞いてるの？」

「え？あ、はい」

って、この人よく見たら・・・

「聞いてて無視してたの？もう、おねーさん傷ついちゃうな」

「すみません、少し考え事してたもので。それで、何の用ですか楯無生徒会長？」

そう、この人はこのIS学園の生徒会長更識楯無だ。まあ、簪のお姉ちゃんだな。この世界の更識姉妹は仲がいい。この世界でも楯無さんはハイスペックだが、そこらへんに簪はコンプレックスを抱いてないみたいだ。でも、確かこの人とは初対面のはずだが・・・

「何用って、もしかして昨日の夜のこと忘れてるの？」

は？昨日の夜？何の事だ？・・・もしかして、昨日の夜感じた気配って・・・

「あんなことまでしたのに・・・やっぱり私は遊びだったのね！」

おおよと泣き真似をして地面に座り込んだ。今まで聞き耳を立てていた女子からも冷たい視線が。って、三人こっち来てるよ！予想は付くけどね！簪にセシリアに鈴だ。しかも全員、目から光が消えてやがる！！！！

「慎二・・・・・・・・」

「どういうことか・・・・・・・・」

「説明してくれるんでしょうね・・・・・・・・？」

箒、セシリア、鈴の順番で有無を言わず聞いてきた。とういうか、脅迫だね？

「ちょっと待て！！！！俺は何もしていない！！！！！！」

「ほう、言い訳するのか」

「往生際が悪いですわよ」

「いい加減、白状しなさいよ」

あの・・・・・・・・みなさん、何故にこんなに恐ろしいんでしょう？すると、いきなり楯無さんが笑い始めた。

「あははは！やっぱり人気者ね、慎二君」

「つて、笑ってないでなんとかしてくださいよ、生徒会長！」

「わかったわよ。それとおねーさんの事を名前で呼んでくれないと協力してあげないぞ？」

「分かりましたよ、楯無さん」

「うーん、まあいいかな。協力してあげる」

「ありがとうございます」

「別にみんなから慎二君を取ろうなんてしてないから安心してね」
って、俺は物ですか。人ですらないのか。

「昨日はただマッサージしただけよ」

「へ？マッサージ？・・・ああ、だから体が軽いのか」

「そうよ、私が直々にやってあげたんだから感謝してもらわないと」

「って、勝手に人の部屋に入り込んだ人が言うセリフですか」

「だって、男のIS操縦者ってどんな人か気になったんだもん」

「なにが、だもんですか。不法侵入ですよ、全く」

「生徒会長権利よ。そんなの関係ないもの」

「権力乱用じゃないですか！！！！」

「あ、そういえばこのクラスの担任って織斑先生よね？」

「はい、そうですよ」

「じゃ、時間だから戻るわね。慎二君、また来るからね、はーと」

「何がはーとですか。迷惑なのでこなくて結構です」

「もう、慎二君のいけずう」

そう言いながら楯無さんは教室を出ていった。すると、入れ違いで千冬さんが入ってきた。

「諸君、おはよう」

「「「「「「おはようございます」」」」」」

みんな、俺たちも会話で哑然としていたが直ぐに席に着いた。

〃・〃・〃・〃・〃・〃

放課後、俺は箒たちからの脅迫……いや、尋問……も違う……ほとんど拷問みたいなものからやつとのことで抜け出し、部屋に戻るところだった。最近、一人部屋になったからくつろげる……そう思い俺は寮の自室のドアを開けた。

「おかえりなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

ボタン。あれ？俺疲れてるのか？流石にあの拷問に耐えたんだ見えてもおかしくないけど裸エプロンに楯無さんが見えるのはおかしいよな。よし、もう一回開けてみよう。

「おかえりなさい。わたしにします？わたしにします？それともわ・た・し？」

「選択肢が三つに見えて一つしかない!!!!!!!!!!」

「なによ、おねーさんじゃ不満なの？」

「今、疲れてるんですよ。拷も……尋問から帰ってきたんですから」

「だったら、私も居るからベットで寝たらいいじゃない」

「俺は一人の休息を期待してた!!!!!!!!!!」

そんな俺の言葉はお構いなしに楯無さんは部屋に入っていく。

「それで、何の用ですか」

「寂しくて遊びに来たの♪」

「お帰りください」

「箒ちゃんは良くて何で私はダメなの？」

「……何故それを」

「生徒会長権利」

「俺のプライバシーは何処に————!!!!!!!!!!」

「大丈夫よ、最初からそんなのは存在しないわ」

「衝撃の事実発覚!？」

「部屋には無数の盗聴器類が」

「ああ、それならもう壊しましたよ」

「あれ、結構高かったのよね。弁償してよ？」

「あんたが犯人か!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「まあ、冗談はこれくらいにして」

「さっさと入って欲しかった!!!!!!」

「澄野^{すみの} 瑠美香^{るみか}」

「!!!!!! どうしてその名前を」

「更識の情報網を舐めてもらっちゃ困るわ」

「.....」

先程の楽しい雰囲気はどこにやら。空気は豹変して重くなっていた。

「そんなに怖い顔しなくても大丈夫よ。.....まだ、気にしてるのあの事」

「.....吹っ切ったつもりなんですけどダメですね。やっぱり、俺は弱い」

「そんな風に溜め込むのは良くないわよ。吐き出すことも必要なの。泣くときはおねーさんがいつでも胸を貸してあげるから」

胸・・・・・・・・

「あ、えっちい目で見た」

「い、いや、そんなことないですよ!？」

「ふふ、焦った顔も可愛いわね」

「可愛いって、あんまり言われても嬉しくありませんからね?」

「それもそうね。じゃ、私は戻るわね」

「・・・・もしかしてこれだけのために?」

「そんなことないわよ。慎二君の顔見たかったのも本当だし」

「嘘だ」

「あ、信じてないな。これでも心配してるんだからね」

「はは、それはどうも有難う御座います」

「・・・・さっきも言ったけど辛い時は私に言ってね」

「はい・・・・やっぱり楯無さんはいい人ですね」

「私は元からいい人よ?」

「そうですね」

俺は感謝の意味も込めて笑顔でいった。

「うー!!!」

「ど、どうしました?」

「い、いえなんでもないわ。それじゃあね」

そう言って、楯無さんは部屋に戻った。

〵・〵・〵・〵・〵・〵

楯無side

全く、あのセリフのあとにあの笑顔はないでしょう!思わず抱きしめたくなっちゃったじゃない!!!・・・・・それにしても、簪ちゃんが言う以上に魅力的ね、慎二君は。あんなに、明るくていい子そうそう居ないわよ。でも・・・・・・あれは・・・・・・
・・・・・辛いわね。澄野 瑠美香、ね・・・・・・慎二君の抱えてる闇はどれほど深いのかは分からないけど・・・・・・できれば救ってあげたいわね・・・・・・さて、そのためには

「情報を集めなきゃね。さあ仕事するぞお」

その日の生徒会室は夜遅くまで電気が付いていたみたいだ・・・

楯無side end

はあ、まったく楯無さんには本当に敵わないな・・・・・・・・・・はあ、
何で俺は周りの女性に支えられてるのかな・・・・・・・・・・情けなえ。
俺もいい加減吹っ切らないといけないのに吹っ切れないし・・・・・・・・
・はあ、本当ダメだな・・・・・・・・多分次に楯無さんに言われたら泣き
そうだ。あの人には不思議と頼ってしまいそうになる・・・・・・・・
・・・・なんでかな。さあ、明日も学校だから寝ないとな。

まったく、山田先生には困ったもんだ・・・・・・・・・・（後書き）

この、無理矢理感・・・・・・・・

まあ、なんとなりますよね

そして、ついにシャル達を登場させられるかな

転校生は貴公子と眼帯さん……………？（前書き）

やっところさシャルルとラウラ登場ですよ

転校生は貴公子と眼帯さん・・・・・・・・？

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました」

次に日の朝、教室に衝撃が走った。転校生が来たのだ。いや、転校生が来るのは不思議はない。現に、鈴は普通に転校してきた。問題は性別だ。男が転校してきたのである。

「お。男？」

「はい、日本には同じ待遇の人がいると聞いて本国から・・・」

「きゃあああああああ！！！！」

「男、男よ！！！！しかも三人目！！！！」

「しかも今回は守ってあげたくなる系の！！！！」

「ああ、このクラスでよかった！！！！」

次にクラスを支配したのは女子による黄色い声だった。うーん、やっぱりいつになってもこれには慣れない・・・・・・というか頭が痛くなる。

「あゝ、騒ぐな。静かにしろ」

と、千冬さんがぼやいていた。あの調子じゃ本当に面倒くさそうだ。昔からこういうの嫌いだったからな、千冬さんは。一夏に目をやると同じような顔をしていた。はは、やっぱり考えることは同じか。

「み、みなさん静かにしてください！もう一人いますので」

もう一人の転校生はなんというか刃物の様な鋭さを身にまとった生徒だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いまだに本人は口を開かない。山田先生が必死にお願いしているが撃沈していた。・・・・俺は頑張った方だと思うよ、先生。さらに呆れていたん千冬さんが口を開いた。

「・・・・・・・・挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

ビシッと敬礼をしていた。ん？あれか。このラウラとか言う奴は千冬さんがドイツに行っていたときに教えていた生徒か何かってことか？

「ここではそう言うな。今はもう教官じゃない。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ビシッ踵を合せ、手を横に付けた。典型的な気を付けだな。ここまです綺麗だと凄みがあるかもしれない・・・

「ラウラ・ボーデビッツヒだ」

「・・・・・・・・」

あれ？短くね？流石にもう少しあるよね・・・

「あの、以上ですか？」

「以上だ」

せっかく山田先生が優しく話しかけたのにバツサリ切り捨てたな。逆にあそこまでバツサリいくと清々しいくらいだな。まあ、山田先生は泣きそうだけど。と、俺がそんなことを考えているとラウラが一夏を見て

「！！貴様がっ」

と言って、いきなり

バシンッ！

小気味がいぐらいの綺麗な張り手だった。さすがの一夏も何が起きたのかわかってないな、ありゃあ。状況を読めたらしく一夏は席を立て

「何すんだよ！」

と、少しご立腹だった。まあ、当たり前か。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

と言に残し、席に座った。クラス中が微妙な空気に包まれるが千冬さんがまた面倒臭そうに言った。

「あゝ、これでSHRを終わる。各自着替えて第二グラウンドに集

合。今日は二組と合同で行う」

そう言うともみんなは準備を始めた。さて、俺らも早くいかないとな。

「ああ、それと鷹野と織斑。デュノアの面倒を見てやってくれ」

「了解しました」

そう言って千冬さんは教室を後にした。入れ違いにデュノアが近寄ってきたが今はそれどころじゃない。

「君たちが鷹野君と織斑君？僕は……」

「あゝ、悪い。今はそれよりも更衣室に行かないとならないからちよつと来てくれ。よし、行くぞ一夏」

「おっけ」

俺はデュノアの手をとった。最初は場所が分からないし、しかもあれがあるしな……

「デュノア、少し我慢してくれよ」

「え？それってどういう……」

その瞬間、周りから出てきたのは女子の大群だった。あゝ、少し遅かったか。黛薫子先輩率いる上級生軍団だ。

「お、あれが噂の転校生くんか！」

って、情報早すぎないか？もしかして、情報漏れてたのか？でも、それよりもこの大群を抜けないと授業に遅れて出席簿アタックの餌食だ。

「黛先輩、インタビューを後でさせてあげるので少し足止めしてくれませんか？」

「マンツーマンのインタビューだったらいいよ」

「じゃ、それでいいです」

「はーい、みんな待ってねー。転校生君の情報はきちんとこの黛薫子がきちんとインタビューしますので……」

よし、これで問題は解決した。あとはもう少し走れば何とかなるな。俺たちは第二アリーナの更衣室まで無事にたどり着いた。

「ふー、デュノア大丈夫か？」

「な、何とかね。ははは……」

何て乾いた笑いをしていた。まあ、あれには驚くよな。俺たちも最初驚いて授業に遅れてスパーンとやられたからな。

「あれでもまだ軽い方だったんだぜ？なあ、慎二」

「まあ、いつもよりはな。あれには慣れないとやってけないしな。ところでデュノア、そろそろ着替えようぜ」

「うん、それと僕のことはシャルルでいいよ」

「だったら俺も慎二でいいや」

「俺も一夏でいいぜ。それと慎二何でお前は少し投げやりなんだよ」

「えゝ？、そうかゝ？いつもどうりじゃねゝ？」

「いつもよりもダルそうだけど、大丈夫か？」

「大丈夫に決まってんじゃないか！」

「って、お前！ふざけてたのか！！！」

「当たり前だろ！お前は俺がいじめるんだよ！！！」

「そんなのふざけんな！！！」

「ふふ、二人は仲がいいんだね」

「それ、前にセシリアにも言われたな。そんなに見えるか？」

「うん、本当に仲がいいように見えるよ」

うゝん、そんなもんかね。ま、一夏と俺のことだしどうでもいいか。

「って、慎二！時間まずいぞ！！！」

「え？うわ、マジだ！！！」

よく見ると授業まで二分を切っていた。さっさと着替えよう。俺と

一夏は中にISスーツを来ているから関係ないけど。

「よっしゃ、着替え終わり」

「俺も終わった」

「ぼ、僕も終わったよ」

やっぱり、シャルルも中に着ていたのか。まあ、結構当たり前っぽいし普通か。って、そういえばシャルルって本当に男か？喉仏はないし、肩幅も何か女っぽい、体型もなんだか女っぽいし……。ましてやこの時期に男のIS操縦者が発見されてTVで放映されないのもおかしい。まあ、国が隠してたり、女っぽい男もいるから一概に断言はできないけどな。

「どうしたの？慎二。授業遅れちゃうよ？」

「ん？ああ、そうだな。早く行くか」

俺たちはグラウンドに走り出した。

くくくくくく

「遅かったな。まあ、授業には遅れてないからよしとするか。ほら、さっさと並べ」

そう言われて俺たちは列の最後尾に並んだ。ふく、流石に全力疾走に近かったから疲れたな……

「あんたたち遅かったじゃない。何かあったの？」

そう言って話しかけてきたのは鈴だった。ああ、そうか。今日は二組との合同授業だったな。

「ああ、いつも通り上級生に追いかけられそうになったんだよ」

「それはお疲れ様」

「何をそこで話している？ 静かに話を聞け」

「「は、はい」」

千冬さんは話に戻った。

「では、今日は模擬戦をしてもらおう。そうだな……さっき話していた奴らに実演してもらおう。鷹野、鳳！ 前に出ろ」

「えー、マジですか？」

「な、何で私まで」

「ほう、貴様ら。そんなに叩かれないか？」

「「いえ、滅相もございません！！！」」

「ならばよろしい」

そういう千冬さんは何かを待っているようだった。

「ち……織斑先生、実践ってどうすればいいんですか？ 鈴と戦え

ってことですかね？」

「そう慌てるな。お前たちの相手は……」

ヒュウウウウウ！！！！！！！！！！

ん？悪い予感しかしないんだが……

「ど、どいてくださーい！！！！！！」

やっぱり！！！！俺は瞬時にISを展開し鮮明になった視界で山田先生を捉えた。さすがに一夏みたいに飛ばすのはダメだよなあ……
……仕方ない……俺は落下地点に入り激突する角度、スピードをある程度計算し下に潜り込み山田先生をキャッチすることに成功した。ふう……一安心

「っと、大丈夫ですか？山田先生」

「は、はい。すみません」

ん、何か背中に痛い視線が……よし、気にしない。俺は山田先生を下ろした。

「では、今回は山田先生と戦ってもらおう」

「え？こんなドジな人ですか？」

「大丈夫だ。今のお前たちなら負けるさ」

「へえ、そんなに強いんですか。山田先生は」

山田先生に目をやるとさっきの言葉にダメージを受けているようだった。やっぱり、気にしてるんだね。

「山田先生、模擬戦を始めてください」

「は、はい。分かりました」

なんでこの人はこんなに、てんぱってるんだろう……ま、気にしたら負けか……。俺と鈴はアリーナ上空に上昇していった。

くくくくくくくく

「さて、こんだけ上がれば問題ないだろ」

ふと、下を見るとみんながだいぶ小さくなっていた。まあ、ハイパーセンサーがあるから関係ないけどな。

「山田先生、はじめしよう」

「そうですね。では、いきます！」

山田先生が使っている機体はラファール・リブアイブ。第二世代型の量産型ISだ。後付武装、拡張領域イコライザが豊富にありオールレンジで戦える万能機だ。だが、第2世代なのが玉に瑕。山田先生はライフをクールし射撃をしてきた。セシリアと同等……。いや、それ以上の精密射撃だ。このままだと、雪月花の機動力でも当たるかもな……

「鈴、俺が接近するから援護頼むぜ」

「まゝた、あんたの援護なのね。まあ、いいけど。後ろは任せなさい！」

「頼むぞ」

俺は山田先生に接近した。菊一文字をコールし、横なぎに振るう。しかし、山田先生はそれを回避し反撃をしようとする。そこで鈴の龍砲からの攻撃が無数に降りかかる。が、山田先生はそれも回避している。

（さすがにこれくらいじゃ無理か・・・なら！）

『疾風迅雷、発動』今回の疾風迅雷は当たり前だがリミットをかけた状態だ。だが、機動力は格段上だ。俺は高速移動しながら山田先生の攻撃を回避し鈴の攻撃に気がむいたところで攻撃を仕掛ける。漆黒ノ太刀もコールし二刀流で襲いかかる。

「鷹野流自己剣技、乱れ桜」

乱れ桜は二本の刀を逆手に持ち替えてISの機動力を使い相手を切り刻む技だ。ま、最近出来たから技としては改良の余地はたくさんあるけどな。俺は山田先生に攻撃を仕掛けたように見えたが実際は山田先生の罠だった。俺が接近すると山田先生はいきなりこっちを向いた。その手にはいつの間にかコールしたグレネードランチャーが。今は高速状態だからそう簡単に回避は出来ない。

ドカーーーーン！！！！

空中でグレネードの爆発に巻き込まれた俺はそのまま地面に激突し

た。

「いてて………」

「だから言っただろう？簡単に負けるとな」

「本当にそうでしたね………」

俺が居なくなったあとの戦いは時間も掛からず決着がついた。

）．．．．．）

「慎二！何あんた先に落とされてるのよ！！！」

「……悪い」

「まったく、あんたに接近戦を任せただから押し切りなさいよね
！！！」

「……返す言葉ありません」

試合後、落ちてきた鈴と話し先程の模擬戦の反省会になったが、主な原因が俺にあるせいで反省会と言うか俺のダメだし会になっていた。

「だからあんたは弱いだよ。決めるところで決められないから」

「……はい」

「あんたのさえない理由もそれで決定ね」

「いやいや、それは関係なくね!!!!!!」

「何よ、文句あるの?」

「いえ……ありません」

「ほら、その二人。いつまで話している。次、やることの説明をするから聞いておけ」

俺たちは話すのをやめ、千冬さんの方を向いた。

「よし、では専用機持ちの織斑、鷹野、オルコット、鳳、デュノア、ボーデビッツヒの六名に別れて実習を行う。では別れろ」

そう言うのと、みんなは散らばった。が、多くはシャルル、一夏、俺のところに来た。

「デュノア君の専用機ってどんなの?」

「私、デュノア君の操縦みたいなく」

「フランスってどんな国?」

と、言った感じに質問攻めにあった。それに、見かねた千冬さんが

「この、馬鹿者共! 誰が固まれと言った! 出席番号順に別れろ!!!」

と、言うともんなは渋々別れた。おっと、俺のところにもみんな来たな。さて、始めるか。

「じゃ、最初はISに乗って歩行と停止をやってみようか」

「「はい」」

うん、みんないい子だな。言うことをきいてくれるし、この調子じゃ早く終わりそうだな。最初の子がISに乗った。

「おーけー。じゃ、歩いてみようか」

「分かった」

そう言って歩き出すが少しぎこちない。まあ、パワーアシストがあると行ってみんなISにはそんなに触れてないからな。仕方ないよな。

「よし、上手だ。その調子その調子。じゃ、そこで停止してね」

「ふー、緊張したー」

「あ、ちゃんとしゃがんで降りてね。次の人が乗れなくなるから」

「あ、そうだったね。忘れそうだったよ」

そう言ってその子はしゃがんで降りた。よし、さっさと終わらせよう。

「じゃ、次の人行こうか」

結果、俺たちは手際よく最初に終わった。ラウラの班の見たら、か

わいそうだった。だって、ラウラ自身が話さなくてみんな凄く気ま
ずそうだったんだぜ？まあ、千冬さんが手助けはしたけど。

く・く・く・く・く・く

そのあとの昼休み、俺はシャルルのところに行った。

「シャルルく、飯食いにいこうぜく」

「え？僕と？迷惑じゃないの？」

「いや、迷惑だって思ってるなら最初から来ないよ」

「そ、それもそうだよね」

「男同士なんだから仲良くしようぜ」

「うん」

「じゃ、一夏も連れて行くかく」

途中、一夏を見つけて食堂に来た。さくてと、今日は何食べようか
なく。

「す、凄いメニューの多さだね」

「ん？ああ、そうだなく。俺たちも最初に来たときは驚いたもんだ」

「これだけ多いと迷っちゃうね」

「俺もそうだけど毎日違うのを食べて色々食べてるぜ」。今、やつと半分くらいだよ」

「え、一ヶ月で半分？・・・本当に多いね」

「そうなんだが・・・シャルル、人の邪魔になるから移動しようぜ」

「あ、うん。分かった」

俺たちは食券を買っておばちゃんに食券を出した。

「おばちゃん、よろしく」

「はいよ」

「今日も美味しいご飯頼むよ」

「まかしときな」

いつも通りのおばちゃんが食事を運んでくる待った。

「慎二って食堂のおばちゃんとも仲いいんだね」

「ん？ああ、あれはな適当に話しかけたら面白い人だったからそれから話しかけるようにしてんだ」

話をしているうちに食事がきた。うーん、今日もうまそうだ。俺が頼んだのは生姜焼き定食。生姜焼肉に林檎をすったものを入れとくのが隠し味らしい。それのおかげで程よく甘くご飯が進む。シャル

ルはカルボナーラ、一夏はうどんを頼んでいた。そういえば、カルボナーラに生クリーム入れるのって日本だけらしい。だからこの食堂は生クリームを入れない。いろんな国の生徒が居るからな。俺たちは、適当なところに席を見つけ食事を始めた。

「「「いただきま〜す」」」

最初に肉を食べる。う〜ん、やっぱり林檎のすり身がいい味を出している。肉は四枚入っているんだがこれだと一枚でご飯一杯はいける。だから、いつもお代わりするんだよね、ご飯だけ。俺はいつも通りご飯が無くなったのでおばちゃんの所に行きご飯をもらってきた。

「は、早いね。と言うか、おかずがまだたくさんあるのにお代わりって・・・」

「シャルル、慎二はいつもこの調子だから気にしちゃダメだぞ。まあ、最近まで流動食だったから食欲がすごいんだけどな」

「流動食って、一体どうしたの？」

「それは自業自得というか何と言うか・・・」

「?どういう意味？」

「後で教えるよ。とりあず早く食べないと・・・」

「ん? お前ら食わないなら俺にくれよ」

慎二は席に座る。ちなみにご飯は四杯目である。

「お前が早すぎるんだよ。まったく、腹壊すぞ」

「これだけうまいもん食って腹壊すなら本望だ」

「はは、慎二って食べるの好きなの？」

「ああ、だけど朝は食えないから必然的に昼と夜が多くなるんだ」

「夜はあんまり食わない方が体にはいいんだぜ、慎二」

「いいんだよ、腹減ったときに食べるのが一番」

「ねえ、慎二。その生姜焼き定食、僕に少し分けてくれない？そこまで美味しいって言ってるど気になっちゃった」

「ん？いいよ。ほら」

俺は箸を差し出した。

「え？」

「え、じゃなくて早く食べろよ」

「でも・・・」

「もしかして、あーんってされるのが恥ずかしいのか？」

「あ・・・まあ・・・うん」

「じゃ、皿に置いとくぞ」

「うん・・・」

（もしかして、慎二って他の娘とかにもこうしてるのかな？女の子だったら恥ずかしいって気づかないの？って、そういえば今は男だった・・・だからか）

うん？シャルルが難しい顔で唸ってるな。もう食べられないのか？よし、だったら手伝ってやろう。俺はシャルルのカルボナーラを少し貰った。

「あ！僕のカルボナーラ！！」

「あれ？もしかしてお腹一杯とかじゃなかったのか？」

「違うよ。もう、慎二は食いしん坊だね」

あれ？少しご立腹？そんなに取られるのが嫌だったのか？まあ、これだけ美味しければ仕方ないか。

「悪いな、シャルル。勝手に取っちゃって」

「別にいいよ。でも、今度はちゃんと行ってね？」

「分かった」

「お前ら、時間なくなるぞ」

一夏がいつの間にか食べ終わっていて忠告してきた。時計を見ると

残り10分を切っていた。

「うお！マジだ！！！！早く食わないと！！！！」

と、言っても俺はご飯半分、シャルルももうほとんど食べていたのが問題なかった。だけど、時間に追われて食べるとご飯が美味しくないんだよね。急いでるからあんまり味わからないし。やっぱりご飯はゆっくり食べるのが一番だな。俺たちは食器を片付け、授業に遅れないように教室に向かった。教室についた途端に箒と鈴とセシリアが近づいてきた。

「ちょっと、慎二どこ行ってたのよ！！！！」

「え？どこって食堂だけど・・・」

「なんでさっさと行ってしまったんだ！！！！」

「いや、だって腹減ってたし・・・」

「わたくし達がお弁当を用意しましたのにあんまりですわ！！！！」

「え？弁当作ったのか？」

「そうだ！」

「そうよ！」

「そうですわよ！」

「じゃ、後でくれないか？しっかり味わって食べようと思うんだが」

「そ、そこまで言うのなら仕方ないな」

「し、慎二がそこまで言うのなら・・・」

「慎二さんおっしゃるのなら・・・」

「サンキュー」

五校時が始まりそうだったから俺たちは席に戻った。

〵・〵・〵・〵・〵

今は放課後、授業が終わり自由時間になる。基本的に生徒はISの自主訓練をする。基本俺たちも訓練はしている。ちなみに箒達の弁当だが、どれも美味しかった。セシリアは原作と違い料理は上手だった。後でお礼言わないとな。

「そういえば一夏達って放課後自主訓練しているんだよね？」

「ああ、基本的に模擬戦ばかりだけどな」

「だったら、僕も参加させてもらってもいいかな？」

「俺はいいぜ。だけど慎二に聞いてみないと。おい、慎二——！！」

「一体何だ？ さっさとアリーナ行かないと場所なくなるぞ」

「そのことなんだけどさ、シャルルも入れていいよな？」

「あ？何で俺に聞くんだよ」

「だって、慎二がリーダーっぽいし」

「あのなあ、放課後の訓練はお前のためにやっているようなもんだぞ。だから、それはお前が決めろ」

「だったら、参加してもらおう。よろしくな、シャルル」

「うん、よろしく」

「ほら、さっさと行くぞ」

俺たちはアリーナに向かった。

くくくくくくくく

「ふうく、ちょ、ちよつと休憩」

「一夏こんなんでへばるなよ。まだまだこれからだぞ」

今はアリーナで訓練をし一段落したところだ。今日は箒、セシリア、鈴は来ていない。箒は剣道部、セシリアはテニス部、鈴はラクロス部に顔を出しに行ったらしい。うくん、お礼言いたかったのにな。仕方ない、明日言うか。

「……………慎二、何か悪役みたいだね」

「そうか？一夏をシバくのは俺の役目だからそう見えるだけだって」

「し、慎二、今日は終わりにしようぜ？時間も時間だし」

そう言われて時計を見るともう六時近かった。っち、今日は七校時だったから放課後短いな……。もうすこし一夏をいじめたかった。

「じゃ、帰るか」

俺たちは更衣室で制服を羽織い寮に向かった。

「そういえばシャルルってどこの部屋なんだ？」

「たしか二人の部屋の余ってる方を使えって言われたけど」

「一夏の部屋ってベットって付けられるのか？」

「付けられるらしいけど、業者の人に頼まないと出来ないらしい」

「じゃ、必然的に俺の部屋か。シャルルとはルームメイトか」

「改めてよろしくね、慎二」

「おう、こっちもよろしく頼むぜ」

話しているうちに寮についた。階段までは一夏と一緒に登ってからは反対方向なので別れた。

「じゃな、一夏」

「また、明日な」

俺たちは部屋に向かった。部屋の前に来たのでとりあえず部屋番号を教えた。

「ここが俺たちの部屋な。1025号室。ちゃんと覚えとけよ」

「そんな簡単に忘れるものでもないでしょ？」

「それもそうだな」

俺は部屋のドアを開けた。

「おかえりなさい。お風呂にします？ご飯にし……」

バタンツ！………何で楯無さんが居るんだ……幻覚なのか……？いや、そんなわけはない、な………はあ………

「ど、どうしたの？いきなりドアを閉めて」

「いや………何でもないよ」

「ちょっと、慎二君。いきなり閉めるなんて酷いんじゃないの？」

「って、出てこなくてもいいですから……！！」

「何よ、二回目なのに何のリアクションもしないなんてダメね」

「俺は必ずしもリアクションを取らないといけないんですか……！！」

「そうよ」

「何て面倒臭い役に使われたんだ……！俺……！！！」

「だって、反応が面白いんだもん」

「そんなに決めないでください……！！！！！！！！」

「え、えーと。慎二、この人は……？もしかして彼女とかなの？」

「え？違う違う。この人はこの学園の生徒会長の更識楯無さんだよ。彼女でもなんでもないよ」

「ふーん……」

あれ？シャルルの反応が冷たい？何で？って、部屋に来ていきなりこれじゃそうなるか。

「慎二君それは酷いんじゃない？おねーさん傷ついちゃうな」

「思ってもないこと言わないでください」

「えー、以外に慎二君のこと好きかもよ？」

「それはそれで嬉しいですが、とりあえずお引き取りください。部屋に入れないじゃないですか」

「じゃあ、私も入れば問題ないね」

そう言い楯無さんは部屋に入っていった。はあ、仕方ないか。

「シャルル、部屋に入ってくれ」

「・・・お邪魔します」

「って、シャルル。ここはお前の部屋になるんだからお邪魔します
じゃなくてただいまだろ？」

「そ、そうだね。た、ただいま」

「おう、おかえり」

(あ、この感じ・・・懐かしいな・・・お母さん・・・
・・・)

「ん？どした？」

「え？う、ううん。なんでもないよ」

「そうか？だったら早く入ってくれ。ドアが閉められない」

「え、ごめん」

俺はドアを閉めて部屋に戻ると楯無さんがベットでくつろいでいた。
はあ、全くこの人は・・・

「楯無さん、お茶出したら帰ってくださいよ」

「もう、慎二君。つまらないなあ」

「つまらなくて結構ですよ。はい、お茶です。シャルルもどうだ？
日本茶」

「じゃあ、頂こうかな」

「じゃ、適当に椅子にでも座っててくれ」

「うん、わかった」

俺はシャルルの分も茶碗を出して、お茶を注いだ。

「ほい」

「ありがとう」

俺はシャルルにお茶を渡して問題をどう排除するか考えた。が、いい案がない。

「うーん、慎二君が入れたお茶は美味しいわね」

「ただのインスタントのお茶ですよ」

「じゃあ、愛の力かもね」

「はいはい、わかりましたよ」

「あ、信じてないわね」

「シャルル、日本茶どうだ？」

「あ、無視ね」

「う、うん。僕はこういうのも美味しいと思うよ。これが紅茶と同じ茶葉だとは信じられないね」

「ああ、確かにそうだな。確か・・・」

「干している時間が違うのよ。あと、ほうじ茶も同じ茶葉ね」

「・・・・・・・・ご解説ありがとうございます」

「何よ、人がせっかく解説してあげたのに」

「で、用ってなんなんですか？」

「慎二君に会いに来たの」

「で、要件は？」

「だから、慎二君に会いに来たんだって」

「・・・・・・・・マジで言ってるんですか？」

「マジもマジ。大真面目よ」

「だったら、目的は終了したでしょう。帰ってください。今日は疲れてるんですから」

「だったら、マッサージしてあげるわよ？」

「マッサージはいいですよ。あんまりやると体が弱くなりますし」

「それもそうね。じゃ、今日は帰るわ」

「しばらく来なくてもいいです」

「もう、慎二君のいけずう」

ボタンッ！俺は勢い良くドアを閉めた。ふう、やっとゆっくりできる。

「悪いな、シャルル。初日からこんなにうるさくて」

「ううん、楽しいから気にしないで」

ああ、シャルルいい奴だな。俺の周りにこういう奴が多いといいのに。そのあとあシャワーの時間の相談、雑談などをしてその日は就寝した。

はあ、何かシャルルに悪いことしたな。って、何で楯無さんが部屋にいるんだよ。何も今日じゃなくてもいいじゃないか。ふう、シャルルも転校初日にハードな一日だったな。しばらくはこんな日は来ないだろう。それよりもこの寮の鍵は大丈夫なのか？簡単に楯無さんに侵入されてるし。もしかしてマスターキーみたいなのを楯無さんは持っているのか？・・・・・・・・分かん！！！よし、寝よう。もう疲れた。おやすみ・・・・・・・・

転校生は貴公子と眼帯さん・・・・・・・・・・？
(後書き)

うーん、今回ってどうなんですかね？

まあ、毎回ながらにグダグダさでしたよね

もう少し後先を考えられる頭が欲しい・・・・・・・・

何で世の中はこうも腐ってるんだ……………(前書き)

今回は結構原作に沿って話を書いてみました

何で世の中はこうも腐ってるんだ……………

「一夏がオルコットさん達に勝てないのは、単に射撃武器の特性を理解できてないからだよ」

今日はシャルルが転校してきたの土曜日の午後、俺たちは第三アリーナに来ていた。基本的に土曜日は午前授業で午後は自由時間になっている。が、アリーナなどが開放されるのでISの訓練に励め、と言うことらしい。ちなみに何故第三アリーナかと言うと、模擬戦、射撃訓練などが出来て基本的な訓練にはもってこいの場所だからだ。

「うーん、理解しているつもりなんだけどなあ」

「いや、現にセシリアに勝てないんだから理解してないだろう」

「一夏の後付武装がないんだよね？」

「ああ、拡張領域がないらしい」

「それは、ワンオフ・アビリティに容量を回しているからじゃないかな？」

「んー、でもワンオフ・アビリティにそんなに使うもんか？」

「一夏の零落百夜は、結構卑怯な能力だから仕方ないんじゃないかな？」

「ま、それ言ったら俺も似たようなモンだよな」

「慎二の場合はリスクが大きすぎるよ。全開にしたら骨にヒビが入っちゃうんでしょ？それに内蔵にダメージがいつて流動食しか食べられなくなるし」

「それが一番の難点だなあ」

「慎二は食べるのが好きだもんね」

「流動食は食った気しないんだよな」

「はは、体に優しく出来てるから仕方ないよ」

「じゃ、一夏の射撃武器対策講座でもやるか。シャルル頼む」

「任せて。でも、最初はどの武器にする？」

「うーん、無難にライフル当たりでいいんじゃないか？」

「分かった」

「なあ、一体何してんだ？」

「何ってお前にライフル使わせるんだよ」

「え？でも使えないんじゃないのか？」

「基本的にはね。でも、使用者がアンロックすれば許可した人は使えるんだよ」

シャルルは、コールしたライフルを一夏に手渡した。

「しかし、このライフも普通だったらアンチマテリアルライフ並みの威力があるんだよね。しかも相殺は勝手にISがしてくれるし。ましてや、連射機能に優れてると来たもんだ」

「まあ、それはISの能力が高いから出来るんだよ、これは絶対に生身の人間では扱えないし」

「それだけISがすごいんだよね。っと、一夏の訓練をしないと。一夏、準備出来たか？」

「ああ」

「じゃ、的出すな」

ピッピッと音がしたあとに的が出てきた。

「よし、撃ってみろ」

一夏は、的に向かって撃った。的の中心ではないにしろそこそこ真ん中に近い。最後の的の撃ち終わると点数が出てきた。33点。満点が40点だからまあまあだな。

「どうだ？感想は」

「うん、とにかく早いつて感想だ」

「慎二も一回やってみる？」

「ん？いいのか？」

「この際だから慎二もやろうよ」

「んじゃ、やってみますか」

俺はシャルルからライフルを貰い規定の位置に来た。

「よし、準備できたぞ」

「じゃあ、始めるよ」

シャルルが言い終わると的が出てきた。俺はライフルを構えて打ち始める。ガウン！ガウン！！生身の人が扱える火力を超えている音だ。だが、難なく連射ができる。改めて思ったが、すごいなIS。いつの間にか、的撃ちが終わったらしい。えと、点数はっと。40か。満点かあ、うん上出来だ。

「す、すごいね、慎二。射撃武器使うの初めてなんでしょ？」

「まあ、そうだけど昔から射的とか得意だったからなあ。その影響じゃないか？」

「いや、それでどうこうできる問題じゃないと思うんだけど・・・」

「シャルル、慎二の規格外はよくあることだ。気にしたら、この先やっていけないぞ」

「そ、そうなの？何というか凄いね、慎二は」

そんなこんなで話していると、周りがざわついていた。ん？一体どうしたんだ？

「ねえ、あれってドイツの第三世代型IS？」

「うそ、本国でもトライアル段階だって聞いてたけど」

なるほど、ラウラか。まったく、いきなり一夏を叩くなんてびっくりしたよ。え？原作の知識はどうしたって？もう、15年も生きてるんだ、ほとんど忘れたよ。そんなことを考えていると、一夏にラウラから無線が入った。

『お前も専用機持ちらしいな』

「だったら何だよ」

『私と戦え』

「嫌だね、戦う理由もない」

『お前には無くとも……こちらにはあるんだ！！！！』

そう言うと、ラウラは肩に付いていた大型カノンのチャージを始めた。発射まで3秒つてとこか……。遅いな。俺は前に出ようとしたシャルルを後ろに下げ、漆黒ノ太刀をコールした。そして、発射された弾を二つに両断した。

「な！！！！」

これにはラウラも驚いていた。当たり前だ。弾を弾くならまだしも弾を切ったのだから。

「いきなり危ないもの使うなく、ラウラさんよ」

俺は漆黒ノ太刀を肩に担ぎながら言った。もう、落ち着いたらしく普通に返答してきた。

「ふん、お前には関係ないだろう」

「関係ないねえ……ま、関係はないんだが、俺の仲間に手を出してみろ……殺すぞ」

その言葉と表情の威厳に恐怖を覚えたのだろうか、少したじろいで何かを言おうとしたとき放送が入った。

『その生徒！何をしている！組と出席番号を言え！』

「ふん、興が冷めた。今日はこのくらいにしてやろう」

そう言うのと身を翻し去っていった。はあ、やっと終わったか。

「……本当に慎二って規格外だね。あのカノンから打ち出された弾を切るなんて」

「ま、気にすんな。それよりも今日は終わりにしないか？何か疲れたし」

「そうだなあ、今日は戻るか」

そう言って俺たちは更衣室に戻った。

「ふう、最近暑いなあ」

「まあ、夏が近づいてるんだろ。仕方ないさ」

いつも、俺と一夏はここで着替えてから帰る。

「じゃ、じゃあ僕は先に寮に戻ってシャワー浴びてるね」

「おう、分かった」

そう、シャルルはいつもここでは制服を羽織い寮に戻ってから着替える。前に理由を聞いたら自分の部屋じゃないと落ち着かないからだそう。ま、人それぞれだしそこは良いんだ。けど、着替えを見られたくないような動作をしているからなかなかあ……ま、他人に着替えを見られてもいいことないか。あ、確かボディソープ切れてたのシャルルに言っていないな。ま、気づくだろ。俺たちは少ししてから寮に戻った。

$$\begin{array}{c} \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \end{array}$$

寮の部屋に入ったらシャワーの音が聞こえた。そういや、シャルルが浴びてたな。ボディソープはっと、確か棚に入ってたな。そのうち気づくだろうし、取っというてやるか。俺は棚からボディソープを取り出した。洗面台に置いておこうと、シャワー室に向かおうとした時、ドアが空いた。

「あ、慎二？ボディソープ取ってくれない？」

「おう、分か……た……？」

「え？・・・きゃあ！！」

少し状況を判断するのに時間が掛かった。なんせ、シャワー室のドアから出てきたのは『女』だったのだから。女性特有の膨らみや母性の象徴(?)があった。

「・・・とりあえずボディソープ渡しとくな」

「う・・・うん」

俺はシャルルにボディソープを渡してから、少し状況確認をした。とりあえずシャルルが女だったことだ。これについては、まあ何となくだが納得がいった。今までの挙動不審は女だとバレないための演技だったのだろう。だからこそ、不振に思う点が何箇所もあった。まあ、一夏は気にしてなかったみたいだけどな。最低限、バレないための訓練はしていたのだろう。次に理由だが、これもある程度予想はついている。確かシャルルは、デュノア社の息子になっている。まあ、娘だったわけだが。最近デュノア社は今、経営不振に陥っている。理由としては第三世代型ISの研究が進まない、といった理由だったはずだ。現に、シャルルの専用IS『ラファール・リヴァイブカスタム?』は第二世代型ISだ。と、今考えられるのはこれくらいか・・・あとはシャルルから話を聞いたら聞こう。

しばらくするとシャルルがシャワー室からでてきた。今までと違うことは、その何だ・・・胸があることか。しばらく無言だったが、俺が口を開いた。

「なあ、シャルル」

ビクッ！

まあ、今までより神経質なんだろう。驚いても仕方ない。

「紅茶入れるけど、飲むか？」

「う、うん。じゃあ、貰おうかな・・・」

やっぱり、今までより元気無いな。今は色々と考えているのだろう。俺は簡易キッチンへ行き、買っておいたミントティーのパックを出した。お湯が沸くまでの間、コップやらを用意した。沸いたお湯を一度カップに入れて少し温度が下がるのを待つ。シャルルは今、神経質になっている。少しぬるめのお湯が丁度いいだろう。あと何故ミントティーかというと、ミントには精神安定作用があるからだ。少しぬるくなったお湯にパックを入れる。色が出てきたからシャルルに持っていった。

「ほら、紅茶だ」

「あ、ありがとう」

シャルルは、一度紅茶を飲むと少し落ちつたようだ。

「ふう、慎二が入れる紅茶って美味しいね」

「美味しいって言っても、結局パックだけだな」

「それでもだよ。温度だってミントティーを選んだことだって・・・」

「……慎二は優しいね」

「別に優しくないさ。……ただ、誰かを失うのが怖いだけさ」

「え？ 最後の方なんて言ったの？」

「なんでもないよ」

しばらくお茶を飲んで落ち着いたのだろう、ポツリポツリと話してくれた。

「………慎二、僕が何で男装してたか聞きたい？」

「まあ、聞きたいっちゃ聞きたいが……シャルルが言いたくないなら別にいいよ」

「本当に慎二は優しいね。でも、聞いてくれるかな？ 独り言だって聞き流してくれてもいいから」

「ああ、分かった」

それまで、迷っていたようなシャルルだったが覚悟を決めたようだった。

「僕がデュノア、フランスのデュノア社に何かしら関係があると思っ
ているかもしれないけど、それは当たり前なんだけど、少し違う。
僕はデュノア社の社長の本妻の子じゃないんだ」

「って、事は……」

「そう、愛人の子なんだ」

ある程度予想は付いていたが、本人の口から言われるとやはり驚きが隠せない。

「驚くのは無理はないよ。引き取られたのは本当に最近なんだ。半年くらい前かな、母さんが病気で倒れてしまつて病院に入院したんだ。それで、お父さんに当たる人が病室に来て僕に言ったんだ。『母親の病気を直したいなら我々と一緒に来てもらおう。結果が出るまで母親は生かしておいてやる。でなければ・・・・・・・・分かんない』って感じに脅されたんだよ。それにお母さんは重い病気だつて言われて・・・・・・・・」

・・・・・・・・最低な人間だな、糞が。それでもまだシャルルの話は続く。

「それでデュノア社についたらいきなり本妻の人に叩かれたんだ。何が起こったか分からなかったけど言われて気づいたよ。僕なんか歓迎されてる訳がないってね。事前の取り調べで僕はIS適正が高いことが分かっていた。それでデュノア社のテストパイロットをやらされたよ。ISの訓練は辛かったけどお母さんの為に頑張った」

「・・・・・・・・」

「それでニュースが流れたんだよ。『世界初の男のIS操縦者現る』ってね。それで、IS学園に入学することが分かっていたから『同じ男のIS操縦者なら接近できるかもしれない』って会社の中で方針が決まったんだよ。それで、僕が選ばれたんだ。男の振りをする訓練を沢山してこの学園に来んだ。そしてその男のISの情報を盗

んで来いってのが僕の任務。大体はこれで終わりかな」

「・・・・・・・・・・」

「聞いてくれてありがとう。おかげで楽になったよ。そのうち僕は本国に戻るだろうね」

「・・・・・・・・いいのか？」

「え？」

「シャルルはそれでいいのか？」

「そ、それでいいのかって決めるのは僕じゃないし・・・・・・・・」

「そういう意味じゃなくて、シャルル自身はそれでいいのかって聞
いてるんだ」

「ぼ、僕は・・・・・・・・」

迷っている様に見えたシャルルだったが、搾り出すような声で言った。

「・・・・・・・・僕はこの学園にいたいよ・・・・・・・・みんないい人ばかりだし、それにとっても楽しい」

「そうか」

「で、でも、そんなこと聞いてどうするの？」

「何するってなあ……まあ、明日までの楽しみで」

俺はこの夜あること試そうと思う。今まで出来なかったがやらなければならぬ。

「一体何をするの？」

「秘密だ。まあ、何もしなくてもこの学園に入れば最低限三年間は問題ないしな」

「え？それってどういう……」

「特記事項第二十二、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に属さない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

そう、これが使えろ。IS学園にいる間の三年間は絶対安全が保証される。まあ、原則って書いているから何かしらの方法で介入は出来るんだろうけど。

「よ、よく覚えていたね。特記事項なんて五十五個もあるのに」

「んー、何となく頭にぽんと出てきたんだよなあ」

「はは、やっぱり慎二は規格外だね」

「ま、これにも穴はある」

「え？そうなの？」

「ああ、原則介入出来ないとは書いてある。が、何かしらの方法では介入は出来るってことだ」

「そ、そんな・・・・・・・・どうすれば・・・・・・・・」

まあ、不安にはなるよな。せつかく糸口が見えたのにこんなこと言ったら。でも、理解はしてもらわないとやっていけないのも事実だ。ここは妥協できない。

「心配すんなって、シャルル」

「これが心配しないでいれるわけ・・・・・・・・」

「大丈夫だ。何かしら攻撃があつたら俺が守ってやるよ。命に代えても」

「し、慎二・・・・・・・・」

「それにこの話を聞いている限り、お母さんって生きてるんだろ？」

「う、うん」

「じゃ、絶対にお前をお母さんに会わせないといけないからな」

「・・・・・・・・・・慎二・・・・・・・・どうしてそこまで・・・・・・・・・・」

「今まで、お前は頑張った。だから、これから頑張るのは事情を知った俺くらいだ。お前は休んでいいんだよ」

「で、でもそれだと慎二が・・・」

「こういう面倒ごとは男が担うものなんだよ」

「慎二・・・・・・・・」

「さてと、なんだかんだで晩飯の時間だな。飯食いにいこうぜ」

「そうだね」

「と、その前に・・・・・・・・シャルル、それじゃ女だってバレないか？」

「え？それってどういう・・・」

そう、今のシャルルは胸が出ている。これじゃ、外に出たら一発アウトだ。それに気づいたらしくシャルルは腕で胸を隠し抗議の眼差しで俺を見てきた。

「・・・・・・・・慎二のえっち」

「いや、今のって仕方ないか？」

「も・・・・・・・・もしかして、見たい？」

「え？何を？」

「・・・・・・・・僕の胸」

「え・・・・・・・・まあ、そりゃあ・・・・・・・・男だし」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

異様な空気が流れている。シャルルを見ていると恥ずかしそうな、それでいて何かを迷っているような感じだった。恥ずかしがるのは分かるが、一体何を迷ってるんだ？すると、突然ドアの方ノックが聞こえた。

「慎二さん？いらっしゃいますか？」

まずい、今のシャルルは誰が見ても女だ。それをセシリアに見られてたら大変だ。

「シャルル、とりあえずベットに入れ」

「わ、分かった」

「慎二さんいらっしゃいますよね。入りますわよ」

おい、ちよつと待て。何勝手に入ってきてるんだ。だが、問題は解決済み。シャルルはベットに入っているから女だとバレる心配はない。ただ、問題があるとしたら俺の体勢か。不自然にシャルルに毛布を掛けている。ま、なんとかなるよな。

「・・・・・・・・何をしていらっしゃいますの？」

うわゝ、いきなり痛いところついてきたな。理由は・・・・・・・・これでいいか

「いや、シャルルが少し風邪っぽいから毛布かけてたんだよ」

「そうですか、お気の毒に。それよりも慎二さん夕食はまだですか？」

「ん？ああ、今から行こうと思ってたんだ」

「なら、ご一緒してもよろしいでしょうか？」

「いいよ。じゃあ、シャルル帰りにご飯もらってくるから寝てろよ？」

「ゴホゴホ、分かったよ。行ってらっしゃい」

「……そんな露骨な演技いらないだろう。」

「では……」

そう言うと、セシリアは左腕に腕を絡めてきた。

「あの、セシリア？何してんの？」

「あら？前に女性をエスコートするのは殿方の役目だと教えたバズですけど？」

「ああ、そういうことね……では、参りましょうか。お嬢さん」

「ええ♪」

少しシャルルの方を見ると何故か不機嫌そうだった。え？何で？うん、何か食べたいの聞いたけよかったかな。俺とセシリアは食堂に向かった。向かう途中の廊下で箒に会った。

「な、何をしている！！！」

「えーと、セシリアをエスコートしてるんだよ？」

何故疑問形になったかというと、異様に箒が怖くてそうなってしまった。意味が分からないだろうが、なってしまったんだからしょうがない。

「何故そのようなことをしている！」

「えーと、女性をエスコートするのは殿方の役目らしい」

「あら、箒さん。わたくしは今から慎二さんと夕食を食べに行きますの」

「そうか、なら私も同席しよう」

「箒さん、一日四食は体重を加速させますわよ？」

「その点は心配無用だ。その分、カロリー消費をするからな」

と言って、竹刀袋のようなものから取り出したのは日本刀だった。……あれ？銃刀法違反だよな？当たり前のように持っているからあれだが、危ないよね？

「これで居合の練習をするから問題はない。では……」

そう言って右腕を取った。

「………何してますの？ 箒さん」

「なに、女性をエスコートするのは殿方の役目なのだろう？」

そうは言うが、両腕でエスコートってするもんか？ とにかく歩きにくいんだが………だけど、言ったら怒られるし仕方ないか

「ほら、二人とも。早くしないと食堂締まるぞ？」

「う、うむ、そうだな」

「そ、そうですわね」

とりあえず催促して問題は解決した。よかった、面倒ごとにならなくて。そのあと俺たちは食事をとった。帰り際にシャルルのご飯を貰うためにおばちゃんに話しかけた。

「おばちゃん、ちょっととき、もう一食ご飯作ってくれない？」

「なんだい、もしかして足りなかったのかい？」

「いや、俺じゃなくてシャルルの分なんだ。ちょっと体調悪いらしくってさ」

「なんだ、そういうことかい。よし、任せな。栄養あるもの作ってあげるから」

「じゃ、よろしくね」

少しすると食事が運ばれてきた。焼き魚定食だった。確かに栄養はあるな。

「ありがと、おばちゃん」

「食べ終わった食器は明日の朝にでも出しといてくれればいいからね」

「分かった」

俺は部屋に戻った。部屋に戻るとシャルルはベッドに座っていた。

「ただいま」

「・・・おかえり」

あれ、まだ機嫌悪い。

「なあ、何で機嫌悪いんだ？」

「悪くなんてないよ」

「明らかに悪いじゃんか・・・」

「・・・部屋の中で腕組まなくなっただけいいじゃない。全く、見せつけてるの？」

「え？なんて言っただ？」

「なんでもないよ」

あれ、機嫌が戻った。何でだ……ま、いいか

「シャルル、ご飯持ってきたけど食べるか？」

「うん、頂こうかな」

そう言って、俺は机にお盆を置いた。

「あ……」

「どうした？」

「い、いや何でもないよ」

そう言ってシャルルは焼き魚定食を食べ始めるがうまく魚の身が箸で掴めない。あ、もしかして

「シャルル、箸使えなかったのか？」

「うん、練習してはいるんだけどね……」

「じゃ、スプーンでも貰ってくるか」

「そ、そんな。悪いよ」

「それくらい気にするなよ。シャルルは遠慮しすぎだよ。今までの

経験上一人で頑張るのは分かるけど、少しは人に甘えることも覚えとけよ？ じゃないと、息抜きとか出来なくなるぞ」

「・・・・・・・・甘える・・・・・・・・」

あれ？そこに反応するの？ シャルルは迷っていたが口を開いた。

「じゃ、じゃあ・・・・・・・・慎二が食べさせて」

「・・・・・・・・え？ごめん、何て？」

「だから、慎二が食べさせてくれる？」

「・・・・・・・・まあ、いいけど」

顔を赤らめながらの上目遣いはないだろう・・・・・・・・断れないじゃないか。ま、良いか。

「じゃあ、最初は魚が食べたいな」

「分かった」

俺は魚を一口大にして、シャルルの口に運んだ。

「あゝん」

「あ、あゝん」

「どうだ？」

「うん、美味しいよ。次はご飯が食べたいな」

「おっけ」

しばらくシャルルにご飯を食べさせてから少し休み、その日は就寝した。

何あの破壊力。あれを断れる人はこの世に存在するのか？あ、でも少しいじめても良かったかもな・・・しばらくはシャルルが女だってばらさない方がいいだろ。色々とめんどろーだし。それにしても今日は色々あったな。しばらく濃いイベントはないと思っていたが甘かったらしい。この調子じゃ、連続して起きそうだな。はあ、疲れる。さてと、やってみますか。あることを

）
・
）
・
）
・
）
・
）

目が覚めると神域だった。よし………今回は成功した。

「成功じゃなくてお前の気持ちを讀んでこっちによんだんだよ」

「何だよ、神。ハゲたか？」

「ハゲねえよ！　ったく、せっかく讀んでやったのにお礼のひとつも無しか」

「まあ、今回のことは礼を言っとく」

「な、なんだよ、調子狂うな」

「今回は、やって欲しいことがある」

「まあ、あらかた予想は付いてるさ」

「じゃ、話は早い。神、未だにG・W・社ってお前の物か？」

「当たり前だろ。あの世界に無理に作った会社だからな」

「問題はないか………単刀直入に言う。デュノア社を買収してくれ」

「何でだ？」

「あんな腐った人間しかいない会社を独立させておくのはおかしい。だから、買収して欲しい」

「ま、それくらいなら問題はないな」

「あと、もう二つ程やってくれ」

「何だ？」

「一つはシャルル・デュノアをG・W・社の専属のテストパイロットにすること。二つ目はシャルルの親の医療費を出してくれ。頼む」

「何だ、そんなもんか。でも、何でそいつのためにやるんだ？」

「あいつは貧乏な暮らしでも母親とゆっくり暮らすのがいいんだってさ。それを邪魔させたくはない。それにあいつみたいな優しい奴には幸せになってもらいたいんだ」

「ふうん、気づいてないのか？」

「え？何に？」

「いや、何でもない。……………ま、こいつのことだし時間が経てば気づくか」

「？何ブツブツ言ってるんだ？」

「いや、なんでも。あと一つ教えておこう」

「何だよ」

「その、シャルルって娘の母親だが……実は簡単に治る病気だ」

「は？何言ってる……………」

「重い病気ってのはあっちの嘘だってことだ」

「……………つくづく腐ってやがるな」

「ま、それも買収しちまえば関係ないんだけどな」

「そうだな……………じゃ、よろしく頼む」

「おう、任せとけ。なんたって俺は神なんだからな！」

初めてこいつがいい奴だと思った瞬間だった。が、

「……………ん？」

「じゃ、お約束でお別れしましょう♪じゃあな」

「このクソやろうがああああああああああ……」

そして俺は落ちていった……

何で世の中はこうも腐ってるんだ・・・・・・・・（後書き）

なんか、姉の卒業論文を書くためにPCが手元にないときが増えてきました。

更新が空いたときはそういうふうに思ってください。

俺は弱いまだ・・・・・・・・(前書き)

祝PV5万突破!!!

ありがとうございます

あとがきにてお知らせがあります

俺は弱いまだ・・・・・・・・

次の日の日曜日、朝のニュースはある出来事で独占されていた。『デュノア社がG・W・社に買収された』これは日本だけでなく、世界中のニュースを独占したのではないだろうか。IS世界シェア4位のデュノア社がIS世界シェア1位の会社を買収されたのだ。驚くなどといったほうが無理があるだろう。それを、部屋でシャルルと見ていた。

「まさかとは思うけど・・・・・・・・これって慎二がやったんじゃないよね？」

「まあ、俺が頼んだって方が正しいかな」

「あのG・W・社の社長に？」

「そんなとこだ」

「ほんと、慎二って何者なの？」

「うーん、ただの一高校生だよ」

「・・・・そうだね」

「そ、気にしたらダメだぞ」

すると、いきなりシャルルの携帯から音が聞こえた。音からして通話だろう。シャルルがそれに出る。

「はい、もしもし……はい、そうです……はい……
……え？それってどういう……あ」

「どうした？」

「あのね、電話でG・W社の専属パイロットに任命されたって言えばいいのかな……」

神、しっかり仕事はしてくれたか……続けて、またシャルルの携帯が鳴った。

「はい、もしもし……あ、お母さん！……うん……
うん……え、ほんと！？……分かった！じゃ、またね」

「お母さんからの電話か？」

「うん！病気良くなるってお医者さんに言われたって！あと、一回日本に来るって！」

「そうか、良かったな」

「うん！」

よし、問題は万事解決。やっぱ、シャルルには笑ってもらわないと。これまで、頑張ったんだから。お母さんも日本に来るみたいだし、良かった……

「ねえ、慎二」

「ん？どうした？そんな顔して」

「お母さんの事も専属パイロットの事も、もしかして慎二が？」

「俺は何もしてないよ」

「嘘、こんな都合のいいことばかり起きるはずがない」

うーん、これは誤魔化せそうもないな。．．．．．仕方ない、正直に話すか。

「そ、今回の件は全部俺が頼んだ」

「でも、どうしてそこまで？」

「俺は、お前からの話を聞いて心から思った。お前には幸せに暮らして欲しいって。そのために、まずは腐った人間ばかりのデュノア社に消えてもらった。G・W社の社長から教えてもらったんだが．．．．．お前のお母さんが重症だったことは嘘だ」

「え？」

「俺も驚いた。それを聞いて、なおさら必要ないって思った。お母さんの事は心配すんな。医療費も病院提供もG・W社がしっかりとやってくれる。絶対に安全だ。それに、お母さんは直ぐに良くなるって」

「．．．．．慎二、何で僕なんかの為にそこまで．．．」

「シャルル、僕なんかの為になんて言うな。お前はいい娘だ。だからこそ、シャルルには幸せになってもraitたい。お母さんとも仲良

くしてもらいたい。そう思ったから、俺は今回のことをしたんだ」

「……………ありがとう、慎二」

「気にすんなって。あ、あと、専用機どうする？今までののが嫌なら G・W・社の方で新しいの準備するって言ってるけど」

「それはいいよ。このラファール・リヴァイブと一緒に頑張ってきた僕のパートナーだから」

「そっか。じゃ、いらないって言っとくな」

「ごめんね、せっかく用意してくれるのに」

「いいって。本人の意見を尊重しろって言われたから気にすんな」

「うん、分かった」

「じゃ、朝飯でも食いに行くか」

「そうだね！」

久しぶりにシャルルの元気な返事が聞けた日曜日だった…………

……………

次の日の月曜日、学年別トーナメントまで2週間を切った今、放課後は練習をする生徒で溢れている。だが、まだ時間が早いせいで人影はない。そこに、ひとつの人影が出てきた。

「さてと、学年別トーナメントまで2週間をきったとこだし訓練しましょうかね。慎二と付き合うためにも」

人影の正体は鈴だった。鈴もあの噂を信じている一人だ。ただ、噂はただの噂であることには変わらない。そこに、もうひとつの人影が近寄る。

「あら、鈴さん。こんな時間にどうしましたの？」

「それ言ったら、セシリアもじゃない」

「わたくしは学年別トーナメントで優勝するための訓練に来たんですわ」

「あら、あたしと同じね。じゃあ、一回模擬戦でもする？ 確か、一回も戦ったことないし」

「それは名案ですね。どちらが上かこの際はつきりさせましょう」

そう言うと、二人はISを展開した。武器をコールして、お互いに接近しようとしたところにひとつの砲撃が入る。

「つたく、いったい誰よ？ いきなり攻撃してくるなんて非常識じゃない？」

「つふ、甲龍にブルーティアーズか……資料で見たほうがまだ強そうだったな」

そう、攻撃してきたのはラウラだ。

「何、喧嘩売ってんの？」

「あらあら、鈴さん。あちらの方は言語をお持ちでないようですわよ。いじめるのはかわいそうではなくて？」

こちらにも、挑発されて苛立っていたのであろう。皮肉っぱりの言い草である。

「こんな量産機に負けるような奴を操縦者を代表候補生にするなど、数だけを取り柄の国と古さが取り柄の国はよほど人材不足と見える」

「……………なんですって」

「人の事を侮辱するなんてマナーがなくなっていますんわね」

「セシリア、こいつ知らない国にきていきなりいじめられたいそうよ？」

「っは、所詮一足す一は二にしかならん。くだらん種馬の取り合いをしているメスは相手にすらならんな」

「……………よっぽど殺されたいらしいわね」

「……………ここはいつそ消し炭にしてあげましょうかね」

慎二を馬鹿にされて二人の怒りは頂点に達していた。もう一触即発の状態だ。

「さっさと来たらどうだ？こちら暇ではないのでな」

「言われなくても……殺ってやるわよ!!!」

鈴とセシリアは攻撃を始めた。……鈴の言葉の字が違うような気がするが怒っていた、と言う理由にしておこう。

くくくくくくくく

こちらは慎二、一夏、シャルルの三人組である。放課後の方針を決めていた。

「ねえ、慎二。今日は訓練どうする？」

「うーん、そうだな。学年別トーナメントまで二週間切ったし、訓練するか」

「えー、こここのところ毎日じゃないか？」

「何だよ、一夏。不満だったのか？」

「そうじゃないけどよく、たまには休もうぜ」

「何言ってるんだ、お前は。お前は弱いんだから人一倍訓練しないとみんなに置いて行かれるぞ。まあ、それは俺もなんだが」

「まあ、そうだな。よし！訓練して強くならないと！」

「そうそう。よし、じゃあ早速行くか」

方針が決まったところで少し教室がざわついていた。

「ん？どうしたんだ？」

「さあ、僕にもさっぱり・・・」

すると、廊下の方から声が聞こえた。

「みんな、第三アリーナで模擬戦やってるってよ！」

ほう、模擬戦ね。でも、このざわつきようは何だ？

「ドイツの代表候補生と鈴とセシリアがやってるみたいだよ」

なる程、ラウラか。だったら、ざわついても仕方ないか。実力が分からないしみんな一目見たいのであろう。・・・でも、何だ？この胸騒ぎは。酷く落ち着かない。

「・・・ねえ、慎二。ちょっと見にいかない？何だか悪い予感がして」

「シャルルもか・・・じゃ、一回行ってみるか。一夏行くぞ」

「分かった」

俺たちは第三アリーナに向かった。

・・・

第三アリーナは人で溢れかえっていた。それほどの人が来ている。席は座るところがない。仕方ないから入口近くの通路で見ることにした。すると、そこには箒がいた。

「箒、この模擬戦どうなっている？」

「ああ………それだが、見たほうが早い」

そう言う箒に従って、アリーナ内を見る。そこには情報通りにラウラたちがいた。

「やっぱりか」

「うん、でも何だか様子がおかしいよ」

言われてみればそうだ。鈴達が攻撃をためらっているように見えた。何故だ？そこで鈴が龍砲を放つ。

「このお!!!」

だが、ラウラが右手をかざすとそこに壁があるように消えてしまった。まさか………

「A I Cだね。アクティブ・イナーシャル・キャンセラー」

「慣性停止能力とも言う。だが、あれは………」

「そうだね、鈴達には相性最悪だね」

そう、シャルル達が言うように相性が悪い。最悪だと言っても過言ではない。A I Cは意識を向けた対象の物の動きを止めるという厄介な能力だ。鈴、セシリアは遠距離をメインに戦う分、その飛び道具に意識を向けてしまえば攻撃は届かない。鈴は接近戦もメインに

できるが基本的に牽制は龍砲を使う。龍砲が効かないと分かれば迂闊には近づけない。もし、考えもなく近づいたらA I Cで動きを止められて肩のレーザーカノンでドカン、だ。これを使うには操縦者の技量も必要だが、難なく使っているように見えるから技量も確かなものだろう。これは強敵だな……

「つく、また攻撃が!!!」

「無駄だ!このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな!」

そういつて、またA I Cを発動させる。この調子じゃ攻撃を与えられていないだろう。その中でラウラはワイヤーブレードを出してそれでセシリアを捕まえる。

「つく!」

セシリアのうめき声が聞こえたが、そのままワイヤーで引っ張り鈴にぶつけた。二人は衝突の衝撃で少しの間動けない。そこに、ラウラが来る。

「つこのお!!!」

鈴は咄嗟に龍砲を放とうとするが、ラウラのレーザーカノンで撃ち落とされる。

「つきゃあ!」

鈴の悲鳴が聞こえたが、セシリアがバズーカのブルーティアーズでラウラに攻撃を仕掛ける。

「な!!!」

これにはさすがのラウラも驚いたらしい。爆発の煙でラウラの姿が見えなくなる。その隙にセシリア達は離脱した。

「つたく、いきなりバズーカなんて危ない真似するわね」

「鈴さんも、あんな狭い空間で空間圧縮兵器を使ったのですからおあいこですわ」

「ふふ、そうね」

「まあ、これで少しはダメージが……」

いきなり煙からワイヤーブレードが出てきた。

「え!!!」

油断していたと言ってもは酷だろう。だが、気持ちが緩んでいたせいで判断が遅れて捕まってしまった。だが、今回ワイヤーブレードで縛ったところは首だ。

「う! 苦しい……」

ISの絶対防御はあくまで武器の攻撃によるものを想定して作られている。だが、直接的に首を占め上げられたりするのは想定外だ。その状態のまま無理に立たされ、殴る、蹴るなどの攻撃を加えていく。所々ISのアーマーが壊れて生身が見えている

「酷い！！あれじゃISの生命維持装置がもたないよ！！！」

シャルルが言っているとうりだ。ISの生命維持装置はある一定のダメージ量を超えると発動する。今は生命自装置が働いているがこのまま続けば命に関わる。

「ラウラ！やめろ！！！」

こういうことが嫌いな一夏がシールドを殴ってラウラを見ている。だが、ラウラから帰ってきた視線は冷酷なものだった。そこで俺の何かが弾けた。……この感覚は二回目だ。

「くっそ！どうすれば！！！」

一夏がまだ騒いでいる。そこに俺は歩き出す。

「慎二………？」

シャルルが何かで怯えたような顔で見ている。筈もそうだ。……ああ、俺は今酷い顔をしているだろう。憎悪。いや、この一言で表すにはとても無理がある。とてつもなく黒い感情が出てくる。

「………一夏、ちょっとどけ」

「慎二！何言ってるんだよ！鈴達が危ないだろ！」

「いいからどけ」

有無を言わさない声で言う和一夏が俺がおかしいことに気づいたらしい。俺はそんなことを気にせずにシールドに近づいた。そして全

力で殴りつける。

ガッシャーーン!!!!!!

殴ったところのシールド一面が粉々になった。

「慎二、血が……」

シャルルがそう言っているがそんなことはどうでもいい。俺はアリナ内に降りて地面を全力で蹴った。すると、一瞬でラウラに近づく。

「なに!!!!!!」

いきなり現れた慎二に驚いたのであろう、瞬時に体勢を立て直そうとする。俺はそこに思い切り蹴り飛ばした。

「っがあ!!!!!!」

うめき声を上げラウラは10メートル近く吹き飛んだ。

（な、何だこいつは!!!!!! 生身の人間の蹴りでシールドエネルギーが100も削られるだ!!!!!!）

俺は、悶えてるラウラに接近する。

（このままでは、こ、殺される!……殺らなければ殺られる!!!!!!）

そこでラウラは近接ブレードをコールし、慎二に切りかかる。が

ガギイン！！！！！

だがそれは、金属音で遮られた。

「まったく、これだからガキの相手は疲れる」

「きよ、教官！！！！」

千冬さんは打鉄の近接ブレードでラウラの近接ブレードを受け止めていた。もちろん、生身でだ。

「お前は何をしている？生身の人間にISの装備を使うなんてな」

「い、いや、これは……………」

「鷹野もいい加減落ち着……………け……………」

千冬は慎二を見て絶句していた。

「……………千冬さん、どいてください。じゃないと、守れないじゃないですか」

（まさかこいつはあの時を……………これでは、まずい）

千冬はとっさに今の慎二の状態があの時と同じと理解し判断した。

「鷹野！落ち着け！！！！今回はあの時と違う！！！！！！！！」

（……………あの時？）……………

会場にいた全員が思ったであろう。あの時とは一体何だと。ラウラ、鈴、セシリアも例外ではない。立ち直ったラウラもしっかりと聞いていた。そして、千冬がドイツがいた時の事を思い出していた。確か、似たような事を言っていたはずだ。だが、詳細までは思い出せない。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・の・・・・・・・・と・・・・・・・・
き・・・・・・・・？・・・・・・・・」

（しまった!!）

千冬は心の中で悪態をついた。普段の慎二なら笑って流すところだが、今は違う。極度に心が不安定な状態になっているせいで普段よりも言葉に敏感になっていた。千冬も慎二の状態を見て早くどうにかしなければならぬ、と焦っていた。それが、仇となった。この状況を理解しているのは一夏、千冬、楯無くらいであろう。今、会場には楯無がいると信じたい。いなければどうしようもない。

「あ・・・・うわあああああああああああああああああああ
あああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「楯無!!!!!!!!!!!!!!!!!!楯無はいるか!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

すると、慎二が破ったシールドから楯無が出てきた。そして、慎二の元に駆け寄り抱きしめていた。会場中は何が起きたか把握しきれないだろう。ただ、普通では無いと理解しているはずだ。が、そんなのに構っている暇は無い。

「違うんだ・・・・・・・・瑠美香・・・・・・・・違うんだ・・・・・・・・」

俺は・・・・・・・・お前を・・・・・・・・」

これは私の考えていたよりも深刻なトラウマね・・・・・・・・つと、
楯無は悪態をついた。

「慎二君、私よ。わかる？」

「た・・・・て・・・・な・・・・し・・・・さ・・・・ん・・・・？」

「そうよ、楯無おねーさんよ。ほら、今は私の胸で落ち着きなさい」

「うう・・・・うああああ・・・・」

楯無が千冬に目配せをした。それに千冬は頷き

「これから学年別トーナメントまで模擬戦の一切を禁止する！！！！
以上、今日は解散！！！！！！」

みんな渋々去っていったが何名か残っていたので

「いつまで残っているつもりだ！！！！解散と言ったはずだぞ！！！！
さっさと戻れ！！！！戻らないと罰を与えるぞ！！！！
！！！！！！！！」

千冬がそう言いみんな立ち去った。

「あの、織斑先生。鈴とセシリアを保健室に運んだほうがいいでしょうか？」

シャルルと箒、一夏が近づいてきて言った。

「・・・そうだな、そうしてやってくれ」

そんな中、一夏は千冬に目配せをしたが千冬は首を横に振った。それを見て、一夏は戻っていった。一夏達の姿がアリーナから消えてから楯無が口を開いた。

「織斑先生、慎二君のトラウマはここまで・・・」

「ああ、ひどい有様だ。もう、直しようがないくらいに、な・・・」

「・・・そうですか」

そんな中、慎二はまだトラウマに犯されていた・・・

「・・・」

場所は変わって保健室。鈴達の手当が終わりみんなが集まった。が、誰も口を開かない。そんななか、シャルルが口を開いた。

「・・・ねえ、慎二大丈夫かな？」

「「「「・・・」」」」

その疑問には誰も答えられない。あの様子を見て慎二が何かとてつもない闇を抱えているのは確かだ。だが、それを調べる術は持っていない。だから、誰も何も言えない。だが、一夏だけは事情を知っている。が、口外にしないと言う約束があるので口を開かない。そ

の時、千冬さんが入ってきた。

「鳳、オルコットは大丈夫そうだな」

「お、織斑先生。慎二さんは？」

セシリアが聞いた。みんな返答を待っているようだった。千冬は口を開く。

「・・・・・・・・時間が経てば問題はない」

全員ほっとしたようだ。そんな中シャルルはさらなる疑問を口にする。

「織斑先生。慎二はどうしてあんなったんですか？」

「あれはトラウマだ」

「一体何が・・・」

「それについては一切何も言えん」

「な、なんでですか？」

「お前らが知ったところでどうこう出来る問題じゃないからだ」

「そ、そんなことはやってみないと」

「お前らは医者ができなかったことが出来るのか？」

「「・・・・・・・・」」

「お前たちは私が何もやっていないと思うか？」

「・・・・・・・・いえ」

「結果は今の状態だ・・・・・・・・早く寮に戻れよ」

そう言って千冬は部屋から出ていった。病室のなかには何とも言えない空気が流れる。

「一体慎二さんには何が・・・・・・・・」

「私たちの知らない所で何かあったのか・・・・・・・・？」

「でも、あれは本当に深い傷だよ・・・・・・・・」

「何よ、少しくらい相談してくれもいいじゃないのよ・・・・・・・・」

思い思いを口にし、みんなは部屋に戻っていった。

「・・・・・・・・」

ここは寮のある一室。そこに、慎二と楯無はいた。未だに慎二は楯無の胸の中でトラウマに犯されている。それを楯無は子供をあやすように優しく頭を撫でていた。楯無は事情を知っている分、慎二の事を分かっているつもりだった。だが、それは甘かった。トラウマは酷いとは思っていたがここまででは予想をしていなかった。

（慎二君は一体こんな心でどうやって生きてきたの？こんなになるような心の傷って一体・・・・・・・・・瑠美香ちゃんも慎二君の心をどれだけ占めていたの・・・・・・・・？少し嫉妬しちゃうわね、ここまです。）

また、慎二が呻き出す。それを楯無は優しく言葉をかけて頭を撫でる。

「大丈夫よ、私がそばにいるからゆっくりおやすみなさい」

すると、安定した寝息が聞こえてきた。

（慎二君を闇から救う、ね・・・・・・・・・一体何を私は言っていたんだろう。闇の大きさを把握しきれず結局救えない。でも、必ず慎二君を救ってみせる）

新たに決心した楯無であった。

俺は、何をしているんだ．．．．．結局迷惑をかける．．．
．．．．．あの時のことを振り切れない．．．
．．．瑠美香．．．俺は．．．
．．．．．

俺は弱いまだ・・・・・・・・（後書き）

PV5万を記念して何か話を作ろうと思うのですが

ネタがありません

なので、感想にてネタを募集したいと思います

みなさんの意見お待ちしております

うまくいかないもんだな、人生ってのは・・・・・・・・・・（前書き）

更新空いてすいません。

話の繋げ方に手こずりました。

うまくいかないもんだな、人生ってのは……………

次の日、慎二は学校を休んだ。仕方ないと言えば仕方ないだろう。昨日のあれは普通ではない。それは会場にいた誰しもが思っていた。そんな中、千冬さんが教室に入ってきた。

「皆、揃っているな。ではSHRを始める」

千冬さんも慎二については触れないらしい。そんな調子で、慎二のいない一日が始まった。

二時間目の休み時間、簪が1組の教室に入ってきた。教室の様子を見て、やっぱりかと言った感じの顔をした。それに、一夏が近寄る。簪も一夏の事を覚えている。

「どうした？ 簪」

「あ、一夏……………やっぱり、慎二は居ないんだね」

「……………ああ、今日は休みだ」

「昨日、アリーナに居なかったから分からないけど……………何があったの？」

「……………それは言えない」

「ど、どうして？」

「言わない約束なんだ」

「そう……お姉ちゃんもどこにいるかわからないし」

「ん？お姉ちゃんって言う生徒会長の？」

「うん……私の自慢のお姉ちゃん。今日、学校休みみたいだけど連絡つかないの……」

「そっか……でも、俺も分からないや。ごめんな」

「ううん、いいの……自分で探してみる」

「ああ、こっちも見かけたら連絡する」

そう言い、簪は教室を出ていった。それを見送り、一夏は教室に戻る。が、いつもの様な賑やかさはない。みんな慎二の事を心配しているのだろう。気にしないように話している女子たちもことなく元気がない。特に静かなのが箒、セシリア、シャルルだ。ラウラは何となくだけどイライラしているように見えた。シャルルの話を聞く限り、慎二は昨日部屋には戻っていないらしい。先生が付いているだろうから心配はないけど、やはり心配らしい。

「みなさうん、二時間目を始めますよ」

元気に教室に入ってきた山田先生だが、反応がなく撃沈していた。彼女なりにクラスを元気づけようとしたのだろう。まあ、失敗したわけだが。まさか、ここまで1組のみんなが慎二絡みで静かになるとは、と一夏は思っていた。まあ、あれを見れば当たり前と言う気

もしなくはないが。事情を知っている一夏としては不安が沢山ある。そんなこととは関係なしに時間は流れていく……………

）・）・）・）・）

次の日の朝、やはり慎二の姿はなかった。もうすぐ、SHRが始まろうとしたとき馴染みのある声が聞こえてきた。

「おはよう、元気してたか？」

「「「し、慎二!？」」「」」

「お、その調子なら問題なさそうだな」

「どこいったのさ、慎二! 一回は連絡頂戴よ。部屋にも戻ってこないで」

「はは、悪いなシャルル」

「もう…………大丈夫なのか？」

「ああ、問題ないぜ」

嘘だ。そこにいたみんながそう思っただろう。誰が見ても無理をしているようにしか見えない。だが、誰もそれ以上は追求はしない。それは千冬さんに止められているからだ。一夏が慎二が休んでいた間に学園から連絡された事を教えようと口を開いた。

「そういえば慎二、学年別トーナメントだが二人一組みに変更になったぞ」

「ん？ ああ、なるほどな」

「で、一夏。お前は誰と組むか決まってるのか？」

「いや、まだなんだよな。簪にでも頼もうかな」

「あいつは強いからいいかもな。っと、俺はどうするか・・・シャルル、お前って決まってる？」

「え？ 僕はまだだけど」

「じゃ、俺と組もうぜ」

「うん、分かった」

「さて、SHRを始めるぞ。さっさと席に付け」

いつの間にか千冬さんが教室に入ってきていたらしい。そうして、一日が始まった。

）．．．．．

放課後、訓練をしようとしたらみんなに止められたから仕方なくシャルルと一緒に自室に戻ってきていた。

「つたく、みんな心配しすぎなんだよ・・・」

「それだけみんなに思われてるって考えようよ」

「まあ、それもそうだな」

そう言いながら俺はベットに横になった。ふく、自分のベットが落ち着くなあ。そこで俺は口を開いた。

「なあ、シャルル」

「何、慎二？」

「その調子なら問題無さそうだけど、女ってバレてないよな？」

「そこは問題ないよ。学年別トーナメントのペアだって心配して組んでくれたんだよね？」

「まあ、そうだが・・・」

「ふふ、ありがとね慎二」

「・・・どういたしまして」

何となく気恥ずかしかった。だが、別にシャルルが女だと隠す必要もない。今はデュノア社はG・W社に買収されたし問題はない。しかし、安心もできない。デュノア社が反撃してくる可能性は十分にある。今はまだシャルルは表面上、デュノア社所属になっている。デュノア社が学年別トーナメントまではこうして欲しいと要望があった。まあ、意味はないだろうがな。学年別トーナメントが終わればシャルルは完全にG・W社の一員になれる。最低限はそこまで女だと言うことは隠しておきたい。

「さ、一日空いたんだからその分のお話しよう？」

「なんでまた・・・」

「一日一人で寂しかったんだよ？」

「分かった。じゃ、話そうか」

その後、夕食までシャルルと話していた。

～・～・～・～・～

その同時刻、箒、セシリア、鈴、簪達は悩んでいた。原因としては慎二である。今朝の様子を見る限り明らかに無理をしていた。彼は他人に心配を掛けるのが嫌がる。特に女子に心配は掛けたくないらしい。理由は分からない。何せ会った時からそうなのだから。その優しさが結果的に甲斐性無しに繋がっているがその考えが変わった。今回の一件でだ。千冬さんが言った『あの時』と関係があるはずだ。簪に至ってはアリーナ内の出来事を見ていないので分からないが、慎二の話を聞いた時の一夏の様子を見てそう思っている。

箒side

箒は自室で悩んでいた。やはり今回の件でだ。

（今朝の慎二の様子・・・明らかに無理をしていた。確実に今回の件が関係しているはずだが・・・千冬さんに話を聞くにしても中途半端な気持ちではいけない。人の大事な過去を聞くのだ。それもトラウマについての・・・私は慎二を助けたい。だが、千冬さんにもできなかったことが私に出来るのか？）

箒が悩んでいる事は同室の鷹月さんに少しばかり迷惑になっていた。自室で本を読んでいるのに険しい顔で悩んでいるのだ。気にするなと言っても無理だろう。その調子で箒はしばらくいた。

箒side end

セシリアside

セシリアはというと、高級ベットで部屋の大半を占めている部屋で箒と同じく悩んでいた。

（慎二さん、やはり今朝は無理をしていましたよね。何か手助けをしたいのですが・・・慎二さんの過去に一体何が・・・）
悩んでいても仕方ないのですが、どうしようもありませんわね。織斑先生に聞くしか手はないようですし。ですが、軽い気持ちで聞いてはいけませんわね。大事なことですものね。・・・
慎二さん、今度はわたくしが助ける番でしてよ）

セシリアはセシリアなりに答えを出していた。今まで慎二に助けられた分その恩返しをする為に頑張ろうと決心したにであった。

セシリアside end

鈴side

鈴は今の外に来ていた。5月の風が彼女を落ち着かせる。そして、思考を開始した。

（慎二、一体どうしたのかしら？この前の模擬戦のあれは普通の人を持っている闇ではありえないくらい大きかった。でも、結果的に

また私は守られてしまった……何よ、人が恩を返す前にまた貸しを作って……やっぱり、千冬さんに聞くしかないよね。言わないと言ったけどここだけは妥協してもらわないと)

だが、苦手な千冬と話すと考えただけでため息が出た。そのため息は、5月の空に消えていった。

鈴 side end

簪 side

簪は放課後整備室に来ていた。打鉄式式の整備をしていた。だが、手が止まってしまい作業が全然進まない。

(慎二、結局今日来たみたいだけどなんだか元気が無かった……
・お姉ちゃんも今日来たから慎二の事聞いたら教えてくれないし
・……やっぱり昨日のあの話は何かあったんだ……
一夏の様子もどこかおかしかったし。それにみんなが言っている『あの時』って一体……)

簪はアリーナ内にいなかった分、みんなから話を聞いて情報を集めていた。慎二の様子を語る話には違いはあったけど、全員の話に共通して出てくることがあった。『織斑先生があの時って言ったらおかしくなった』ここだけは本当にみんな同じことを言っていた。多分、お姉ちゃんは事情を知っているだろうけど、教えてくれないってことは簡単に他人には話していけないことだと直感した。

簪 side end

}\.}\.}\.}\.}\.}\.

ここは慎二とシャルルの部屋。夕食も終わり部屋着に着替えようとしていた。シャルルが女なので俺は洗面所に行こうとしていた。

「ねえ、慎二何で洗面所行くの？」

「何でって、一緒に着替えたら色々まずいだろう？」

「僕は気にしないよ？」

「いや、俺は気にするんだが……」

「……………ダメ？」

「……………はあ、分かったよ」

結局、こういうのには弱いんだよな俺って。

「じゃ、仕切り使おうな。あと、仕切り越しに後ろむいて」

「うん」

俺は洗面所側のベットを使っている。洗面所のドアと向かい合いながら着替えた。部屋を布が擦れる音が支配する。

「……………」

「……………」

「……………やっぱり気持ちいいね。だから言ったんだよ。洗面所行くっ

て。すると、シャルルの方から倒れる音が聞こえる。

「きゃっ！」

こういう時は向いちゃダメだ。絶対に良くないことが起きるに決まっている！俺はドアを見ながら声をかけた。

「大丈夫か？シャルル」

「う、うん。なんとか・・・」

何とか持ち直してくれたらしい。俺たちは着替えを終えた。だが、異様に疲れた・・・そして、何故か眠い・・・何でだ？今日は早くシャワー浴びて寝よう。眠いときは早く寝るに限る。明日からはいつもどおり訓練が始まるしな。

「なあ、シャルル。今日は眠いから早くシャワー浴びて寝るから」

「あ、うん。分かった」

俺はその後、早めにシャワーを浴びて眠りについた。

＼・＼・＼・＼・＼

シャルル side

慎二から寝息が聞こえてきてから、シャルルは慎二のベットに座った。

「もう寝ちゃうなんて、よっぽど疲れてたんだね」

慎二の頭を撫でながら、少し思考に浸る。

（今朝の様子はやっぱり無理をしていたんだね．．．．一昨日の
は一体何があったんだろう？ 織斑先生はトラウマだって言ってたけ
どあれは度が違いすぎる．．．．）

突然慎二が呻き出した。

「．．．．瑠美香．．．．違う．．．．俺は．．．俺は．．．
！」

それを見てシャルルは頭を優しく撫でた。少しすると安定した寝息
が聞こえてきた。

（瑠美香って娘と慎二には何があったの？．．．．全然分か
らない。慎二の様子を見る限り何か酷いことが起きたのは確実だけ
ど．．．．．はあ、ここまで慎二が執着してるってことはその娘
の事．．．．．でも、僕も諦められない。本当に卑怯だよね、
慎二は。あそこまでしてくれたらもう、どうすればいいのさ）

時間も時間なのでシャルルは眠りに就こうとしたが先にあることを
した。そつと、慎二に顔を寄せて額にキスをした。

「．．．．おやすみ、慎二」

シャルルはベットに横になった．．．．．自分がしたこと
今更恥ずかしさを覚えしばらく寝ることができなかったのは余談で
ある．．．．．そして、夜は更けていく。

シャルル side end

（・・・・・）

今日は土曜日、しかも次の月曜日は学年別トーナメントが実施される、最後の週末である。午前の授業が終わり今は放課後となっている。が、今日はみんな都合が悪く訓練できないときた。さすがに、一人での訓練は意味があるようでないからなあ、どうすっかな。そういうえば、今日は鈴が暇だと言っていたような・・・・って、訓練するのに暇なのか？あいつ。まあ、いいか。俺は鈴に電話をかけた。何回かのコール音の後、鈴が電話に出た。

「どうしたの慎二？あんたから電話かけてくるなんて珍しいじゃない」

「それもそうなんだが、電話にでて第一声がそれかよ」

「仕方ないじゃない。本当に珍しかったんだから」

「まあ、それもそうだな・・・・って、違った。鈴、今暇か？」

「昨日暇だって言ったじゃない」

「じゃあ、どこかに出かけないか？お前とゆっくり話したりしてなかったし」

「ほ、本当に！！！！」

「ああ、二時くらいからどうだ？」

「分かった。集合は校門前でいいわよね？」

「それでいいよ」

「じゃ、また後でね」

「じゃあな」

俺は電話を切った。さて、準備もあるし部屋に戻るか。ちなみに今は、寮の部屋に戻ろうかと思って帰路を歩いていたところだ。そういえば、あいつは私服で来るのか？ま、どうでもいいか。

）。）。）。）。）。

現時刻は1時50分。10分前行動は基本だからな。校門に行くともう鈴がいた。

「あれ、随分と早いな」

「あんたが遅いのよ。人には15分前行動が普通とか言ってるのに遅れるってどういうことよ！」

「あれ、そんなこと言ったけ？」

「言ったわよ！まったく、何忘れてんのよ……」

ああ、そういえば言ったな。こいつがあまりにも時間にルーズすぎるからそういったのだ。まあ、15分は早かったかもしれないな。まあ、結果的に時間はきちんと守るようになったわけだが。

「ねえ、慎二。私の格好に何かコメントないの？」

「ん？ああ、似合ってると思うぞ」

「何よ、そのとってつけたようなコメントは」

「そんなこと言われてもなあ、思ったことを言っただけなんだが」

「う……そう？そこまで言うなら許してあげる」

鈴の格好は、ジーンズのショートパンツに上は紺色のパーカーを着ていた。なんとも鈴らしい格好だ。似合ってる以外のコメントが正直思わなかった。っと、もう2時過ぎたな。早くしないと寮の門限に間に合わなくなるな。

「鈴、早くいこうぜ。時間なくなるし」

「ん、そうね。早くいきましよう」

俺たちは歩き始めた。

IS学園のある小島は埋め立てられている。街とは離れてるため、交通のアクセスはモノレールだけである。モノレールを使って駅に行けば、電車、バス、タクシー、地下鉄などの交通網が豊富になる。逆に言えば、駅まででないと何も無いと言うことだ。今は駅ビル『レゾナンス』に来ている。正直言って駅ビルってこんなに凄いものなのかと最初は驚いたものだ。現代のイオンモール並みのかさで、中も服屋、食事場所（和、洋、中）食品類などイオ○モール顔負けである。

「とりあえず、どうする？」

「そうねえ、少し服みたいから付き合って」

「分かった」

俺たちは2階に来た。ここは服のフロアで婦人服、紳士服、メンズファッション、レディスファッションなど全部が揃っている。正直言って、この品揃えはは凄い。他の店が必要ないもの。流石にブランドとかは少ないけどな。

「で、何見るんだ？」

「夏服を見るの」

「ああ、なるほどなあ」

鈴に付いていくと、いかにも夏服がある（ほとんどが夏服）店に来た。若者向けの服が多く、他の学校の生徒の姿も見える。

「ねえ、慎二。これとこっちならどっちがいい？」

いつの間にか鈴は服を見てきたらしい。右手にはオレンジの半袖、鈴に良く似合いそうな服だ。左手には黒とピンクの半袖だった。こちらもちちらで鈴に良く似合いそうだ。

「そうだなあ……オレンジは良く見るし、黒の方かな」

「でも、女の子って感じしすぎじゃない？」

「何言ってんだよ。お前は女だろうが」

「・・・そうだよね！じゃ、買ってくる」

「行ってら〜」

・・・・・・・・一言作者から言わせてもらいたい。リア中氏ね
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

少しすると鈴が戻ってきた。心無しか嬉しそうだ。

「さて、鈴。少しお茶しないか？」

「そうね、買い物も終わったしそうしましょ」

俺たちは食事フロアの5階に向かった。

「で、何でここなんだ？」

一体ここはどこだというと『@クルーズ』と言う店だ。パフェの専門店。でも学生で賑わっている。が、問題なのはパフェの値段だ。一番安いので1500円である。

「別にいいでしょ。自分の分は自分で払うから」

「いいよ、俺が奢るよ。好きな食えよ」

「そう？じゃあ、お言葉に甘えましょうかね」

「その代わりちゃんと食べられる量にしろよ」

「分かってるわよ、そんなこと」

しばらく悩んでいたが鈴だが注文をした。

「チョコバナナパフェとジャンボパフェとイチゴパフェください」

「お飲み物は？」

「私はアイスティーで」

「俺は・・・」

「アイスコーヒーでしょ？」

「・・・ああ」

「かしこまりました」

そういつてウェイトレスは戻っていった。

「なあ、鈴。本当に食べられるんだろうな」

「当たり前でしょ」

「・・・太るぞ」

「う、うるさいわねえ。私は太りにくい体質なの！」

「代わりに一箇所、成長しないけどな」

「いいじゃない、そんなこと!!!」

余談だが鈴はきちんと頼んだパフェを食べきった。しかも、「なんだかもう一つくらなら食べられたかも」何ていいやがった。ある意味化け物なんじゃないのか、あいつは。ちなみに代金は5000円だった。雪月花のテストパイロットの代金としてお金を貰っていたかったらどうなっていたことか。金額としてはサラリーマンの月給ぐらいだ。その代わり、何が起こるかわからないからISは。ってか、この会計普通の高校生にはきついよな。

今は学園島に向かうモノレールの中だ。俺たちは隣同士で座ってる。

「鈴、今日はどうだった？」

「楽しかったわよ、久しぶりに遊べたし」

「そうか、なら良かった。何だか、こっちに来てから元気がなかったからな」

「・・・・・・・・やっぱり気づいてた？」

「そりゃあな」

「・・・・・・・・」

「おじさんとおばさんのことだろ？」

「さすがね、あんたは」

「おじさん達の話をしたとたん表情が暗くなるんだ、分かって当然だろ」

「そんなに顔に出てた？」

「そりゃあ、もう。何があった？相談くらいならのるぞ」

「お父さんとお母さんね……離婚したの」

「……あんなに仲良かったのか？」

「うん、そんな仲の良さなんて関係ないみたいね。簡単に崩れるんだもん」

「もしかして、中国に帰ったのって……」

「そう、もう離婚してたからよ。私はお母さんに引き取られたんだけど何か居心地が悪かった。そんな時、私IS適正が高いことが分かって頑張って訓練して代表候補性になったの。そしたら、あんたがIS学園に入学するって言うからこっちに來たの」

「そんなことがあったのか……」

「……やっぱ、昔みたいにお母さんとお父さんと暮らしたい。暮らしたいよ……」

そう言い、鈴の目から涙が溢れた。俺はそっとそばに抱き寄せる。

「頑張ったな、鈴」

「うん、辛い訓練だって頑張った……もう、私はISに逃げるしかなかった……現実を認めたくなかった」

「うん、分かってるよ」

幸い、周りには人が居なかった。駅に着くまで鈴を抱き寄せていた。人間は難しいな。あんなに仲の良い夫婦だって離婚する。シャルルの時みたいな糞みたいな人間だっている。鈴やシャルル、箒、セシリア、簪、楯無さんの様にやさしい人たちだっている。人間ってのは一生分かり合えないのかな……

寮までの帰り道、鈴は口を開いた。

「何だか……ごめんね」

「気にすんな、困ったときはお互い様だ」

「そうね……ありがとう」

「どういたしまして」

ふと、腕時計に目を落とすと5時50分だった。門限は6時……

「……鈴、急ぐぞ」

「……そうね」

俺たちは走り出した。

結構（いや、かなりか？）ギリギリになってしまったが、寮の門限には間に合った。鈴とは同じ2階だが階段からが逆方向だ。

「じゃあな、鈴」

「慎二もね」

短い会話を交わし俺たちは部屋に戻った。部屋に戻るとシャルルが帰ってきていた。

「あ、慎二。おかえり」

「ただいま、シャルル。手続きは終わったか？」

「うん、あとは学年別トーナメントが終われば問題ないよ」

今日シャルルは、G・W・社に移るための書類の手続きの為G・W・社に行っていた。書類は多いらしいが今日だけで終わってよかった。面倒なことは続かない方がいいし。

「それよりも、慎二。今日はどこに行ってたの？」

「ん？鈴と買い物だが」

「へっ……そうなんだっ……」

あれ、何故か機嫌が………仕方ない、機嫌を直してもらおう。

「シャルル、飯食いにいこうぜ」

俺の経験上どうにかなるはず………

「そうやって直ぐに話逸らす」

「うぐっ……やっぱり怒ってる?」

「ふふ、からかったただだよ。さ、早くご飯食べに行こう?」

「そうだな」

その後は、いつも通りシャルルと話して就寝した。

何だか、シャルルもフラグ立ったよな……。鈴も。はあ、な
んでまた俺なんだか。あの時の俺を見ても好意を寄せてくれている
のか……。でも、思いには答えられない。いつか、ちや
んと言わないとな。それにしても眠い……。寝よう

うまくいかないもんだな、人生ってのは・・・・・・・・・・（後書き）

なかなか、話の時系列がおかしいですが気にしないでください。

そういえば、話のネタまだ募集してますからね。

無い場合は作者が自分で考えますができればみなさんの希望通りに話を作りたいので気軽にお願いします。

俺は最低な男だ・・・・・・・・(前書き)

二十話到達!!!

いやゝ、順調の一言です

これもみなさまのおかげです

ありがとうございます

俺は最低な男だ……

今日は月曜日、学年別トーナメントが開催される日だ。トーナメントの組み合わせは当日発表される。今はシャルルと一夏とで更衣室で組み合わせの発表を待っているところだ。

「はあ、長え。いつになったら発表されんだ。流石に飽きてきたぞ」

「仕方ないよ。少し進行が遅れているみたいだし」

「まあ、そうなんだが……そういえば一夏、お前って誰と組んだんだ？」

「俺か？俺は簪と組んだぞ」

簪ね、あいつは強いから良いパートナーだろう。打鉄式はいろんな状況に対応できるようにできている。今の一夏のレベルなら心強いだろうな。

「あ、組み合わせが発表されたみたいだよ」

やっとか……長かった。なんとって30分も待っていたんだからな。さてと、俺達は誰とかな……

「……え？」

あれ？シャルルが驚いてる。ってことは、強い奴にでも当たったか？俺は更衣室にあるモニターを見た。

「……………最初から運がいい」

俺たちが当たったのはラウラ、箒ペアだ。最初からラウラが潰せるのか……………嬉しい限りだ。

「シャルル、手はず通りに頼むぞ」

「う、うん」

「慎二がんばれよ」

「言われなくても！」

とは言ったものの、俺達の出番はしばらく後だ。初戦がもう少しで始まるから、あと20分位だろう。

「じゃ、慎二。行ってくる」

「ああ、勝てよ」

一夏が初戦で三組の人たちと対戦だ。負けることは無いだろうが、まあ試合は見とくか。

結果は勝利。専用機と量産機とは性能差があるから当たり前だろう。まあ、操縦者の技量があれば話は別だ。だが、一年のこの時期ではそんなに技量に差が付く訳がない。よって結局機体の性能差なのだ。

「おつかれ、一夏」

「おう」

「だけど、もう少しエネルギー減らさないと勝てたんじゃないのか？」

「まあ、そうだな。今回は無駄な動きが多かったからな」

「ほう、自分で無駄な動きをしていたことに気づいたか。関心関心」

「流石に気づくよ。俺のIS操縦技術は酷いからな」

「そこまで気づいてるなら言うことはないな」

「慎二、そろそろ準備したほうが良さそうだよ。試合が終わりそう」

「そうか、なら準備しとくか」

〃・〃・〃・〃・〃

アリーナ内、もう両者揃っている。あとは試合のブザーが鳴れば試合開始だ。にしても、ラウラからの視線が鋭いな。まあ、好意的じゃないのは試合をするにあたって本気を出せるから良いか。

「最初がお前で助かったぞ」

「ん？何がだ？」

「最初から本気でお前を潰せると言いたいんだ」

「それはこっちのセリフだよ」

カウントが始まった。3、2、1、

B

俺は瞬時に漆黒ノ太刀をコールシラウラに投げた。

「ふん、何をするかと思えば！」

ラウラは迷わずA I Cを発動させた。漆黒ノ太刀が空中で止まっている。

か
か
つ
た
な

漆黒ノ太刀はフェイクだ。俺は次にラウラに接近する。そして、コールしておいた菊一文字で切りかかる。

「な！」

これは予想外だったらしく難なくダメージを与えられた。そう、AICの弱点は向けられるひとつの物に意識を向けると他が疎かになる。熟練者にでもなれば何個かの対象物に意識を向けられるかもしれないが、今のラウラの様子を見るとそうではないらしい。俺は落ちた漆黒ノ太刀を拾った。

「さて、ラウラさんよ。覚悟はいいか？」

「く！」

俺は菊一文字をクローズ、そしてバズーカ（ネタ）をコール。

「シャルル！」

「分かった！」

シャルルが防御体勢をとる。ラウラと箒は意味が分からないさそうだが、こちらにとっては好都合だ。俺はバズーカを発射する、アーナ中央に。誰もが失敗したと思ったみたいだがそれは違う。バズーカはある距離を行くと割れて突然中から何かが出てきた。その正体は………100口径の銃弾だ。それがアーリーナ全方位に発射される。それは俺にも飛んでくるのでそれを漆黒ノ太刀で切り捨てる。

「なに！！！！」

「な！！！！」

箒とラウラは驚いたらしい。箒は俺と同じように切り捨てていた。ラウラはAICを発動させた。こうもうまくいくと笑いが止まらない。

『疾風迅雷発動』

俺はここで勝負にでる。長引かせていいことは一つもない。疾風迅雷によって加速されたISで漆黒ノ太刀を腰に構えラウラに切りかかる。

「鷹野流剣技、降りしきる千雨^{ちゆめ}」

俺はラウラとすれ違った。

「っふ、何の攻撃も無しか」

「そいつはどうか」

「なにを言っている……何!? シールドエネルギーが!？」

降りしきる千雨は居合切りの要領で相手に接近する。そして、相手が近づいたらそこで瞬間加速を使いさらに加速する。そこで、ISを装着していても必ずある、生身の所を狙う。絶対防御とまではいかないが、普通に攻撃するよりはダメージが大きい。今回は二の腕、太ももを計3回切った。多分、180位は削れたはずだ。そこでシャルルが現れる。

「こっちは終わったよ」

「さすが、早いな」

シャルルととっていた作戦は俺がラウラを相手し、シャルルが他の相手すると言う勝手な作戦だ。それでも、シャルルは文句の一つも言わなかった。

「じゃあ、僕は待機してるよ」

これも俺な勝手に言ったことだ。ラウラとは一対一で戦う。だが、危険な状態になったら助けてくれる。ほんと、最高のパートナーだよ、シャルルは。ラウラのシールドエネルギーは残り半分といったことだろう。さっさと勝負を決めてしまおう。

「さて、終わりにしようや。ラウラさん」

「なめるなあ！！！」

そう言って、肩のレーザーカノンを発射する。成功してない方法で攻撃するなんて、大分動揺してるな。俺はレーザーカノンから発射された弾を一刀両断する。そして、菊一文字をコールし、切りかかる。

「鷹野流剣技、乱れ桜」

乱れ桜でさらにシールドエネルギーを削る。これで、残りは僅かだ。が、ラウラの様子がおかしい。

くくくくくくくく

（私はこんなところで負けるのか・・・？）

慎二の攻撃を受けラウラのシールドエネルギーは100を切っていた。

（私は負けられない・・・負けるわけにはいかない）

私は遺伝子組み換えによって鉄の子宮から生まれた。私の存在意義は戦うこと。それ以外何もない。起きては訓練、起きては訓練。そんな日々を過ごしていた。そして、私はエリートになった。ISはそんな私を崩した。一気に出来損ないになった。皆から蔑まれ侮蔑などの目で見られた。そんなある日私の前にあの人が現れた。織斑千冬だ。

「ここ最近調子が振るえないそうだな。なに、心配するな。私が教えれば一ヶ月で使い物になるようになる」

教官に教えてもらおうようになってからはメキメキと上達した。今まで蔑んできた奴らも直ぐに抜かした。そして、私はまたトップになった。あいつらの驚いた顔が面白かった。教官が来て1年が経とうといていた。もうすぐ、教官は日本に帰る。

「教官、ずっとドイツにいてくれませんか？」

「それは出来ないな。日本には弟がいる。流石にこれ以上心配はかけられん。それに、あいつもいるしな」

「あいつとは？」

「ああ、弟の幼馴染でもう家族の一員みたいな奴だ。だが、去年にあいつは壊れた」

「一体何が？」

「それについては言えない。だが、これだけは言える。私は逃げてきたんだ」

「……」

「あいつを見ていられなくて、逃げてきたんだ」

「それは違うのでは」

「いいや、違わないさ。あいつの顔を見ていられなかった……」

私はそいつがどのようなやつか気になった。教官の力を持っても助けられなかった奴が。だが、反面苛立っていた。教官は強い。なのにこのような弱い顔をさせるやつが気に入らなかった。その、弟もだ。力が欲しい……すべてを変えられるほどの……

『——願うか……？ 汝自らの変革を求めるか……？ より強い力を欲するか……？』

力を……全てを変革できる力を……私によこせ!!!

Damage Level D.
Mind Condition Uplift.
Certification Clear.

《Valkyrie Trace System》
. . boot.

（.）

「あああああああああ!!!!!!」

突如、ラウラが悲鳴をあげた。そして、ラウラのISの形状が変わっていく。

「なんだあ？」

ISは粘土のように動き、ラウラを包んでいく。そして、完全に形状が変わった……あの、姿は……千冬さんか？

周りのシールドのシャッターが降りていく。教師陣が動いたのだろう。もうすぐ、教師がきてこの場を収めてくれる。だが、そんなことはどうでもいいのに、あいつを助きたい俺がいる。何が何だか自分でも分からない。俺はラウラに歩き出す。

「し、慎二!!!!どこ行くの!?!」

「どこって……ラウラのところだよ」

「危ないよ!そんなことしなくても先生達が……」

「そんなことは分かってるよ」

「じゃあ何で」

「俺にもよくわからない。でも、あいつは助けを求めている。それだけは確かだ。それを助けるのに理由があるか?」

「……もう、慎二は真っ直ぐだなあ」

「真っ直ぐが一番だろ?」

「そうだね……分かったよ、慎二。行ってらっしゃい」

「おう、行ってくる」

「でも、危なくなったら助けるからね?」

「分かった」

俺はラウラに歩き出す。そして、前に立ち話しかける。

「なあ、ラウラ。そんなことをして千冬さんが喜ぶと思うか？」

「・・・・・・・・・・」

「俺はな、千冬さんがそんなことに力を使うために教えたんじゃないと思うんだ」

「・・・・・・・・・・」

「だからさ、そんなことやめて終わろうぜ？」

「・・・・・・・・・・ケテ」

「ん？」

「・・・・・・・・タスケテ」

「・・・・・・・・」

「クルシイ・・・・・・・・タスケテ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・分かったよ、今助ける」

俺は更にラウラに近づく。ラウラを包んでいる黒いゲルみたいなやつからラウラを切り離せばなんとかなるはず。けどなあ、厄介なのがこいつが千冬さんと同じ動きをすることなんだよな。まあ、だつたら癖とかも同じだからよけやすいか・・・

さらに歩を進めると、射程圏内に入ったのか、黒いISは袈裟斬りをした。それも、千冬さんと同じ袈裟斬りを。速さ、鋭さ、太刀筋全てが千冬さんと同じ。だが、それだったら簡単によけられる。俺は右に体を捻り、最小限の動きで回避する。そして、菊一文字を下から振り上げる。切ったのは黒いISの表面。ゲルのような物が割れて中からラウラが出てくる。酷く安堵したような顔は、ひ弱な子犬を連想させた。俺はISを解除して、ラウラを受け止めた。酷く小さく、とても細かった。こんな体でよくも頑張ってこれたな。

くくくくくくくくくく

『なあ、ラウラ。俺はな、お前が強いと思う』

それはどういう意味だ？

『うーん、うまく言葉にできないけどやっぱり、信念を持っていることかな』

信念・・・・・・・・

『俺は、結局のところ信念を持っている奴が一番強いと思う』

何故、そこまでお前は強い？

『俺は強くないよ。大切な人を守れなかった。弱い人間だよ』

大切な・・・・人・・・・・・・・

『そう、守れなくて一心不乱に修行して二度と同じことを起こさないようにした』

今は守れているのか……？

『ああ、今まで守れてきた。だけど、守れているうちに、なんであの時は……って思うんだよ』

お前は一体どれほど……

『つと、お前にこんなことを話しても意味ないか』

……もうひとつ、聞いていいか？

『何だ？』

どうやって今まで生きてきた？辛いことがあって、心が壊れたのだろうか？

『ああ、それも知ってるのか。そうだな……やっぱりみんなの力が大きいかな』

みんな？

『ああ、一夏、鈴、千冬さん……他にも色んな人たちのおかげでここまでこれた』

教官も？

『ああ、あの人には助けってもらってばかりだな。最近もお世話になりっぱなしだ』

他人というのはそんなに大切か？

『大切だよ。人間は一人では生きていけない。そのためには他人の助けが必要なんだ。だから、ラウラ。お前も誰かを頼れ。いきなり出来るかは分からないけど、その時は俺を頼れ。そうすれば助けてやるよ』

ああ、そうか。これが鷹野慎二か。とても強いのに、酷く弱い。そんな彼を私は知りたい。そばにいて確かめたい……

くくくくくくくくくく

「……………ここは？」

目が覚めると白い天井が見えた。

「ここは保健室だ」

「…………教官」

「織斑先生だ。どうだ、体の調子は？」

ラウラは体を起こす。

「……………少し重いです」

「まあ、そうだろうな。この話は体の調子が戻ってからにしよう」

「…………教官、鷹野慎二という男は強いですね」

「ああ、あいつはとても強い。だが、反面とても弱い」

「・・・・・・・・はい」

「それよりも、お前が他人に興味を持つなんてな・・・・・・・・もしかして、惚れたか？」

「な・・・・・・・・そんなわけ・・・・・・・・」

「ははは、そうかそうか。お前も慎二に」

「お前もと言うことは・・・・・・・・」

「ああ、私もだ」

「何故彼を？」

「・・・・・・・・そうだな、それは私も分からない。ただ、あいつに惹かれてた。それだけだ」

「そういうものでしょうか？」

「恋とはそんなものだ。お前だってそうだろう？」

「・・・・・・・・はい」

「今日はゆっくり休めよ、ラウラ」

「分かりました」

そう言って、千冬さんは保健室を後にした。一人になり、ラウラは横になった。

「・・・鷹野・・・・慎二・・・」

名前を呼ぶだけでも体中が何かに満たされる。ああ、そうか・・・・
・・・これが恋か・・・・

）・）・）・）・）

俺とシャルル、一夏は食堂に来ていた。学年別トーナメント騒動の事情聴取が終わり、夕飯を食べていた。俺は、仙台味噌ラーメン、シャルルは明太子の醤油ベースパスタ、一夏は焼き魚定食を食べていた。うーん、仙台味噌はすこし辛めだが、またその辛さがいい味を出している。辛さがでないと味噌の良いところを引き出せないってのが面白いな。半分を食べ終えたところで休憩すると、周りから視線を感じる。三人組みの女子がいるな。どうしたんだ？

「優勝がなくなっちゃったってことは・・・」

「交際が・・・なくなった・・・」

「せっかくのチャンスが・・・」

「「「うわああああああん！！！！」」」

そう言い、走り出した。ああ、そうか。学年別トーナメントで優勝すれば俺と付き合えるって噂が流れてたな、そういえば。確か、箒にも言われたな・・・・食堂に箒がいなかったと探したら簡単に見つかった。何だか、戸惑いの目だな。まあ、勇気出していったんだから、当たり前か・・・・でも、その思いには答えられないしな・・・・はあ、どうしたもんか。俺は箒に向かって歩

きだした。

「慎二・・・・・・・・」

「箒、あの話だが・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・明日の放課後、返事をする」

「そ、そうか・・・・・・・・」

箒も俺の声のトーンから何かを感じ取ってくれたみたいだ。嬉しい顔をしていないことを見ると浮かれていないらしい。それでいい。結局、いい返事はできないのだから。

「で、ではな」

「ああ、おやすみ」

箒は部屋に戻っていった。すると、シャルルが近寄ってきた。

「ねえ、何の話してたの？」

「いや、何でもないよ」

「でも、箒の様子じゃ・・・・・・・・」

「あ、やっと見つけました」

話の途中で割って入ってきたのは、山田先生だった。

「どうしたんですか？」

「朗報ですよ。なんと！今日から男子の大浴場開放です！」

「お、本当ですか？」

「はい、今日の事件を頑張ってくれたのでゆっくり疲れをとってくださいね」

「ありがとうございます」

山田先生は食堂から出ていった。あ、そういえばまだご飯が途中だった。早く食べないと。そう思い、俺は席に戻り残りのご飯を食べた。

「なあ、さっき山田先生なんて言ってたんだ？」

「そふえわな、だいよくひょうがつはえるんでやって」

「いや、何言ってるのか全くわからないんだが……」

「慎二の代わりに僕が説明するね。今日から男子の大浴場が開放されるんだって」

「お、ホントか！よし、今から行こう。慎二たちはどうする？」

ごっくん

「ふう、俺はお腹が落ち着いたら行くわ」

「僕も、もう少し休憩してからいくよ」

「そうか。じゃ、行ってくるな」

一夏は凄い勢いで食堂を出ていった。ふむ、難なく問題クリアか。楽勝だったな。

「シャルル、うまく隠せたな」

「え？何の事？」

「何のことって……お前、女だろ」

「あ！そうだったね、一夏と入れないか。ははは」

「お前忘れてたのかよ。忘れちゃダメだろ」

「慎二が忘れないから問題ないでしょ？」

「まあ、そうなんだが……そいや、シャルルは風呂入るか？」

「そうだね、お風呂には興味あるしなあ」

「だったら、しばらくしたら行けよ」

「慎二はどうするの？」

「俺はいいよ。シャルルがゆっくり入れ。外で待ってるから」

「そんな、悪いよ」

「気にすんなって。ほら、部屋戻ろうぜ」

「う、うん」

俺達は食器を片付けて部屋に戻った。

今は、大浴場のドアの前。一夏が風呂に行ってから、40分が経った。あいつは長風呂だけど、40分経てば上がる。まずは、俺が入って中の状況を確認する。よし、誰もいない。

「シャルル、入ってもいいぞ」

「分かった」

シャルルが中に入ってきた。さてと・・・・・・・・外に出ますか。

「慎二はやっぱり入らないの？」

「シャルルが入りたいなら俺はいいよ」

「でも、今日は慎二が頑張ったんだから慎二が入ってよ。僕はいから」

「そうか？だったらお言葉に甘えようかな」

俺はさっさと服を脱いでタオルを持ち、大浴場に向かった。扉を開けると・・・・・・・・広い空間が。うん、ほんとにでかい。これ、俺一人が使っているのか？ま、いいか。俺はお湯を体にかけて、湯船に浸かった。

「ふう、気持ちいい〜〜〜〜」

さすが、久しぶりの風呂は気持ちいい。だんだん、眠くなってきた。

「お、おじゃまします」

うん？何故かシャルルの声が聞こえた気が・・・・・・・・寝ぼけてるんだな、俺。

「慎二、湯加減はどう？」

「おう、ちょうどいいぜ」

ん？会話が成り立ってないか。俺は振り返ると、シャルルの姿を見つけた。

「ちょ！シャルル、何やってんの！！！」

「だって、慎二が入りたいなら入っていったでしょ？」

「それは意味が違う！！！」

俺はとっさに後ろを向き、真ん中の方に移動した。

「よいしょ、と」

シャルルが湯船に入る音が聞こえた。あいつ、本当に入ってきてやがった……。でも、後ろ向かなければ問題ないか。うん、そうだな。

「ねえ、慎二」

「ん？何だ？」

「ありがとね」

「いや、何に対してのお礼なんだかわからないんだが……」

「今までやってくれたこと全部だよ」

「気にすんなって。どうせただのお節介だよ」

「それでもだよ。そのお節介のおかげで僕は救われたんだよ」

「そうか、だったら良かった」

しばらく沈黙が続く。だが、前みたいな気まずさはない。どちらかと言えば心地いいくらいだ。

「ねえ、慎二」

「何だ、シャルル」

「僕のことシャルロットって呼んでくれる？」

「いいけど、その名前は？」

「僕の本当の名前。お母さんが付けてくれた本当の名前」

「分かったよ」

「……………ねえ、今呼んでくれない？」

「どうした、シャルロット？」

「……………／／／／／．．．ぼ、僕先に上がるね！」

そう言っつてシャルロットは大浴場を出ていった。俺も、しばらくしたら出よう。流石にのぼせそうだ……………気のせいだ
と思いたかったけど、シャルロットも好意を寄せてくれているよな……………はあ、何でこうなるんだか……………

しばらくして俺は、大浴場を後にした。

……………

次の日の朝、教室に衝撃が走った。またかと思うけど、衝撃が走ったんだから仕方ない。まあ、結果を言ってしまうとシャルルが女の格好でSHRで呼ばれたからだ。

「シャルロット・デュノアです。みなさん、よろしくお願いします」

「え？デュアノア君はデュノアさんだったってこと？」

「同室の鷹野君は知ってたの？」

「そういえば、昨日男子の大浴場開放日だよ」

よな・・・・・・・・

「あ、あああああ、あんたいきなり何してんのよ!!!!」

そう言っつて、俺に突っ込んできた。あれ？俺なの？俺って被害者じやね？そんなことよりも、ここは逃げないと・・・・・・・・俺は、教室の後ろのドアから逃げようと思ったらレーザーが前をかすった。

「し、しししし、慎二さんどちらへ？お話があるんですけど」

ああ、笑顔が引きつっている。これはオワタ。しかも、箒も日本刀持ってるし・・・・・・・・って、教室に持って来てるの？あれ・・・・・・・・シャルルの笑顔も怖いし・・・・・・・・さて、どうしましょうか・・・・・・・・仕方ない、もうちよつとちゃんとした時に言いたかったけど今言わないと死にそうだし言っとくか。

「箒、セシリア、鈴、シャルル、ラウラ。放課後、話がある。俺の部屋に来てくれ」

俺の真剣な表情を感じ取ってくれたのだろう。みんな静まってくれた・・・・・・・・簪にも言わないとな・・・・・・・・

「なあ、鈴。放課後來るとき、4組の更識簪を連れてきてくれないか？」

「え？ええ、いいわよ」

これで、良いか・・・・・・・・・・はあ、やっぱり言うのは心苦しい。でも、いつかは言わないといけないんだ。それが今だ。俺達は席に着き、一日が始まった。

・ ・ ・ ・ ・

今は放課後、箒たちを連れて俺の部屋に来了。ちなみに、昨日の夜シャルルは荷物をまとめていたから部屋を移った。部屋の前に来たから、ドアを開けて入った。

「とりあえず、適当なところに座ってくれ」

箒、シャルル、鈴、簪はベットに、セシリア、ラウラは椅子に座った。さて、落ち着いたことだし話を始めるか。

「最初に聞いておきたい。俺の勘違いならいいんだが・ ・ ・ ・ ・みんなは俺に好意を寄せてくれてるよな？」

みんなが息を飲んだのが分かった。勘違いじゃないか・ ・ ・ ・ ・勘違いであって欲しかった・ ・ ・ ・ ・でも、それじゃダメだ。

「好意を寄せてくれてるのは凄く嬉しい。みんな、優しいし良い娘ばかりだ」

みんなの表情が和らぐ。それはそうだろう、好きな異性に嬉しいと言われたのだから。

「でも、俺はみんなの思いには答えられない」

「ど、どうして？」

シャルロットが不安な声で聞いてくる。

「それは・・・・・・・・俺には人を愛する資格が無いからだ」

「それって、あの時と関係あるの？」

鈴も不安な声で聞いてきた。

「関係ある・・・・・・・・あの時、俺は・・・・・・・・・・生きている資格がなくなっただ」

「・・・・・・・・・・」

「でも、みんなおかげで生きてこれた。だけど、人を愛する資格なんて俺にはない。だから、諦めてくれ」

俺は返事を待たず、部屋を飛び出した。途中、俺を呼ぶ声が聞こえたが気にしない。気にしたらいけない。俺は廊下に出て外に向かった。

外の風が気持ちいい。近くにあったベンチに座った。

「これで・・・・・・・・よかったんだ・・・・・・・・・・あんな良い娘達には俺なんかより相応しい男がいるはずだ。だから・・・・・・・・・・これでよかったんだ」

でも、心に傷を負わせてしまったことには変わらない。でも、俺のことを忘れてもらうにはこうやって嫌われたほうが早い。・・・・・・・・俺みたいな

犯罪者は嫌われて当然だ

俺は最低な男だ・・・・・・・・（後書き）

今回のお話、いかがでしたか？

俺は酷いと思っています

なので苦情などありましたら感想にてお願いします

久しぶりの休日がこれか・・・・・・・・・・
(前書き)

またもや、話を繋げるのに手こずりました。

こんなんでやってけるのかなあ・・・・・・・・

久しぶりの休日がこれか・・・・・・・・

俺が彼女達に思いを伝えてから2週間が経った。その間、俺は彼女たちと話をしていない。時々話しかけようとしてくるが、俺が逃げている。同じクラスにいるから忘れることなんてできないだろうができる限り俺は彼女たちの心を支配しないようにしてきた。今は放課後、一人になった寮の自室で横になっていた。最近、訓練もしていない。彼女たちと会うからだ。

「そういえば来週、臨海学校か・・・・・・・・と、言っても俺は海で泳がないか」

海でなんか泳いだ日にはみんなと鉢合わせになってしまう。それだけは避けたい。今日は金曜日、明日と明後日は臨海学校前の最後の休日か・・・・・・・・みんな、水着買いに行くんだろうな・・・・・・・・って、俺があいつらに心配してたら振った意味ないか・・・・・・・・なんだかんだで俺は彼女達に惹かれているのかもしれない。あんな良い娘達に好かれればそうなるのも当然だと思う。

「はぁ・・・・・・・・寝るか」

俺はベットに横になり目を閉じた。しばらく寝付けないだろうが問題ないだろう。

・・・・・・・・

日曜日、俺は朝ごはんを適当に済まし部屋でゴロゴロしていた。

コンコン

「慎二くんいる？いるわよね、入るわよ」

「それってノックとか声かける意味あるんですか？楯無さん」

「最低限のマナーでしょ？やらないとダメよ」

「だからそれじゃ意味がないんですよ」

「そういえば慎二君、水着買ったの？」

「話いきなり変わりましたね……………買ってませんよ、どうせ泳ぎませんし」

「えー、何それつまんなーい」

「楯無さんには関係ないじゃないですか」

「え？私も行くわよ、臨海学校」

「臨海学校は一年の行事でしょう」

「生徒会長権限」

「……………いいんですか？そんなのに使って」

「いいのよ、どうせ使いどころ少ないし」

「……………そうですか」

何してんだよ、この人は。生徒会長でいいのか？って、そいやこの学校の生徒会長は『最強』だったら誰でもいいのか。

「さてと、買い物に行くわよ。慎二君」

「何ですか？」

「もちろん、私の水着買いに。ついでに慎二君のもね」

「俺はついですか………分かりましたよ、どうせ暇ですし」

「じゃ、行くわよ」

俺は楯無さんに手を引かれながら部屋を後にした。

くくくくくくくくくく

現在駅ビルのレゾナンスに来ている。まあ、当たり前って言ったらそうなんだけどね。とりあえず、まずいことは、今日はIS学園の生徒が多いことだ。これも当たり前なんだけどね。みんなと会わなければいいけど。

「………はあ」

「お姉さんと一緒にいるのにため息なんてどうゆうこと？」

「それは、楯無さんが勝手に連れてきたんでしょうが」

「でも、最後は慎二君だって同意したでしょ？」

「・・・・・・・・・・そうですね」

この人と話すと調子が狂う。でも、何故かそれが悪い気がしないんだよなあ。不思議だ。

「さうと、慎二君ちょっと付いてきて頂戴」

「はいはい」

ただいま、レゾナンス3階の季節物のフロアに来た。今の季節は水着がメインだな。でも、一つおかしい。8・2くらいで女子の方が多い。いくら女性優遇社会だからと言ってもこれはどうかと思う。

「ねえ、慎二君。こっちとこれどっちがいいと思う？」

楯無さんが右手に持っているのが、青をメインとしたビキニタイプの水着だ。左手に持っているのが何故かスクール水着・・・・・・・・・・
・しかも、楯無って名前まで書いてある・・・・・・・・・・

「楯無さん、左手に持っているのは・・・・？」

「これは私の水着」

「何でそんなの持ってるんですか！」

「ただ持ってきたんだけど」

「持ってくる必要が無いでしょうが！ってか、一体今までどこに持ってたんですか！！そもそも、何故にスクール水着をチョイスした

「!!!!」

「慎二君が喜ぶと思って」

「いや、確かにスクール水着はいいけど・・・・・・・・って、違う！
！！俺は変態ではないですからね!!!!!!」

「ふふ、慎二君はこうでなくちゃね」

「何がですか・・・・・・・・ってか、疲れた」

「だって、元気なかったじゃない？私が何言っても突っ込こんでくれないし」

「楯無さん・・・・・・・・って、俺の元気の判断ってツツコミですか!?!」

「え？違うの？」

「そんなの理不尽だー！！！！」

「っは。周りの視線が!!!!やばい、何俺は女性用水着売り場で叫んでんだ。こりゃ不審者として通報されてもおかしくないな。楯無さんは何故か微笑んでこっち見てるし・・・・・・・・..はぁ、変な気使わせちゃったかな。確かにあれからはあんまり元気なかった。これじゃダメだって思っても気持ちちは沈むし・・・・・・・・..でも、もう心配はさせられないな。」

「心配させてすいませんでした、楯無さん」

「何のこと言ってるのかな、慎二君？」

はあ、全くこの人には頭が上がらない。心配かけてばかりだ。これからは俺が頑張らないと。

「で、慎二君どっちの水着が良い？」

「せめてスクール水着は候補から外して！！！」

久しぶりに元気が出た日曜の昼だった。

くくくくくくくくくくくく

「ふく、いい買い物したく」

「そうですねー」

「なんでそんな返事なのかなく？」

「いや、だって・・・・・・・・」

あのあとだって、結局同じようなことを何回もやって、正直疲れた。結局、俺も水着も買ったんだけどな。って、もうお昼か。出てきた時間も微妙だったし仕方ないか。

「楯無さん、お昼どうします？俺が奢りますけど」

「あら、どうして？」

「こうやって、久しぶりに出かけられましたし。何より、元気が出

ました。なので、お礼もかねて奢らせてください」

「だったらお言葉に甘えちゃうわよ？」

「ええ、いいですよ」

「じゃ、行ってみたいところあったからそこに行きましょ」

「分かりました」

俺達は6階に向かった。

レゾナンスの5階は食事処になっているが、実は6階もそうになっている。まあ、案内を見れば分かるんだけどな。で、6階は少しお値段高めのレストランとなっている。正直、学生のお財布にはやさしくない。鬼畜と言ってもいいんじゃないかな。なんたってこのフロアは、最低1800円だからな。その分、味と質は上がる。上がらないと困るけどな。俺達はその『マルシェ』と言うイタリアンレストランに入った。雰囲気落ち着いていて、客層も年配の方が多い。景色も良く、夜なんかになれば絶景だろう。

「いいところですね」

「でしょう？ 私も来たかったんだけどねお金が無くて」

「いや、仮にもあなた国家代表じゃないですか」

「あら？ ばれてた？」

「そりゃあ分かりますよ」

そこまで話していると、ウェイターの人が来た。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「ランチコースを2つください」

「お飲み物はいかがにしますか？」

「私はアイスティーを、彼にアイスコーヒーを」

「いつお持ちいたしましょうか？」

「食事と一緒に」

「かしこまりました」

ウェイターの人は去っていった。

「さっきの話の続きだけど・・・ホントはね、初めて来るときは好きな人と来たかったの」

「それはロマンチックですね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん？初めては好きな人って、もしかして・・・・・・・・」

「楯無さん、ここに来るのは初めてですよね？」

「ええ、そうよ」

「まさかとは思いますが、もしかして俺のこと・・・・・・・・・・」

「ええ、大好きよ。前にも言ったと思うけど？」

「・・・・・・・・そういうばそうですね。でも、その思いには・・・・」

「分かってるわよ、そんなこと。最近元気がなかったのだって、あの子達にそう言ったからでしょう？」

「・・・・・・・・全部お見通しですか」

「それは、好きな人だからじゃないの？」

楯無さんは頬を赤らめながら微笑んでそう言った。この人は本当に俺のことを・・・・

「私は慎二君の事情を知ってるし、何で思いに応えないのも分かっている」

「じゃあなんで・・・・」

「それは、そんなの関係無しに慎二君の事が好きなのよ。あなたが過去に何をしたらって関係ない。今のあなたが好きなのよ」

「楯無さん・・・・・・・・」

正直、ここまで思ってくれるなんて凄く嬉しい。俺の過去を知って

もなお、好きでいてくれることに。涙がこぼれそうだ。

「絶対に慎二君を振り向かせて見せるわよ」

「・・・・・・・・・・」

本当に何でこんなにいる人が俺の事を好きになったんだろう。絶対にもっと相応しい人が居るはずなのに。もっと優しく、かっこよくて、何でも出来る人が。

「楯無さん、俺は・・・・・・・・・・」

「お待たせいたしました。ランチコースのサラダとスープです」

・・・・・・・・・・空気読めようウェイター。いや、ある意味空気読んだのか？・・・・・・・・・・もうどっちでもいいか。

「さて、食べましょう」

そう言って、楯無さんは幸せそうに食べる。こんな状況では言い出せないな。今は幸せな時間を満喫しよう。

・・・・・・・・・・

「ふー、今日は楽しかったわね」

ただ今、学園島に行くモノレールの中だ。さすがにもう夕日が差し込んできている。お昼を食べてからもゲーセンとか色々行ったからなあ。今日は疲れた。・・・・・・・・でも、ある意味気分転換が出来たしなあ。楯無さんには感謝しないと。

「楯無さん、今日はありがとうございました」

「いきなりどうしたの？」

「いえ、今日のおかげで吹っ切れました」

「そう、なら良かった」

「それで、お昼の時の返事は……」

「言わなくていいわよ」

「……え？」

「だって、慎二君を振り向かせないと答えは変わらないんでしょ？」

「……はい」

「だったら、その時まで私は頑張るわ」

「……わかりました」

何となくだが、心の重荷が取れた気がする。やっぱり、楯無さんには敵わないな……

〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

「ふう、今日は疲れたな……」

部屋に戻ってきたが、今まで出かけると箒かシャルロットが出迎えてくれたから誰もいないと寂しいな……

「なんだかんだで、やっぱりみんなに頼ってたんだな……」

自分から拒絶しておいて、結局俺は頼ってるんだな……何してんだか。

「あ、そういえば水着買ったんだっけ」

楯無さんが付いてくるといったから無理に買わされたんだった。てか、水着って高くない？数回しか着ない割には二千〜三千円するし。高いやつだったらもつとするし。何であんな高いんだろ。おかげで、財布の中が少し寂しくなってきたよ。お昼だって高かったし。あ、ちなみに、一万円したよ、あそこ。

思い返してみると、みんなと話していて俺は瑠美香に重ねていたのかもしれない。寂しい顔を見ると放っておけない、普段から悲しませないように優しくする。そのせいでみんなに好かれたのかもしれない。思いにも答えられないのに。本当に俺は最低だ。瑠美香とみんなは関係ないのに。未だに振り切れないせいでみんなを傷つけてしまった。

はあ、ホント何やってんだろ……。でも、明日からは頑張らないと。みんなに元気の無い姿見せて心配させたら意味がないし。とりあえず、夕飯まで時間あるし少し寝よう……。少し疲れた……。

「ん・・・・・・・・？今何時だ・・・・・・・・？」

時計に目をやると7時半になっていた。大体6時半に寝たから。1時間寝たのか。夕飯食べに行くか……。体を起こそうとすると、体が重くて動かせない。そんなに疲れてたのか？俺。目を動かして状況を確認すると、
髪の毛が見えた。少し青っぽい。・・・・・・・・まさかとは思うけど・・・・・・・・楯無さん？

「ん・・・・・・・・んう・・あれ？慎二君起きたの」

「何故、ここに」

「慎二君に会いに来ただけど寝てたから一緒に寝てたの」

「いや、何でそうなるんですか。それと、どいてください。動けませんから」

「あ、それは遠まわしにお姉さんが重いって言いたいよね」

「別にそういう意味ではないんですけど・・・・・・・・お腹減ったんで早くご飯食べたいんですよ」

「そういうことね、分かったわ」

そう言い、楯無さんはどいてくれた。やっと起きられる。そう思い、体を起こしベットから起きようとするが足にうまく力が入らずバランスを崩して壁に寄りかかってしまった。

「あれ？・・・足がうまく動かない・・・・・・というか、フラフラする」

「大丈夫！？ 慎二君！」

「ええ、まあ、大丈夫ですよ」

「嘘言わないの。ほら、一回ベットに座って」

ベットに座らせられるが、頭がフラフラするせいで落ち着かない。つてか、こりゃ熱だな。楯無さんは額に手を置いた。

「うーん、熱ね。多分、疲れが出たんじゃないの？」

「多分そうですね」

「ほら、寝なさい。お姉さんがご飯貰ってきてあげるから」

「すみません、迷惑かけて」

「いいのよ。じゃあ、しっかり寝てないさいよ」

楯無さんは部屋を出て行った。今回の熱は気疲れだな。精神的に疲れてたから、それが体に来たんだろう。昼間の買い物で楽にはなっただけ、その分疲れが出てきたみたいだ。というか、熱が出るほど疲れたんだな、俺。気付かなかったなあ。でも、疲れってそんなも

んか。うゝん、頭がうまく回らないから考えがうまくまとまらないや。って、また眠気が・・・・・・・・楯無さんには悪いけど、少し眠ろう・・・・・・・・

「・・・・・・・・う？」

起きると、周りは暗い照明が点いていた。薄暗く、少し心細い。額には濡れたタオルが置いてあった。多分、楯無さんが置いてくれたのだろう。頭の脇のテーブルにはお粥が置いてあった。体を起こすと、机の方に楯無さんが座っていた。パソコンを開いているから仕事をしているんだろう。体はさっきと変わらないがお腹は空いている。お粥を食べよう。お粥に手を伸ばすがうまく取れない。少しお粥と格闘をしていると楯無さんがこっちに気づいた。

「あ、慎二君。起きたのね」

「ええ、まあ」

あれ、喉も調子悪いな。声を出すのが辛い。

「お粥食べたいの？」

「食べ・・・・たいで・・・・す」

「だったら食べさせてあげるわよ」

「いえ、大……丈夫です。自分で……食べ……られ……ます」

「そう言ってるけど、体辛いんでしょ？」

「大丈夫……夫……で……す」

「嘘おっしやい。話すのだって辛そうじゃない」

あれ、バレてる。って、あんな喋り方だったら当たり前か。

「さっき熱を測ったら38度8分だったのよ？ 安静にしないと」

そんな高かったのか。そんな熱高くなったの久しぶりだな。

「さっきから話さなくなったし、私が食べさせてあげるわよ」

そう言って楯無さんは、こっちに移動してきた。ベットの横のあった椅子に座りお粥を取った。お粥を冷ましてからこちらに差し出した。

「はい、あゝん」

「あゝん」

お粥は卵と塩だけというシンプルな味付けで体に染み渡った。あれ、前にもこんなのがなかったっけ？ でも、熱は出してないからなあ。うまく思い出せないや。それよりもお粥優先だ。

「じゃ、次ね。あゝん」

「あゝん」

俺にお粥を上げる楯無さんはどこなく幸せそうだった。当たり前
って言ったらそれまでだけだな。それにしてもこのお粥、おいしい
な。俺の好みど真ん中だ。その調子でお粥を食べた。少ししたらお
粥は無くなった。まだお腹は空いてるけど、体が受付ない。仕方な
いか。

「じゃあ、風邪薬飲んで寝なさい。あと、水をたくさん飲んでね」

「はい・・・分かり・・・まし・・・た」

「そんなわざわざ話さなくてもいいわよ」

「すい・・・ませ・・・ん」

「ほら、さっさと風邪薬飲んでゆっくり休みさない」

言われたように風邪薬を飲んで横になった。お腹が満たされている
から直ぐに眠気がやって来た。あ、そういえば前は箸に食べさせて
もらったんだった。自室待機の時お粥を作って持ってきてくれたん
だった。今日のお粥、あの時と同じ味がしたな・・・

「おやすみ、慎二君」

おやすみなさい・・・

・・・

次の日、体の調子は大体戻っていた。ま、今日は学校には行けるな。そう思い、体を起こすと隣のベットに楯無さんの姿があった。あのあとも、看病してくれていたのだろう。

「……………んう？……………あら、慎二君。もう起きて平気なの？」

「はい、楯無さんの看病のおかげで大分楽になりました」

「そう。でも、本調子ではないんでしょう？大事をとって、今日は学校休んだら？」

「いいですよ。みんなには心配かけられませんから」

「そう……………でも、無理して風を拗らせないでよ？」

「そこは大丈夫ですよ。それよりも、お腹減ったのでご飯行きますか？」

「そうね、そうしましょうか」

俺達は、食堂に向かった。今日は清々しい一日になりそうだ。

結局、あの後葉飲んで学校行ったんだけど、授業中に寝ちゃって千冬さんの出席簿アタック喰らったんだよな。で、意識が無くなって保健室に運ばれて休んだよなあ。千冬さんが謝りに来たんだけど、またシュールだったよ。って、出席簿アタックで気絶って本当に本調子じゃないんだなあ、あんま実感ないけど。ま、いいか。風は問題なさそうだけど、早めに寝とくか。おやすみ

久しぶりの休日がこれか・・・・・・・・・・（後書き）

うん、前回の終わり方が問題だったね。

だって今回、箒たちの出番なしですよ。

かわりに楯無姉さんのターンって・・・・・・・・

それよりも、次回からは臨海学校編です。

俺の過去なんてこんなもんさ・・・・・・・・・・・・（前書き）

今回もggggです。

後半一応グロ注意です。

俺の過去なんてこんなもんさ・・・・・・・・・・

今日は臨海学校、バスで移動していた。隣には、楯無さん。位置は俺が窓際、通路側が楯無さんだ。千冬さんが何も言わないところを見ると、本当に教師も許可しているらしい。いらん許可しやがって・・・・・・・・。しかも何で隣に座ってんだよ、この人。おかげで、4名の機嫌が異様に悪くなっている。まあ、振られたのに他の女と仲良くしてたら怒るわな。逆にこのままいればみんなに嫌われるか・・・・。それはそれで良いのかな。あと、怒ってる原因は楯無さんの言動にも問題あると思うんだ。だって・・・・・・・・

「慎二君、あゝん」

なんて言ってくる。

「いや、お菓子は要りませんから」

「そんなこと言わないで。はい、あゝん」

「・・・・・・・・あゝん」

なんて事をやってみろ。周りからも異様に冷たい視線が来る。いちやいやすんなら他でやれっ、みたいなね。それには俺も同感なんだよ。でも、楯無さんがやってくるから仕方ないんだよ。拒否すればいいんだけど、断れないんだ。問題解決にはあれだな、俺が寝れば良いんだな。

「楯無さん。俺、寝るんで静かにしてください」

「えゝ、つまんなゝい。おしゃべりしようよゝ」

「昨日寝不足なんですよ。イヤホンで耳閉じるんで、用があれば肩を叩いてください」

「むゝ、分かったわよゝ」

あれ、なんか可愛い・・・・・・・・うん、今は忘れよう。悪い記憶だ。はあ、それよりもこれでゆつくりできる。実際、昨日は本当に寝不足だしちよいどいいや。イヤホンを出し、音楽を流して目を閉じた。うゝん、やっぱ寝るときはロックが良いな。

ぽふっ

ん？何か肩に違和感が・・・・・・・・俺は目を開けて状況を確認すると、楯無さんが肩に寄りかかってきていた。俺はイヤホンを取った。

「・・・・・・・・楯無さん、一体何を」

「んゝ？慎二君が寝るなら私も一緒に寝ようかなゝって思ったの」

グシヤッ！！！！

ん？何か良くない音が・・・・・・・・周りを見ると箒たちが何かを握り締めている。あれは・・・・・・・・アルミ缶？・・・・・・・・原型が分からないほど壊されている。怒り心頭のようにです。うん、怖い。箒に至っては背後に般若が見える。あれか、箒はスタンド使いか。あ、ちなみに般若って女の人なんだぜ。みんな知ってると思うけど。

「寝るなら、なんで俺の肩に寄りかかるんですか」

「ん、慎二君が好きだから？」

ピキピキピキ！！！！！！

更に恐ろしい音が……
 気にしたら負けだな、うん。というか一体何の音だよ……

「楯無さん、そういうことはこういふところでは言わないでください」

「じゃあ、別な場所なら言っているの？」

「え？まあ、はい」

やばい、墓穴掘った。

[illegible]

今度は一体何の音だ……。怖くて振り向けん。かろうじて確認できるのは一夏が犠牲になったことだ。さつきから悲鳴が聞こえる。悪い、一夏。お前の犠牲は無駄にはしない……

「とりあえず、楯無さん。静かにしてください。本当に眠いの
で」

「分かってるわよ。あ・な・た」

「誰があなただ」

「慎二君以外いるわけじゃない」

「は、分かりましたから。俺は寝ます。おやすみなさい」

「ふふ、おやすみ」

耳にイヤホンを戻し再び目を閉じた。肩に違和感があるが気にしない。とにかく眠い。

）．．．．．）

「慎二君、起きて」

「んう．．．．．眠い．．．．．」

「寝言が眠いってどういうことよ．．．．．それよりも起きてっば」

「うみゅう．．．．．ん、たてなしさん？」

「やっと、起きた。着いたわよ」

「ん．．．．．着いたんですか．．．．．」

「ほら、早く起きなさい。みんなもう降りたわよ」

「は、いい、わかりました」

まだ寝ぼけていてうまく状況が掴めないがとりあえず降りよう・・・

「遅いぞ、鷹野。いつまで寝ている」

「すみません」

「まだ寝ぼけているのか。まったく寝起きは良くならないものか・・・まあ、いい。とりあえず早く並べ。挨拶をする」

俺はとりあえず列の最後列に並んだ。必然的に楯無さんも一緒だ。

「それでは、これから三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員に仕事を増やさせないよう注意しろ」

「「「よろしくおねがいします」」」

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」
女将さんが周りをぐるりと見渡し、一夏に目が止まった。

「あら、こちらが噂の・・・？」

「ええ、今年は2名ほど男子がいるせいで浴槽分けが難しくなってますいません。ほら、あいさつしろ。それと鷹野。お前も来い」

「はーい」

「あらあら、まだ寝ぼけているの？」

「すみません、こいつは人に起こされると寝起きが悪いもので」

「いえいえ、なんだか可愛いらしいじゃありませんか」

「そう言ってもらえると幸いです。ほら、挨拶しろ」

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

「鷹野慎二です。よろしくおねがいします。・・・舌噛んだ・・・」

「はい、こちらこそお願いしますね」

「鷹野はきちんと起きていればきちんと出来る奴なので迷惑はかけないと思います。弟は不出来ですが」

「あらあら、弟さんには厳しいですね」

「事実ですから」

うー、眠い。一夏は地味にダメージを受けているみたいだね。眠いからどうでもいいけど。

「それじゃあみなさん、お部屋にどうぞ。海に行かれる方は別館で着替えができるようになっていきますのでそちらをお使いください。場所が分からない場合は従業員に気軽に聞いてくださいまし」

みんなは返事をして旅館に向かった。一旦荷物を置いてから海に行くのだろう。俺も部屋に行ってもう一眠りしよう。眠くて泳ぐどころじゃない。てか、泳いだら絶対に溺れる。そういえば、俺の部屋

ってどこなんだろ？気にしてなかったけど。

「ねえねえ、一夏君と慎二君の部屋ってどこなの？しおりには書いてなかったけど」

クラスの相川さんが話しかけてきた。ってか、しおりに部屋割り書いてあったのか。

「うーん、実は俺たちも知らされないんだよね。なあ、慎二何か知ってるか？」

「うー？部屋割りは知らーん。ってか、早く寝たいー」

「慎二は未だに人に起こされると寝起き悪いな。一人で起きるときは普通なのに」

「織斑は私と同じ部屋だ。鷹野は楯無と同伴の部屋だ」

みんなで話していると千冬さんが報告するようになってきた。今のセリフを聞いたみんなはこう思ったろう。『織斑先生と同伴って・・・さすがに鬼の巣に飛び込む勇気はないよ・・・』と。多少は違うだろうが意味は同じだろう。俺の場合は『あのバカッフルに参加はなあ・・・』だろう。別にカップルでもなんでもないのになあ。部屋も分かったことだし早く部屋に行って寝よう。

「で、部屋ってどこですかあ？」

「それは私が案内するわよ」

そう言って、楯無さんは俺の手を取って歩きだした。

旅館の端に近いところが俺たちの部屋らしい。部屋は純和風といった感じで畳の部屋になっている。そして、窓からは海が一望できる。窓は南側に設置されていて、日当たりがいい。でも、あれだな。台風なんて来たら大変だよなあ、こういう所って。まあ、いい。とりあえず寝よう。布団だすの面倒だしこのまま寝るか。腹に何か掛けて……よし。

「じゃあ、楯無さん。少し寝ます」

「はいはい、おやすみ」

「おやすみなさうい」

俺は目を閉じた。泳ぐのはお昼食べてからにしよう……

「ん………何か暑いな………」

目を開けると窓からの日が直接俺に当たっている。こりゃあ、暑くて当たり前か。というか、楯無さんは……あ、本読んでんのか。別に遊びに行けばいいのに。

「おそようございます。楯無さん」

「あら、慎二君。起きたの？」

「ええ。って、起きないと話さないでしょう」

「それもそうね。ふふ」

「それよりも、楯無さん。何で泳ぎ行かなかったんですか？」

「だって、慎二君いないとつまらないじゃない？」

「さいですか……じゃあ、お昼食べて泳ぎましょうか」

「そうね。そうしましょ」

俺達は食堂に向かった。眠くて気付かなかったが、廊下もいい雰囲気だな。まさに旅館！って感じがする。少し歩いて食堂に着いた。中也宴会ができるくらい広い。欧米の人のためにもテーブルまで用意されている。まあ、IS学園はいろんな国の人が集まるからなあ。さすが対応がいいな。ちなみに、座敷はみんな正座らしい。外国の人には合わないからな、正座。それもテーブルが用意されている理由のひとつかもしれない。あ、あと宗教もあったな。

俺達は適当なところに座敷に座った。時間が少し早いせいかなが少ないから好きなところに座れた。楯無さんはロシアの国家代表だが、日本でも暮らしていたから正座は大丈夫らしい。でも、俺があんまり正座って慣れないんだよなあ。せいぜい20分が限界だ。って、食事にそんな時間も取らないか。て、そういえば何で楯無さんはロシアの国家代表なんだろ？日本の国籍もあるのに。……分からんことを考えても仕方ないか。それよりも飯だ。

「さうて、お昼は何が出てくるんですかね。海が近いからお刺身かな」

「いいわね、お刺身。だけど光物はダメなのよねえ」

「ああ、それ何となくわかります」

そんな会話をしているうちに食事が運ばれてきた。内容は、マグロ、マダイ、スズキ、イカ、タコの刺身。味噌汁は白味噌の魚のあら汁。漬物が備えてある。あとは、ほうれん草のお浸しがあった。ご飯はツヤが出ていて食欲がそそられる。

「うへ、昼からこんな豪華なのかあ」

「そうねえ、去年も同じ感じだったわよ」

「・・・ああ、そっか。楯無さんは去年も来ているのか。まあ、いや。さっさと食べよう」

まずはマグロの刺身からだな。少しだけ醤油につけて・・・・・・うん、うまい。赤身だけとほどよく脂がのっついていて弾力もいい。新鮮な証拠だ。ご飯が進む進む。ひと切れで茶碗半分くらいのご飯がなくなった。次はあら汁。汁を啜るといろんな魚のだしが出ていてうまい。しかも白味噌だから、魚のだしと味噌の甘味がマッチしていてうまい。

「うん、昼からこんなうまいの食えるなら夜が楽しみだ」

「期待していいと思うわよ。去年すごかったし」

「うわ、今から楽しみだなあ」

そんな調子で昼を食べた。周りにいた少数の生徒には『お前らは新

婚かつ』的な視線で見られた。うん、仕方ないよね。最近、楯無さんしか話してないから感覚がずれているけど、傍から見ればカップルに見えるんだろうな。なんだかんだで楯無さんに頼ってるし。事情を知ってるし優しいからなあ、楯無さんは。しかも美人だし。ま、今は楯無さんには迷惑をかけないようにしよう。

（．．．．．）

今は食事が終わり、更衣室で水着で着替えたところだ。体には問題はないだろうけど、背中がなあ。少し怪我が目立つんだよなあ、仕方ないけど。そういえば、一夏は泳いでいるらしい。ここに制服を脱いだのが置いてある。そういえば、みんなも泳いでるんだろうなあ。できれば会いたくないな。腹くるるか。会ったらその時は頑張ろう。いい加減、後ろ向きな考えは止めよう。って、結構時間経ったな。楯無さん待たせてるよな、これ。よし、行こう。俺はドアから海に向かった。

「ん、眩しい」

只今、正午を回った時間だ。太陽は頂点にあり、日差しが強い。その光が海で反射し、海も綺麗な青色を映し出していた。ここで豆知識、海の青って空の青色が反射して青なんだぜ？これも知ってると思うけど。砂浜を歩いていると楯無さんを見つけた。すると、楯無さんもこっちに気づいたみたいだ。

「あ、慎二君遅い」

「すみません」

楯無さんは水色のビキニを着ていた。髪と同じ色なのでいい感じに

調和されていて似合ってた。しかも、この人はスタイルいいから何というか、色々と凄い。まあ、あえて言わないでおこう。言わなくてもわかるだろうし。

「さくで、夕方まで沢山遊ぶわよ」

「集合時間までには帰りますからね」

「そんなの分かってるわよ。さ、行くわよ」

そういうと楯無さんは俺の手を取り海に向かって走り出した。そういえば、俺って楯無さんに手を引かれるの多いよなあ。やっぱり、それだけリードされてるってことか。まあ、今は遊ぼう。

「あ、しんくんだ」

そう言って近寄ってきたのはのほほんさんだ。異様に遅い動きで俺のところに来た。

「おー、おりむーよりもたくましい体だね」

「まあ、トレーニングはしてるからなあ」

「あれれ、背中には傷があるね。どうしたの？」

「ああ、これ？子供の頃にやんちゃして怪我しちゃったんだよ」

「流石は男の子だね。あ、後でビーチバレーしよう」

「いいよ。じゃ、一回海に行ってくるね。ビーチバレーやるなら呼

んでね」

「わかったよ」

俺はとりあえず海に入った。少し冷たいが、気持ちいいくらいだな。少し沖の方に泳いでぶかぶかと浮かんだ。ふー、何だか落ち着くなあ。海は広い。空は快晴。絶好の海水浴日和だな。空を見ていると夏らしい雲があった。季節によって雲の感じって違うよなあ。それを見るのも落ち着く。何だか全てが許されるみたいな気がするんだよな。そんな訳はないのに。

「ふー・・・・・・・・ぶっ」

いきなり水をかけられた。いったい誰だ？人がリラックスタイムに入ってたのに。

「慎二、何してんだよ」

「って、一夏かよ。てめえ、人がリラックスしてたのに水かけやがって」

「そんなに怒んなって。のほほんさんたちがバレーやるから呼んできてって頼まれたんだよ」

「ああ、なるほどな。じゃ、行くか」

砂浜に戻ると、ネットが貼られていた。なんだか人数が多いな。ギヤラリーか？

「よし、慎二。勝負だ！」

「あれ、一夏。お前もやるの？」

「ああ、午前中で体をほぐしたからな。いつものように簡単にはやられないぞ」

「おうおう、そんなこと言っているのか？ボロ負けするぞ？」

「やれるもんならやってみろ」

「っへ、一夏も言うようになったな。よし、始めるか」

メンバーは俺のところに鷹月さん、相川さん。一夏のところには楯無さん、のほほんさんが入っている。

「楯無さん、なんでいるんですか？」

「慎二君と戦いたくつて。負けたら、ペナルティで今夜私にマッサージをしないさい」

「別にいいですよ。どうせ、負けませんから」

「言ったわねえ。意地でも勝ってやるんだから」

そうして、ゲームは始まった。

$$\begin{array}{c} \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \end{array}$$

今は夕食の時間。みんなが食堂に集まっている。そういえば、この夕食は浴衣着用らしい。浴衣は楽だから俺には丁度いいな。隣に

はいつも通り楯無さん。これは言わなくてもわかるよね、そろそろ。昼のゲームは・・・まあ、負けたよ。あんだけ大口叩いたのにね。今夜は楯無さんにマッサージをしなくてはならない。まあ、マッサージは得意なんだからいいけど、なくんか悪い予感しかない。今から気にしても仕方ないんだけどね。

「慎二君、今夜はマッサージお願いね♪」

「分かりましたよ」

って言うてくる。このセリフにはいい予感がない。そんなことを思っているとき、食事が運ばれてきた。今回も刺身、鴨鍋、焼き魚、天ぷら、炊き込みご飯が今夜の食事だ。・・・・・・楯無さんに言われてある程度予想はしていたけど、ここまでか・・・・・・学生に出す料理ではないだろうに。

「本当に凄いですね」

「だから言ったじゃない。もしかしてお姉さんの言ってたこと信じてなかったの？」

「いや、そんなことはないですけど・・・・ここまでは予想してなかったです」

「まあ、それもそうねえ。こんな料理が学生に出されるとは思わないわよね」

おっと、料理が冷めてしまう。早いとこ食わないと出来立てがもつたない。

「早く食べましょう。せっかくの料理が冷めますよ」

「そうね。いただきますよ」

料理に舌鼓を打つ俺であった。

くくくくくくくくくくくくくくくく

「ふく、風呂気持ちよかったな。なあ、一夏」

「そうだな。あんな風呂を二人だけで使えるんだもんな。びっくりしたぜ」

今は食事が終わり、露天風呂の男子利用時間が来たので一夏と一緒に入ってきたところだ。そういえば、このあと楯無さんにマッサージするんだっけ。待たせると悪いな。

「一夏。俺、先に戻ってるな」

「おお、分かった」

俺は部屋に戻った。部屋に戻ると楯無さんが布団に寝転んでいた。いつのまに布団出したんだか。

「あ、慎二君やっと来た。早くマッサージして」

「はいはい、分かりました」

俺は楯無さんの横に移動してマッサージを始めた。まずは足の裏から始めた。

「ん、そこくすぐったい」

「我慢してください」

「んう……んっ……はああ……」

……何でまたこの人はこういう声出すんだか。

「はい、じゃあ次はふくらはぎ行きますよ」

声は気にしないでマッサージを続けた。

……

それと同時に、一夏と千冬の部屋の前に人が集まっていた。箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラである。今まで悩んでいたが聞こうと決心したことがある。慎二のことだ。最近はこちらが意図的に無視をしていた。嫌われるように。だが、何か理由があると思っていた。『あの時』と関係があるのではないかも。だから、千冬に聞こうと決心したのである。

コンコン

「誰だ？」

「篠ノ之箒です」

「篠ノ之か、どうした？ 部屋に入れ」

そう言われて箒達は部屋に入っていった。

「何だ、お前たちもいたのか。どうした？ 大人数で押しかけてきて」
そう言う千冬も、5人がただ話を聞きに来たのではないと彼女たちの表情から読み取っていた。彼女たちがそんな顔で聞きに来ることと言ったらあれしかないだろう。

「鷹野の事を聞きたいのか？」

誰も何も答えないが否定しないところを見るとそうなのだろう。

「私は前に言ったな。お前たちには教えても意味がないと」

「それでも、私たちは教えて欲しいんです」

「・・・・・・・・・・本当にいいのか？ 後戻りはできないぞ」

「それでも構いません」

彼女たちの表情から中途半端な覚悟でここに来ていることは分かっていた。

「・・・・・・・・・・分かった。あいつの過去について話そう。
その前にお前たち、適当なところに座れ」

そうして千冬は話し始めた。

「あれは6年前だな。ちょうど篠ノ之が引っ越したあとの春休みのことだ。あいつは澄野瑠美香と遊んでいた。丁度一夏もいたから私

の家で遊んでいた。それで、あいつと瑠美香はある約束をした。絶対に瑠美香を守ってやる、というな。あれはもうプロポーズに近かったのかもしれないな」

そこで、シャルロットが質問をした。

「じゃあ、慎二はその子のこと好きだったんですか？」

「ああ、そうだろうな。瑠美香もあいつも事を好いていた。そこである事件が起きたんだ。あいつらが外で遊んでいる時に瑠美香が拐われた」

「拐われたって、誰に？」

今度は箒が質問した。

「それはある組織だ。目的としては、私の弱みを作ろうとしたんだろう。第二回モンドグロッソに出場させないためにな。それを一夏が教えてくれて、私は直ぐに追いかけた。だが、慎二の方が先に動いていてもう姿が見えなかった。警察に協力を求めて探したが見つけたときにはもう遅かった」

「・・・・・・もしかして」

「瑠美香は無残な死体となって発見された。しかも、腹が裂かれていて内臓が無くなっていた。憶測だが、内蔵を売って金にでもしようとしたのだろう」

「・・・・・・」

「少し離れたところに慎二はいた。死体の中に立っていた。死体になっていた連中は首の骨を折られたり、腹が裂かれていたりしていた。そんな中にあいつは立っていた。あいつは犯人グループを皆殺しにしていたんだ」

「・・・・・・・・・・」

「あいつがお前らの好意を受け取らないのはそこだろう。あいつのことだ、人殺しの俺なんかよりいい男を見つけろってことなんだろうな」

「そんなのって・・・・・・・・・・」

「だが、それがあいつだ。話はこれで全部だ。あとは、お前たちで考えろ」

みんなは黙っていた。色々な気持ちが頭を駆け巡っているのだろう。皆、困惑している顔だった。軍人のラウラでさえどこことなく悲しい顔をしていた。そんな中、箒が口を開いた。

「・・・・・・・・・・織斑先生」

「何だ？」

「慎二は・・・・・・・・・・もしかして約束の事を引きずっているんじゃないか？」

「多分な。ガキが出来ることなんてたかが知れている。なのに、あいつは何でもできると思っていたんだろう。あいつの身体能力の高さは昔からだ。その時も、その身体能力で出来ると思ったんだろう」

次は鈴が口を開いた。

「もしかして、あいつの背中^{せなか}の傷も？」

「多分、犯人グループにやられたのだろう」

再びの沈黙。千冬はその様子を見て気持ちを整理しているんだろう
と思った。そこで、千冬は質問を投げかける。

「なあ、お前ら。この話を聞いても慎二の事は好きか？」

「」「」「……はい」「」

「そうか……」

千冬はどことなく満足したような顔をした。

「なら、明日の夜あいつに思いを伝えてこい」

「」「」「え？」

「8時^{はちじ}にあいつを海岸に呼び出しておく。そこでお前たちの気持ちを伝えてこい。なに、夜の外出禁止は目をつぶってやる」

ぽかんとしていた彼女たちだが、意味を理解して頷いた。

「ああ、簪にも言っておけよ」

「え？でも、あの子って知らないんじゃない……」

「慎二の過去は知っているぞ、あいつは。楯無に教えてもらったらいい」

「……分かりました」

「では、部屋に戻れ。もう少しで消灯時間だ」

「では、失礼します」

その様子を千冬は見送った。

）．．．．．）

六年前の慎二視点

瑠美香が拐われて、車を追って捕まっているところを見つけた。俺は迷わず中に突入した。中には10数人の男がいた。その中に瑠美香もいた。

「うーーーーー!!!!!!」

口を布で覆われていて、声が出ていない。そして、酷く怯えている声だった。

「あ？何言ってんだ、ガキ」

俺は腕を掴んでいた男の腕を掴んだ。

「何してんだよお・
・
・
・
・
・」

そして思い切り蹴り上げた。

ボキツ

「あああああ……！！！！！！！！！！！！！！！！」

地面で転がっている男の頭を足で踏み潰した。

グシヤ

頭が潰れて脳みそが出てきた。そんなことはどうでもいい。今俺の中にある意志は『こいつらを殺す』それだけだった。

「おい、ガキ。何してんだよ」

騒ぎを聞きつけて何人か集まった。一人の男が手を伸ばしてくるがその腕をつかみ、後ろに回り込んだ。そのまま、腕を絞っていく。

「お、おい、ガキ。舐めたまねしてんじゃ……」

コキユ

肩が外れた音がした。

「おぐあああああああ!!!!!!」

痛みで地面でうずくまっているが、俺は首を思い切り蹴ってやった。すると、首から骨が出てきた。まわりにいた男がまた近づいてくる。俺は懷に潜り込み、腹にパンチをかました。頭が下がってくるからその頭を抱え、思い切り膝で鼻を蹴った。グシャ、という鼻が潰れた音がしたが何回も蹴り続けた。途中からその男は動かなくなった。

「おい、やってくれたな。ガキ」

いつのまにか周りには8人の男がいた。俺は落ちていたナイフを取った。すると、何人かの男がバットなどで殴りかかってくる。それかわし、その男の脇腹をナイフで切った。内臓やら血などが出てくるがもう一回、腹を切った。余っていた男が背中をナイフで切りつけた。だが、その男に近づき鳩尾あたりにナイフを刺し、そのまま下に下ろした。こちらでも内臓やら血が出てくるが関係ない。残り6人。

一人は思い切り頭を地面に叩きつけた。まだ動くから頭を潰した。もう一人は頭にナイフを刺し切り刻んだ。もう一人は何度も腹にナイフを刺してやった。もう一人は、目玉を潰して背骨を折ってやった。もう一人は、首にナイフを刺してやった。最後の一人は瑠美香と同じ殺し方をした。唯一違うのは、自分の腹にナイフが入ってくる感覚を味わわせてやったことだ。

ああ、瑠美香・・・・・・・・・・・・・・・・..
・・・何で、何で・・・・・・・・・・・・・・・・..
んだ・・・・・・・・・・・・・・・・くそ、何で俺はこんなにも弱いん

だ．．．．．ちくしょう．．．．．

これが6年前の事件の現場の様子である。言い表すなら地獄絵図。
そして、一人の少年が生きる意味をなくした日でもある。だが、少
年は皆に助けられ今日まで生きてきた。生きる意味をくれた皆に恩
返しをするため生きている。新たな理由が出来るのは後の話．．．

俺の過去なんてこんなもんさ・・・・・・・・・・・・（後書き）

正直言って、自分で何書いてんだか分からなくなりました。

いやゝ、眠くて何をしたいんだか分からんし・・・・・・・・

瑠美香のくだりも意味わからんし

すいません、表現能力低くて

全く、俺は損な性格してるな………（前書き）

今回は微妙です、はい

そして、サブタイ関係ないです

全く、俺は損な性格してるな……………

「……………んう……………夢、か」

ひどく懐かしい夢を見ていた気がする。それも、瑠美香が生きていた時の。

「……………あれ？」

頬が濡れている。泣いていたみたいだ。夢の内容はいまいち覚えていないが、楽しい夢だった。なのに、何で泣いてるんだろ、俺。やつぱり、生きているのが嬉しくて泣いてたのかな。守れたって。

「すう……………すう」

ん？何か寝息がすぐ近くで聞こえるんだが……………俺は寝息が聞こえる方向に目を向けた。

「……………いや、何で同じ布団に楯無さんがいるんだよ」

案の定、楯無さんがいたけど……………布団ちゃんと2つあるやん。どうせ潜り込んできたんだろうけどさ。

「……………眠気覚めたし少し歩いてくるかな」

俺は楯無さんにバレないように部屋を出た。

外は薄く陽の光が出ていた。もう日の出はしたみたいだ。風はどことなく涼しく、なんだか気持ちが落ち着いていた。

「ふゝ、昼間は暑いのに朝はやっぱり涼しいな……」

俺は陽の光を反射している海を見つめた。色はまだ青くなってはいない。空もまだ明るくはない。素直に綺麗だと思えた。

「……………」

俺はしばらく海を見つめていた。そして、部屋に戻った。

〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵

朝食に向かうとき、渡り廊下を通っているとき外側の地面にウサミミが生えていた。しかも、ご丁寧に抜いてくださいと書いてある。
こんなことするなんて、あの人以上はいないよなあ……
・あ、あの後部屋に戻っても楯無さんは寝てたからなんの問題もなくここまで来てるよ。今はね。でもって問題に直面してるっていうね。

「楯無さん、これは抜くべきでしょうか？」

「うゝん、慎二君の好きにすればいいと思うけど」

「そうですよね……………よし」

俺は下に降りてウサミミを抜こうと腰を屈めた。そして、思い切り引っこ抜く。が、抜けたのはウサミミだけだった。

「いってえ……………って、ウサミミしかないし」

キュイイイイイイイイイン・・・・・・・・

ん？なんの音だ？

ドカーーーーーー！！！！！！！

落下物は俺の5m先に落ちた。その落下物は・・・・・・・・『ニンジン』だった。わー、空からニンジンが降ってくるなんて御伽の国に来たみたいだな。・・・・・・・・はあ、何してんだかこの人。すると、ニンジンの一箇所が開き人が出てきた。

「あっはっは、引っかったね。しー君」

出てきたのは『みんなのアイドル、篠ノ之束』である。このキャッチコピーは束さんが失踪する前に俺に教えてくれたんだ。別に教えてくれなくても良かったのに。

「久しぶりですね、束さん」

「うんうん、ほんとに久しいね。というか、束さん昨日から待ってたのに何で抜いてくれないのさ、しー君！」

「え？昨日からあったんですか？」

「まさかの気づかれてなかった！そのせいで何度偵察機に落とされそうになったことか・・・」

「いや、普通に登場すればいいんじゃないんですか？」

「それじゃあ、つまらないじゃないか。それよりも篝ちゃん知らない

い？」

「いや、最近話してないし……でも、今の時間だったら食堂じゃないですか？」

「ふうん、何かあったね。しー君。でも今は、箒ちゃんに会ってる」

そう言って束さんは走り出した。食堂とは逆方向に。

「あれ、教えるべきでしょうか？」

「無理じゃない？もう見えないし」

マジか……。あの人は変にハイスペックだな。まあ、いいや。今は腹が減った。飯を食べよう。

「とりあえず食堂に行きましょう。お腹空きましたし」

「早くしないと時間なくなるしね」

俺達は食堂に向かった。

くくくくくくくくくくくく

朝食後、俺達はIS試験用ビーチに来ていた。この臨海学校の主な目的は『ISの非限定空間による稼働実験』だ。決して海水浴が目的ではない。なので専用気持ちの代表候補生には新型の武器やパツケージなどが送られてくる。

「全員集まったな。では、これより各班に振り分けられた装備を試すように。専用機持ち専用パーツのテストだ。全員、迅速に行動するように」

はい、という掛け声と共にみんなは班に分かれた。ちなみに、楯無さんは教師側にいた。楯無さんが来たのは教員が足りないって理由もあったかのもشれないな。さて、俺の新作の武器ってあるのかなあ。

「篠ノ之、お前は少しこっちに来い」

「はい」

「お前は今日から専用・・・」

「ち~~~~~~~~~ちゃ~~~~~
~~~~~ん!!!!!!」

砂浜からすごい勢いで何かが近づいてきている。まあ、束さんなんだろうけど・・・ここって関係者以外立入禁止だよな？って、あの入ほどISに関わっている入もないか。束さんは千冬さんに近づこうとしてアイアンクローを喰らった。

「痛い痛い痛い、ちーちゃんの愛が痛い！」

「なにが愛だ、バカ者」

そして、更に力を込める。

「ふふ、甘いね、ちーちゃん。それはもう見切ってるよ！」

そう言い、アイアンクローから抜け出した。一体どうやったんだ？普通にすると抜けた気がしたけど……

「ひさしぶり、姉さん」

「ホント久しぶりだね、箒ちゃん。電話でも何回かは話してたけど、こうして会うのは何年ぶりだろうね」

「何だかんだで4年は会ってないんじゃない？」

「そんなにかく。だったら、その胸の成長ぶりも納得でき……」

ドカン

「姉さん、そういうことはここでは言わないでね？」

箒が近くにあった岩を殴っていた。というか、ヒビ入ってる。箒も何だかんだですごいよなあ。普通の人間なのに。

「分かったから怒らないで、箒ちゃん」

「それで、ちゃんと用意してくれたの？」

「もちのろんだよ！」

束さんが何かのボタンを押すと、上から何か音が聞こえてきた。

ドーーーーーン！



すごい勢いで何かが落ちてきた。今日はいろいろ空から降ってくるなあ。空気が抜ける音が聞こえて、中が露になった。そこには『赤』がいた。

「これこそ束さんが用意した箒ちゃんの専用機『赤椿』だよ！現代ISのスペックを大きく上回る高スペックの！」

そういえば、箒だけに専用機が渡されるのに誰も何も言わないな。何でだ？ 少しくらいはブーイング的なのがあってもいいと思うけど……あれか、クラスになじめてるからこのこと言ったのか？ いや、でもそれはそれで不味いか……うーん、分かん。

「じゃあ、箒ちゃん。今からフォーマットとフィッティングを始めよう！ 束さんに任せれば5分で終わるよ！」

マジか……俺なんて戦いながらだったから30分も掛かったのに。流石は束さんだな。箒は赤椿に乗り込んだ。そして、束さんが赤椿にケーブルを繋ぎ空中ディスプレイを何かの楽器を弾くように打っている。

「ふふふ。箒ちゃん、胸だけじゃなくて体もきちんと鍛えてるんだね」

「それは、剣道やってるし……」

「いい感じの筋肉だよ。引き締まってて無駄な筋肉もない。最高の状態じゃないかな？」

「そうかな？」

そう言う筈はどこか恥ずかしそうに言っていた。

「はーい、フォーマットとフィッティング終わりー。さすが私」

え？5分もかかってないんだけど・・・てか、3分位しかたってないか？

「じゃ、少し待っててね。しーくーん!!!!!!!!!!!!!!」

「はいはい、何ですかー」

「ちよっと、雪月花見せて欲しいんだけど」

「分かりました。ちよっと待ってください」

俺は雪月花を展開した。それと同時に筈の時のようにコードをぶっ挿した。

「ほーほー、やっぱり少し普通のISと違うねー。これ、しー君が設定したの？」

「いや、元からそうなっていました。これでやりやすいからこのままで作ってましたけど・・・何かおかしいですか？」

「いやー、別におかしいところはないよー。ただ、ちよっと気になっ  
ってねー」

話しながらもディスプレイを操作していた。ほんと規格外だな・・・  
・・・この人・・・

「よし、これで終わり」と

ものの2〜3分で終わった。箒の時のフォーマットとフィッティングもそうだけど早すぎないか？これ……

「じゃあ箒ちゃん、ちょっと動かしてみようか」

「何すればいいの？」

「ちょっと上に行ってて」

箒は地上から30メートル辺りのところに到着していた。

「箒ちゃん聞こえる？今から武器の説明するね。右のが『雨月』あまづき左のが『空裂』からわれね。今からデータを贈るよ」

ディスプレイを操作してデータを送った。

「じゃ、簡単に束さんが武器の説明するね。まずは雨月は、対単一仕様の武装で打突に合わせてビームが出て相手を蜂の巣のするんだよ。飛距離はまあアサルトライフルくらいかな」

箒は雲に向かって雨月を突き出した。すると、無数にレーザーが雲に穴を開けて文字通り蜂の巣にした。うへへ、あんなの喰らいたくね。

「じゃ、次は空裂ね。こっちは対多数用に武器で斬撃に合わせて帯状のエネルギーを展開するんだよ。とりあえずこれを落としてみてね。ほい」と

すると、どこからともなく16連ミサイルポッドが現れ一斉に放たれた。いや、初めて乗る機体でこれはないだろう、束さん……・そんな思いとは裏腹に、箒は空裂を振るいミサイルを全部破壊していた。

「やれる、この赤椿なら！」

その様子を満足そうに束さんは眺めていた。と言うか、他のみんなも啞然としていた。まあ、当たり前だよなあ。あんなの見ればなあ……・対照的に千冬さんは険しい目で見ていた。まるで敵を見るかのように……・

「お、織村先生！た、大変です！」

山田先生が何か焦った様子で走ってきた。

「山田先生、生徒の前ですよ」

「す、すいません。それよりもこれを見ててください」

そう言って、山田先生は何かボードのようなものを千冬さんに見せていた。途端に千冬さんの顔が歪んだ。

「全員、注目！これより教員は特殊任務に移行する。なので、旅館の部屋で待機。専用機持ちはこっちに来い」

だが、みんなは何が起こったのか分からないのか、のろのろと片づけをしていた。

「さっさとしろ！部屋から出たものや、作業が遅いものは謹慎処分にするぞ！」

そう言うと、せつせと作業を始めた。

$$\begin{array}{c} \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \end{array}$$

今は旅館の一室に教員全員、楯無さん、簪、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラ、箒、一夏と俺が集められていた。

「先ほど、ハワイ沖で実験稼働していたアメリカの第三世代型ⅠS  
シルバリオスベル  
『銀の福音』が何者かのハッキングを受け暴走した」

その言葉を聞くと、俺、一夏、箒以外の専用機持ちの表情が変わった。

「これより、専用機持ちによって制圧作業を行う。質問があるものは拳手をするように」

「はい」

セシリアが一番初めに手を挙げた。

「敵I Sの詳細情報を求めます」

「それはいいが、口外にはするなよ。した場合、国からの監査委員が24時間付くだろう」

「わかりました」

すると、目の前にディスプレイが投影された。銀の福音の詳細情報が表示された。

シルバリオスベル

「出力が高いですわね・・・」

「特殊武装ありってのが難点ね」

「流石にこれじゃ敵の戦闘力が未知数だね」

「一度くらい偵察はできないのですか？」

「それは出来ない。今、ISは超音速状態で移動中だ。アタックできるのは一度とを考えてくれ」

正直言って俺達は置いてけぼりだな・・・ってか、みんなを見るのは久しぶりな気がするなあ・・・

「敵が未知数となると短時間勝負だな」

「そうだね。しかも、一撃で敵を沈められるような攻撃」

そう言うと、みんなは一夏を見た。まあ、零落百夜が一番妥当だよな。

「お、俺!？」

みんなは静かに一夏を見つめている。

「織斑、無理ならやらなくてもいい。これは実戦だ。訓練とは違う。命がかかっている」

千冬さんが静かに聞いてきた。すると、一夏は段々と顔の表情が引き締まってきた。

「やります。俺がやってみせます！」

「よし。あとはどうやって織斑を運ぶかな・・・高速稼働実験をしている奴はいるか？」

「それなら、わたくしならイギリスから強襲用高速パッケージ『ストライク・ガンナー』がきていますし、超高感度センサーも付いています」

「稼働時間は？」

「20時間です」

セシリアって、最初に言ってたエリートって本当なのかな。何でも出来るんだな・・・でも、これもオルコットの名前を守るために頑張ってきたんだろうな・・・ホント俺の周りの女子って強いなあ。

「ふむ、それなら適任・・・」

「ちょっと待つんだよ！ちーちゃん！！！」

「・・・・山田先生、部外者を外に」

山田先生は束さんを捕まえようとするが、それをうまいこと束さんはよけていく。身軽やなあ・・・・

「ちーちゃんちーちゃん、束さんの頭にいい作戦がナウプリーディング」

「……………いいだろう、作戦の内容は聞いてやろう」

「こういう時こそ赤椿の出番なんだよ！」

「どういことだ？」

「ここは第4世代ISの出番の見せ所なんだよ！」

咄然……………これが今の状況にふさわしい言葉だろう。5秒くらい経ったが未だにみんなはポカンした顔をしていた。そりゃそうだ。何で第4世代ISが出てくるんだろう……………

「……………束、説明しろ」

千冬さんが頭を抱えながら言った。

「あれ？説明してなかったっけ？」

とぼけたように束さんは言った。いや、あれが素なんだろうな。あの人。一夏は何の事だって顔してるなあ。実際分かってないんだろうけど。

「いっ君の為に説明するね」

流石、束さんは見抜いてたか。ってか、みんなおんなじふうに見えるよな。あいつ、顔に出るからな。



「まずは世代から説明しようかあ。まず、第一世代型ISのコンセプトは『ISの完成』。第二世代型は『後付武装による多様化』。そして、第三世代型は『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊武装の実装』。空間圧作用兵器、BT兵器とか、AICとか色々だね。それで第四世代型は『パッケージ換装を必要としない万用機』。これば理論上の空論なんだけど東さんはこれを作っちゃたよ、ブイブイ」

「またもや、啞然としていた。当たり前だ。今、世界中の各国は第三世代ISの開発に取り組んでるのにそれを飛ばして第四世代なんて……一体何考えてんだこの人は……」

「ちなみに《雪片式型》にも使われています。私がぶっ込みました」

「「「え?」」」

「要は赤椿ってのは、全身が雪片式片ってわけなんだよ」

「え? ってことは……」

「うん、強いね。というか、最強だね」

「みんながしくんとしてしまった。というか、ほんと何してんだこの人……」

「あれ? みんなどうしたの、御通夜みたいに。誰か死んだわけでもないのに。おかしいの」

いや、おかしいのはあんただ。

「言ったはずだぞ、束。やりすぎるなと」

「えへへ、みんなに会えてちよつと張り切っちゃった。てへ☆」

「それで、束。赤椿の設定にはどのくらい掛かる？」

「お、織斑先生！」

驚いたような声を挙げたのはセシリアだった。それはそうだろう。あまり稼働していない筈が選ばれるとは思っていなかっただろう。現に、俺もそうだし。

「では、聞くんが……そのパッケージはもうインストールしているのか？」

「い、いえ。それはまだですが……」

「私にかかれば調整は7分で終わるよ」

パッケージのインストールには20分は掛かるだろうから、これは決まったな。セシリアもそれを聞くと引き下がった。

「では、これより篠ノ之、織斑両名による任務を開始する。作戦開始は30分後。他の物は機材の確認などをしておけ」

「じゃ、箒ちゃんこっち来てね」

束さんはまた赤椿にコードをぶっ挿してまたディスプレイを操作し

た。あっちは問題なさそうだし、俺は機材でも運んでおこう。重いのは女子には辛いだろう。俺は廊下に出て、重そうな機材を部屋の中に入れた。途中、シャルロットが重そうな機材を運んでいた。声を掛けるか迷うが、重そうな機材を運ばせるわけにもいかないな。

「シャルロット、それ貸せよ。重いだろう？」

「し、慎二……うん、じゃあお願い」

ぎこちないが仕方ないだろう。話したのも何だかんだで1ヶ月ぶり近いし。他に話すことも無いし、さっさと仕事を終わらせてしまおう。

くくくくくくくくくく

30分後、もう少しで作戦が始まるところだ。俺達は砂浜に来ていた。とりあえずは一夏達を見送っておこうと思ったのだ。

「一夏、今回は命が掛かっている。だから、危ないと思ったら逃げるよ」

「ああ、分かってるさ。これは訓練とは違う。作戦なんだ」

よし、一夏はわかってるみたいだな。これなら作戦中も問題なさそうだ。箒は……

「箒、大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ないぞ。私と一夏に任せておけ」

と言った感じに浮かっていた。まあ、気持ちには分からなくてはならないが・  
 ・・・・・これは浮かれすぎだろう。作戦に支障がでなければい  
 いけど・・・・

「一夏、箒は浮かれてるみたいだ。何か、危なくなったら助けてやれよ」

「ああ、分かった」

「では、今から作戦を開始する。両名、準備をしろ」

二人はISを展開した。そして、一夏が箒の上に乗るといった感じで飛んでいった。

「……………織斑先生、箒は大丈夫でしょうか？」

「さあな、あの調子じゃ無理だろうな」

「ですね……」

とりあえず、二人とも死ぬな。

$$\begin{array}{c} \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \\ \bullet \\ \S \end{array}$$

一時間後、入ってきた報告は任務失敗とのことだった。しかも、一夏の意識が戻らず昏睡状態だという。箒は、一夏の怪我が自分のせいだと思っているらしくひどく落ち込んでいた。他のみんなも一夏を心配しているみたいだ。予測だが、一夏は箒を庇ったんだと俺は思う。それでケガをした、といった感じだろう。今の一夏はそう簡

単にケガをするようには思えない。・・・まあ、どちらにせよ一夏が怪我を負ったんだ。それには変わりない。しっかりこの仕返しはさせてもらうぞ、銀の福音シルバリーオースベル

時刻は夜の12時。日をまたぐかまたがないか位の時間だ。俺は楯無さんと部屋にいた。

「・・・・・・・・楯無さん、あれは分かりましたか？」

「ええ、分かったわよ・・・・・・・・でも、私も行くわ」

「それはダメです。これは俺だけでいいんです。勝手な行動して罰を受けるのは俺だけで十分です」

「慎二君・・・・・・・・分かったわ」

「ありがとうございます」

俺は他のみんなにバレないように、部屋を移動し砂浜に向かった。

「慎二君、死なないで……」

その声はか細く慎二には聞こえなかった。

〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃

作戦司令室内、銀の福音シルバリオスベルの監視をしていた山田先生から声が上がった。

「お、織斑先生。大変です!!!」

「一体どうしたんだ、山田君」

「これを見てください!」

空中に倒影された画面を見て千冬の顔が歪んだ。

「……あの馬鹿者めが……!」

〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃

俺は楯無さんの情報を元に太平洋を移動していた。数キロ先に明る何かが見えた。……座標も聞いたとおりだし、あれだな・  
……俺は、パイパーセンサーの出力を上げて姿をはっきりと確認した。あちらも、こっちに気づいたようで球状に出していたエネルギーを戻し、戦闘態勢に移行したように見えた。俺も普通のハイパーセンサーで確認できる距離まで移動し、空中に止まった。

「……さあ、落とし前はきっちり付けさせてもら

うぞ。  
銀シルバリの福音をスベル！！！！！！！！！」

全く、俺は損な性格してるな………（後書き）

微妙でしたよね〜自分でも思います

次回は戦闘回です



やっと、色々終わったよ………(前書き)

今回で臨海学校編が終わりました

やっと、色々と終わったよ……

「織斑先生！どうすればいいんですか！」

「いいから落ち着け、山田君」

と言うものの、千冬自体も正直焦っていた。一夏達との戦闘により銀の福音のシールドエネルギーは減っているとはいえ、訓練用IS一機で軍用ISと戦うなど危険が多過ぎる。だからとは言え、他の専用機持ちに任せるのも気が引けていた。軍用ISというのは、訓練用ISとのシールドエネルギーの量が桁違いに多い。基本的には数倍と言われている。ましてや、軍が利用するとだけあって武装や特殊武装なども訓練用ISとは桁違いに威力が上だ。

（全く、どうすればいいんだ……！！）

くくくくくくくくくくくく

「……こそ！」

銀の福音との戦闘が始まり30分が経っていた。正直言うとジリ貧だ。シールドエネルギーは半分を切り、実体ダメージも中になっている。軍用ISのシールドエネルギーがここまで多いとは……見誤ったな。だが、嘆いているわけにはいかない。これは実戦だ。気を抜けば殺られる。

「っは！」

自然と笑みがこぼれる。自分の選択が命に関わる……

いじゃねえか、ゾクゾクする。一夏と筭の敵討ちもあるが、純粹に戦闘が楽しい。俺ってそんな性格だっけか……まあ、いいや。そろそろ勝負を決めないとな……

「さあて、これから第二ラウンドだぜ。覚悟は良いか、銀の福音？」

「……La♪」

機械音が聞こえたかと思うと、福音はくるとその場で一回転した。すると、福音に付いていた翼から無数のエネルギー弾が放たれる。

「つく！数が多い」

とてもじゃないけどよけられる量じゃない。とっさに、俺は菊一文字と漆黒ノ太刀を両手にコールした。自分に当たりそうな弾だけを切り落としていく。が、それでも手一杯だ。10・・・20・・・もう数がわからなくなった辺りでエネルギー弾の雨が止んだ。福音の位置を確認しようと、周りを見渡す。が、姿が確認できない。

「見失ったか……」

ISのハイパーセンサーのもってしても、姿を確認できない。今は夜。月明かりはあるとはいえ、十分な光ではない。海の中に潜られたら確認しようがない。俺は目を閉じた。気配で敵を見つけようとする。

「……」

しばらく動きは無い。風の音が耳を掠める。

・・・・・・・・・・・・・・・・ブウン

「下か！」

声を上げたと同時に真下の海から福音が姿を表す。俺はそれを体を横に捻って躲した。

「おりゃああああ！」

遠心力に任せ刀を思い切りつける。そして、翼を破壊することに成功した。翼は爆発しながら海に落ちていく。だが、福音も寸前の所でヒットポイントをずらした。本当なら頭から落とすつもりだった。

「うち・・・・・・・・やっぱり簡単にはいかないか・・・・・・・・」

福音のシールドエネルギーを減らすことには成功したが微々たるものだ。もっと、大きな一撃を与えなければ勝負はつかない。方法はただ一つ。疾風迅雷しかない。だが、まだ使い時ではない。相手は軍用IS、こちらは訓練用IS。シールドエネルギーの量の違いはさっき思い知らされた。疾風迅雷はただでさえ燃費が悪いから、使うにはもう少し福音の機動力を落としておきたい。現在、福音のスラスターは3つ。元は4つで1個はさっき落としたから、もう一つくらい落しておきたい。スラスターがなくても機動力があるISはあるが福音は違うらしい。今の動きはさっきよりも落ちている。半分になれば少しは違うだろう。

俺は気持ちを落ち着けた。ここでミスをすれば成功しない。俺はもう一度福音を見据えた。福音は先ほどと変わらない様子だった。この海の上じゃ隠すものもないから奇襲も出来ない。ゴリ押ししかない・・・・・・・・こっちは二刀流だから手数が多いのが唯一の利点

か。

俺は福音に瞬間加速を使い福音に突進した。そのまま体当たりをして福音の体勢を崩した。そのまま菊一文字で切りつけようとしたが福音に刀を掴まれた。

「つく！」

俺は残りの漆黒ノ太刀で切りつけようとするが、福音が蹴りを繰り出してきた。蹴りは顎に入ろうとするが、体を反らしてなんとか躲す。だが、一緒に菊一文字も離れた。

（しまった！）

予想通り福音はこちらに接近していた。気づいたときにはもう遅く、攻撃を受けた。そのままラッシュを喰らい装甲がほとんど無くなっていた。

（くっそ……意識が……）

ISが意識を無理に戻すが、その力も弱い。だが、ここで止まるわけにはいかない。俺は漆黒ノ太刀でスラスターを切りつけた。福音も攻撃の後で隙ができていた。そのまま攻撃が通りスラスターの破壊に成功した。

「はぁ……はぁ……」

正直言ってシールドエネルギーがもうない。残り100を切ってしまった。疾風迅雷は使えるが使ったあとがもう動かすだけエネルギーがない。……しかし、迷ってはいられない。ここで止

まれば誰も福音を止められなくなる。勝負を決めにかからないと本当に死ぬ。まあ、どちらにせよ勝ったところで同じ結末か……。……ここは海。近くに島も何もない。ISの補助機能が無くなって落ちたら命はない。だったら、危険が取り払われたほうが良いに決まっている。

### 『疾風迅雷発動』

俺は覚悟を決めワンオフ・アビリティを発動させた。ここで……。勝負を決める！俺は疾風迅雷で加速した雪月花で接近した。福音も驚いたらしく、回避にワンテンポ遅れた。その遅れが命取りだぜ……。……

「おらあああああああ！！！！！！！！！！」

二つの刀で交互に切りつける。その後に蹴り上げ、更に剣で切りつける。普通のISならシールドエネルギーが切れているだろうが、福音は軍用ISまだシールドエネルギーは残っている。俺は攻撃の手を緩めず、更に切りつける。そして、最後に距離を置いて、瞬間<sup>インフラスト</sup>加速を使って接近する。

「鷹野流剣技、降りしきる千雨」

降りしきる千雨が完全に決まった。福音は所々煙を上げながら、海に落ちていった。

「やっと……。……終わったか」

一息ついた瞬間、落ちていた福音に変化が起きた。突如、福音の周りにエネルギーが集まり出した。最初に見た時のエネルギーとは違

う。一体、何が……

「まさか……セカンドシフト 第二移行か!？」

集まっていたエネルギーが福音に収束した。中から出てきた福音はさっきとは姿が変わっていた。さっき壊したはずのスラスターは戻り、エネルギー刃のようなものが出ていた。そして、一番の違いはスラスターの大きさだ。さっきよりも大きくなっていて約1、5倍になっている。

「マジかよ……こっちはもうシールドエネルギーが……」

こちらのシールドエネルギーは最低限ISを動かすくらいのみしか残っていない。ここで第二移行<sup>セカンドシフト</sup>なんてやられたら、まずい。少しの間思考に浸っていると、福音の第二移行<sup>セカンドシフト</sup>が完全に終わっていた。減らしたシールドエネルギーも回復したらしい。

「くそ、本格的にまず……」

次の瞬間には福音が目の前に移動していた。さっきと速さが比べ物にならない。

「はやっ……」

回避は間に合わず、俺はそのまま攻撃を受けた。さっきのお返しと言うくらい怒涛の攻撃だった。段々と意識が朦朧<sup>もろろ</sup>としていく。口に鉄の味が広がっていく。口の中を切ったらしい。薄れゆく意識の中で確認できたのは福音がエネルギーを溜めているところだった。

（ああ、くそ・・・・・・・・こんなところで終わりか・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・最後までみんなに迷惑かけることになっちまった  
な・・・・・・・・）

俺は体に衝撃を受け、海に落ちていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「織斑先生！鷹野君のIS反応、消滅しました！」

「なんだと！？もう一度確認しろ！」

「してます！だけど反応が・・・・・・・・・・！」

千冬は放心状態になった。あの慎二がやられた・・・・・・・・・・まさか、そんなことが・・・・・だが、反応が消えたのも事実。千冬の手持っていたボードの形が変わって握りつぶされていた。そして、気持ちを切り替えた。今は任務中だ。

「・・・・・・・・作戦終了後、鷹野の搜索をする」

「織斑先生！」

「山田先生、今は作戦中だ。集中しなさい」

「でも・・・・・・・・」

どこか煮え切らなような顔でディスプレイの方を向いた。その場で千冬は飛び出していきたい気持ちを抑えていた。



）．．．．．

箒は太平洋を移動していた。途中で会った、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪も一緒だ。

（一体何、この胸騒ぎ．．．．．慎二がやられる訳がないのに．．．一体）

それはここにいるみんなに共通して言えることだった。単に一夏がやられて敵討ちをすると言う気持ちもあるが大半は楯無と一緒にいた。場所は楯無に聞いて向かっているところだ。本来なら止めるところなんだろうが、楯無自身も慎二を心配していた。楯無自身が出撃したいところだが、装備が点検中でまともな装備がなく出撃できないでいた。そして、箒達に場所を教えたのである。移動して15分が経ち、座標ももう少しと言うところに来た。

「目標補足！これより迎撃に入る！」

ラウラが最初に福音も見つけた。そのままラウラはその停止し、肩の大型レーザーカノンで迎撃態勢に入った。弾が打ち出されるが福音には当たらない。

（4000．．．．．2000．．．．．くそ、予想よりも大分早い！）

福音の攻撃が入りそうになるがステルスモードに移行していたブルーティアーズの攻撃がそれを防ぐ。一瞬だが福音の動きが止まりそこに箒が攻撃を加える。赤椿のスペックをもってすれば簡単に攻撃が入った。が、そこで福音の形が違いうことに気がついた。

「みんな！福音の形状が変わっている！」

「なに！まさか、セカンドシフト第二移行しているのか！」

すると、福音は一度距離を取った。誰もそこに飛び込もうとはしない。セカンドシフト第二移行したのだ、何か新しい能力が追加されたのかもしれない。そう思い、手を出せないでいた。

「ねえ、みんな……気になっていたんだけど……」  
「……慎二はどこ？」

「「「「「！」「」」」」」

先程から慎二の姿が確認できないことを不審に思っていたシャルロットが口に出した。いや、皆気づいていたのかもしれない。あえて、気づかないふりをしていたという方が正しいのかもしれない。ただ、それを認めたくない一心に。だが、シャルロットの一言で何かが切れてしまったのだろう。皆の目が怒りに染まっていた。最初に動き出したのは、ラウラだった。

「このおおおおおおお！……！！！！！！」

「ラウラ！待って！」

イグニッション・ブースト  
瞬間加速を使い接近するが、直線的すぎて簡単によけられた。そして、反撃をくらった。

「ぐあああああああ！……！！！！！！」

「よくもラウラを……！！」

今度はシャルロットが突進していた。両手に散弾銃ショットガンをコールし、それを打つ。が、機動力が上がった福音には当たらない。追撃と言わんばかりにセシリア、鈴も攻撃に参加するが結果は変わらない。意識がシャルロット達に向いている間、箒は福音の下に回り込み福音に切りかかる。攻撃は入り、初めてダメージを与えられた。

『ダメージレベル中、迎撃LEVEL MAXに移行』

その警戒音らしいのが聞こえた後、福音の動きが更に一段階早くなった。セシリアは瞬間的に接近された。

「なっ！インターセ・・・・・・」

インターセプターをコールしようとするが、福音の動きの方が早くエネルギー弾を喰らった。

「きゃあああああ！！！！！！」

装甲が外れ所々が生身になっている。その隙に簪はマルチロックオンミサイルで迎撃した。が、福音の機動力の前では追尾機能も意味が無い。接近されそうになるが、荷電粒子砲で何とか持ちこたえていた。

カチッ

（しまった！・・・・補給を・・）

攻撃がなくなり簡単に接近された簪はなんとかシールドをコールし、攻撃を防いでいた。

(一撃が重い……このままじゃ……!)

そこに一つの弾が通過する。その弾を感知し、福音は回避行動をとる。

「みんな、待たせたな」

「一夏!」

現れたのは一夏だった。前回、福音から受けた傷は完治していた。そして、一夏のISの形状もまた変化していた。白式第二形態『雪羅』一夏も第二移行セカンドシフトしていた。

「一夏! もう動いて大丈夫なのか?」

そう言いながら箒は一夏に近づいた。

「ああ、傷も完治してるし問題ないぜ」

「………すまなかった」

「?何のことだ」

「昼間のことだ。私は力があることが嬉しくて浮かれていた。そのせいでお前が……」

「そんなことは気にすんなって。誰にでもそうなることはある。俺だってあったさ。だけど、そのあとで同じ間違いをしなければいいんだよ。人間は間違う生き物だ」

「一夏・・・・・・・・」

「それよりも箒、先に福音を倒しちまおうぜ」

「ああ、そうだな」

二人は福音を見据えた。今は鈴、セシリア、簪、シャルロット、ラウラによってなんとか持ちこたえている状態だった。そこで一夏があることに気づく。

「なあ、箒。慎二はどこにいるんだ？」

「それは・・・・・・・・」

急に黙り込む箒。その様子を見て一夏は一つの可能性に辿り着く。

「まさか・・・・・・・・やられたのか・・・・・・・・？」

箒は泣き出してしまった。その涙が肯定の意味なのだろう。一夏は自分の中の感情を抑えられないでいた。憤怒、それだけが心を支配していた。家族同然の慎二がやられて判断ができないでいた。だが、一つ。これだけは決定した。

「銀の福音！お前を・・・・・・・・破壊こわしてやる！」

一夏は福音に突進した。

）・）・）・）・）・）・）

(一体ここは・・・・・・・・・・)

目の前が暗い・・・・・・・・しかもすごく寒い。そんな中、一つの光が慎二の前に現れた。

「これは・・・・・・・・みんな・・・・・・・・・・！」

光に映っていたのは今、福音と戦っているみんなだった。

「一夏もいる・・・・あいつ大丈夫だったのか」

だが、戦況は良くないらしい。先程から押され始めている。このままじゃ、みんなが危ない。だけど、俺にはもう動く力がない。更に視界が暗くなり、体温も落ちていった。そんな時、頭に直接話しかけるように何か話しかけてきた。

『汝、何を求める？』

「何をつて・・・・・・・・・・」

俺は少しの間考えた。そして、もう一度問われた。

『もう一度問おう。汝、何を求める？』

「俺は・・・・・・・・俺は・・・・・・・・みんなを守る力が欲しい！」

『それは何故だ？』

「もう俺は、大切な人を失いたくない・・・・・・・・そのために

みんなを守る力を俺にくれ！」

『………よかろう。力を授けよう』

「これは……！」

『それはISの新たな力だ。使い方は分かるな？』

「ああ」

急に視界が明るくなり出した。そして、体の感覚が戻っていく。傷も治っているみたいだ。俺は、そこを飛び出した。

『………しー君、頑張れ』

）．．．．．）．．．．．）．．．．．）．．．．．）

「おりゃあああああああ！！！！！！！！！！」

一夏は零落白夜を使い福音に攻撃を仕掛けた。が、簡単によけられてしまう。

「くっそ………はぁ………はぁ………はぁ………はぁ………」

一夏が加わり戦闘は20分が経っていた。福音の機動力をなんとか抑えようとするが上手くいかない。小さな隙を突いて攻撃するも当たらない。そのせいでみんなのシールドエネルギーは無くなりかけていた。装甲にもダメージがあり、本格的に危ない状況になっていた。

（このままじゃ・・・・・・・・くっそお、何で俺はこんなにも無力なんだ。慎二なら・・・・・・・・慎二ならどうする？）

「一夏、危ない！」

思考に浸っていたせいでシャルロットの声に気付かなかった。

（しまった！）

回避行動が取れず、衝撃に身構えた瞬間

ザバーーーーーーン！！！！！！！！！

突如、海に水柱が立っていた。福音の注意がそちらに向き、一夏は距離を取った。そのまま、みんなのところに行った。

「一体何が・・・・・・・・」

水しぶきが晴れていくにつれて、その中にいた人物の正体が露になった。

「よっ、みんな無事か？」

「「「「「「慎二・・・・・・・・？」」「」「」」」」」」

「おいおい、俺以外に誰がいるんだよ？」

「そうだけど・・・・・・・・」

鈴が口ごもりながら言った。みんなを見るとどこか安心しているよ



うな顔だった。

「だって……………死んじゃったかと……………思った……………」

泣きそうな顔で簪はそう言ってきた。

「……………悪かったな、心配かけて。でも、話は後だな。まずはあれに消えてもらおう」

俺が福音を指さすとみんなが頷いた。そして。一夏が近寄ってきた。

「それよりも慎二、お前も第二移行セカンドシフトしたのか？」

「ん？ ああ、そうみたいだな」

「何か名前あるのか？」

「ちと待て……………雪月花第二形態『焰』ほむららしい」

「焰？ほむら ああ、だから背中に赤いピットのようながあるのか」

「え、そんなのあんの？……………って、ホントだ。何だこれ？」

一夏に言われて見てみると、スラスターの辺に何か赤い棒みたいな  
のがある。

「何か新しい能力なんじゃないのか？ 俺だってあったし」

そう言って、一夏は左手を見せてくれた。なる程、前とは形状が違

うな。

「ま、そんなことよりもさっさと終わらして帰ろうぜ。もうちょっとで夜が明けそうだ」

「そうだな・・・じゃ、行くぞ」

俺達は福音に接近した。

「・・・・・・・・？」

俺はISに少し違和感を覚えた。何だろう、この感じ・・・・・・・・今までよりもしつくりくる。これなら行ける！俺は瞬間加速を使い福音に急接近した。前の雪月花よりも早い。そして、漆黒ノ太刀で切りかかる。福音も腕で応戦し、力が拮抗する。が、今の俺は一人じゃない。後ろからラウラがレーザーカノンで福音を打ち抜く。俺はそのまま引き付け、寸前で回避行動を取った。そして、福音にダメージを与えられた。

（やっぱりか・・・・・・・・）

今の一連の動きで分かったことがある。背中にある赤いピットのようなものは、ISの運動力を上げるものらしい。おかげで簡単に回避ができたし、瞬間加速も前よりも早くなった。そして、一番の違いは武器だ。一覧に新しい武器が追加されていた。その名も『煉獄ノ剣』。これは赤いエネルギー刃らしく、今までの刀よりも出力が上だ。威力も上がっているだろう。

（しかし、俺のISの武器は接近メインか・・・・・・・・でも、いくらなんでも刀三本は多くないか？）

そこで思考を止めた。こんな事を今考えたところで意味はない。俺は漆黒ノ太刀をクローズし煉獄ノ剣をコールした。日が完全に出てしまった。これ以上は時間をかけられない。俺はみんなにオープンチャンネルで話した。

「みんな、少しの間福音の動きを止めてくれ」

「「「「了解!」」」」」

「一夏、勝負を決めるぞ。零落百夜を発動させろ」

「分かった」

俺も疾風迅雷を発動した。勝負は一瞬、それに全てを賭ける! まずはセシリアがピットで牽制、そちらに意識が向いたら、今度はウラのレーザーカノン、簪のマルチロックオンミサイルが発射される。福音に何個かが当たり周りに煙が立ち込める。その中をシャルロットは散弾銃で打ち抜いていく。福音はそれから逃げるようにして外に出た。そこには箒が待ち構えていて、スラスターを全て断ち切った。そして、俺は動きが鈍くなった福音に煉獄ノ剣で切りつけた。

「鷹野流剣技、乱れ桜」

福音は乱れ桜を喰らい完全に体勢を崩した。

「一夏! 今だ!!!!!!」

一夏は福音から死角になる太陽の方向から福音に切りかかった。

[illegible]

一夏は切りつけたまま押し切っていた。福音が一夏の喉に手を動かすがその途中で動きが止まった。

「終わったか・  
・  
・  
・  
・」

一夏がそう言う、みんなが一息ついた。長かったな……。俺が大体一時間くらいにここに来て今日の出だろ？えーと、単純計算5時間？……。うん、気にしちゃ駄目だ。

「さ、みんな戻ろうぜ」

「うん」

「ああ」

「ええ」

俺達は旅館へ歸つた。

$$\begin{array}{c} \hookrightarrow \\ \bullet \\ \hookrightarrow \\ \bullet \\ \hookrightarrow \\ \bullet \\ \hookrightarrow \\ \bullet \\ \hookrightarrow \\ \bullet \\ \hookrightarrow \end{array}$$

「任務完了・・・と言いたいところだが、私は待機していると言ったはずだが？」

旅館の入口に帰ってきた時、玄関先で待っていたのは千冬さんからの厳しいお言葉だった。

「特に鷹野。何をお前は一人で勝手な行動をしてる」

「え・・・・・・・・すいません」

「・・・・・・・・私がどれほど心配したと」

「「「「え？」」」」」

「・・・・・・・・忘れる。いいか、命令だぞ！」

「「「「イ、イエッサー！」」」」」

有無を言わさない声でそう言われたら自然とその言葉が出てきた。  
しかもみんな同じ言葉を同じタイミングって・・・・・・・・同じこ  
とを思っただな。

「お、織斑先生。これくらいにして、みんな疲れているわけですし  
・・・・・・・・」

「まあ、そうだな・・・・・・・・ああ、そのなんだ。よくやった」

そう言って、千冬さんは逃げるように中に入っていた。

「あれでも心配してたんですよ、織斑先生。特に鷹野君」

「え？俺ですか？」

「そうですよ、鷹野君のISの反応が消えた時なんて泣きそうに・  
・・・」

「・・・・・・・・山田先生、ちょっとこちらに来てもらえますか？」

いつまにか山田先生の後ろには千冬さんがいた。そして、襟を掴み部屋の中に引きずり込んでいった。

「ああ、みなさん。精密検査を受けてくださいね」

山田先生は千冬さんに引きずられながらそう言って消えていった。

「・・・・・・・・とりあえず検査受けるか」

みんなは頷いた。

）・）・）・）・）・）・）

「まったく、検査終わったらいきなり外に出されるって、どういうことだよ・・・・・・・・」

精密検査が終わる頃にはもう外は暗くなっていた。しかも精密検査中も楯無さんが来て大変だった。そして俺は食事後、ゆっくりしていたら千冬さんに砂浜に行けと言われ砂浜に来ていた。

「・・・・・・・・月が綺麗だな」

砂浜から見える月は綺麗な満月だった。俺は月明かりにきらめく海を見ていた。

「慎二」

誰かに名前を呼ばれた気がして振り向くとそこには箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪がいた。

「みんな揃ってどうした？」

「私達の気持ちを伝えておこうと思ってな……………」

気持ち……………」

「それなら受け入れられないって……………」

「慎二さんの過去に何があったかは知っていますわ」

「！……………誰から聞いた？」

「……………千冬さんよ」

「私は……………お姉ちゃん」

全く、あの二人は何やってんだよ……………人の過去、勝手に教えるなよ……………」

「じゃあ、尚更俺なんかに構うなよ」

「自分のことを俺なんかって言わないでよ、慎二。そう僕に言ってくれたのは慎二だったよね？」

「そうだ、私の嫁ならもっと堂々としているろ」

「なんでそこまで……………」

「言っただろう、慎二。私はお前に助けられてばかりだ。その恩を

返したい。一生をかけても。それに私はお前が大好きだ。この気持ちを変えられない」

「わたくしも、助けられてばかりですわ。それにあなた様以外にわたくしの旦那様は考えられませんか」

「そうよ、慎二。あんた勝手にそんなことするなんて非常識じゃない？ 私だってあんたの事大好きなのよ。少しくらいは恩返しさせなさい」

「慎二は僕をデュノア社から助けてくれた。それにお母さんだって・・・あんなことされたら慎二以外は見えないよ。僕も慎二のこと大好きなんだよ」

「私は、皆ほどお前を見てきたわけではない。だが、人の温もりとこのを教えてくれた。あれだけで私はどれだけ救われたと思っている。もっと一緒にいて教えてくれ、家族と言うものを」

「私は・・・昔から慎二のことが大好き。再開してからもその気持ちは・・・変わらない。今でも私は慎二のことが・・・大好き。これだけは譲れない」

みんな各々の気持ちを伝え俺に微笑みかけていた。みんな一途に俺の事を思ってくれている。・・・そう思うと涙が零れそうになる。

「俺だって・・・お前らに・・・救われて・・・」

涙が出てきて、呂律が回らなくなった。すると、みんなは近くによってきて静かに抱きしめてくれた。



「慎二、お前はもう少し自分に自信を持て」

「そうですわ、慎二さん。あなたは最低な人ではありませんわよ」

「私たちを救ってくたんだからさ」

「慎二が背負い込まなくてもいいんだよ？」

「だから、今度は私たちが救ってやる」

「慎二の心の闇から……ね」

「う．．．うあああああああああああ！！！！！！！！！」

俺は泣いた。子供のように泣いた。惨めだが、今は彼女達に頼りたかった。全てを許してもらえよう。気がしたから……

しばらく泣いていたが、気持ちも落ち着いてきた。

「みんなごめんな、惨めな姿見せて」

「慎二さん、あなたはわたくしに泣くことは惨めじゃないと言った  
んではなくて？」

「はは、それもそうだな」

俺はもう一度みんなを見渡した。

「みんな、ありがとう。みんなのおかげで大分心の荷が降りたよ。これからは俺もみんなと向き合う。だから、これからもよろしくな」

「ああ」

「もちろんですわ」

「そんな水臭いことってんじゃないわよ」

「こっちこそ、よろしくね」

「当たり前だ」

「うん・・・よろしくね」

どことなくだが、みんなの顔がとても眩しかった。俺は恥ずかしくなって、顔を反らした。

「あ、もしかして慎二、照れてるの？」

「ち、違うよ。そんなわけないだろ」

みんなは笑い出した。俺は反論するがその様子も笑われてしまった。

暫くそんな調子でいたら、簪が何かを思い出したらしく俺に話しかけてきた。

「ねえ慎二……約束……覚えてる？」

「約束？……ああ、まあ覚えてるよ」

「じゃあ、私と結婚してくれるの！」

ピキッ！

何かが固まる音が聞こえた。この場の空気だろう。俺は旅館に逃げよとするが肩を掴まれた。

「慎二、一体どこにいくんだ？」

「もう少しお話しませんか？」

「さっきの、一体どういうこと？」

「詳しく教えて欲しいな」

「おい、さっきのはどういうことだ。詳しく話せ」

みなさん目の光が消えてらっしゃる。異様に怖い……弁解しない。

「い、いや、みんな落ち着け。これはだな幼稚園での約束でな、本当の結婚とは違うんだ」



「だって、他人事なもの」

つく、それを言われたらおしまいだ。もう少しでバスが出発するところなのに一人の女性が乗り込んできた。

「鷹野慎二君と、織斑一夏君っている？」

「俺ですけど」

「はい・・・俺です」

「はじめまして、私は銀の福音の操縦者ナターシャ・ファイルスよ」

「「え？」」

困惑していると頬に唇が触れた。一夏も同じようにされていた。

「ちゅ・・・・・・・・これはお礼よ。ありがとうね、白いナイトさん達」

「え？あ、う？」

「じゃあね、ばーい」

困惑していると、背後から何か不穏な空気が・・・・・・・・

「慎二、頑張れ・・・・・・・・」

「ああ、できるだけ・・・・・・・・」

戻ろうとすると、予想通り皆さんが立っていた。

「そういえば慎二、喉乾いてるんだっけ？」

「え、ああ……うん」

「じゃあ」

みんな各々が持っていたジュースを取って

「」「はい、どうぞ！」「」

500ml×4が投げられてきた……。正直言う、重い。

ああ、死ねる。2Lってあんなに重いんだな。疲れてるからだだと  
余計か……。はあ、もうしんどい。何でこうなったんだろ。  
……。でも、いくらか進展はあったか。みんなとも仲直りできた  
し。しかも、来週からは夏休み！！！！やっほう！！！！今年は楽し  
い夏休みになりそうだ。

やっと、色々と終わったよ・・・・・・・・・・（後書き）

ちょっとグダグダになりましたよね。

すみません、この話で終わらせようと思ったところになりました



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1763x/>

---

IS ～インフィニット・ストラトス～ ・ ・ ・ ・ ・ こんなんで大丈夫か？

2011年11月14日21時59分発行